文部科学省
地(知)の拠点
文部科学省「地(知)の拠点整備事業」(平成25年度採択)

春日井市における世代間交流による地域活性化・学生共育事業

平成26年度 成果報告書

中部大学

はじめに

中部大学は、平成 18 年度に建学の精神「不言実行、あてになる人間」を信条とする基本理念・使命・目的を制定し、それを実現するために平成 20 年度以降全学的に新教育改革の検討を進めてきました。その大きな成果の一つが、旧教養教育を抜本的に改革した「全学共通教育」を平成 23 年度から発足させて、教育成果を挙げていることです。それと同時に、文部科学省の教育ＧＰ等の大型教育研究プロジェクトを数多く確保し、本学の教育内容を充実発展させる活動を行ってきました。また、以前から春日井市等の地域との連携活動を活発に行って、多くの実績を得てきました。

本学は、上記の教育改革と地域連携活動の実績を踏まえて、平成 25 年度に文部科学省「地（知）の拠点整備事業」（ＣＯＣ事業）の実施計画案を作成・申請しました。その結果、本学の「春日井市における世代間交流による地域活性化・学生共育事業」が、厳しい競争を乗り越えて採択されました。

本学のＣＯＣ事業の目的は、大学内で地域関連の正課教育（「地域共生実践」（２単位）等の授業科目の導入と既存の地域関連科目の活用等）を行うとともに、本学と地域（春日井市、高蔵寺ニュータウン等）が連携して６つの事業を展開し、将来、地域に貢献できる学生を育てること、併せて本事業を通して地域の活性化を図ることです。事業期間は平成 25 年度から 29 年度までの５年間、事業予算は全体で２億円弱です。実施組織は、本学の全学部（７学部及び全学共通教育部）と春日井市で、その他に春日井商工会議所、ＵＲ、ＮＰＯ法人等とも連携して活動を広げています。

本学のＣＯＣ事業の内容は、従来の大学内の知的・物的資源を活かした教育に加えて、地域や企業等の学外の様々な力も活用して学生を育てる教育であり、大学にとって新しい段階の教育改革に入ったと言えると思います。

本成果報告書は、平成 26 年度に本学で推進されたＣＯＣ事業の活動と成果をまとめたものであり、それらを学内外に広く発信するとともに、次年度以降の活動に活かしていきたいと考えています。

平成 27 年度は、本ＣＯＣ事業をさらに発展させ、成果を挙げていく最も重要な年なので、学内外の多くの方々には引き続きご支援・ご協力賜りますようお願い申し上げます。

平成 27 年 3 月

中部大学副学長・地域連携教育センター長
後 藤 俊 夫

−目　次−

はじめに　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　1

１．概要

（１）目的・目標・概要図　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　5

（２）実施体制・メンバー表　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　11

２．活動報告

（１）全体の活動成果　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　17

（２）ワーキンググループ報告

①　正課教育ＷＧ　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　33

②　報酬型インターンシップＷＧ　・・・・・・・・・・・・・・・・・・　35

③　コミュニティ情報ネットワーク事業ＷＧ　・・・・・・・・・・・・・　37

④　生活・住環境を考えるまちづくりＷＧ　・・・・・・・・・・・・・・　40

⑤　高齢者・学生交流・ＬＨＳ　ＷＧ　・・・・・・・・・・・・・・・・　42

⑥　シニア大学ＷＧ　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　45

⑦　高蔵寺ＮＴキャンパスタウン化ＷＧ　・・・・・・・・・・・・・・・　47

（３）地域志向教育研究経費の成果報告　・・・・・・・・・・・・・・・・・　49

３．評価

内部評価委員会、外部評価委員会の報告　・・・・・・・・・・・・・・・　89

４．新聞記事　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　97

１．概　要

（１）　目的・目標・概要図

１．概要

（１）-1　目的

中部大学（以下本学）「地（知）の拠点整備事業」:『春日井市における世代間交流による地域活性化・学生共育事業（以下本事業)』は平成 27 年 3 月に 5 年計画の第 2 年度を終了する。事業目的は 5 年間を通して設定されているため、ここでは 5 年間の事業目的の概要をあらためて記しておく。

本事業は初年度の報告書にも述べられているように**本学が「地域課題の解決」および「地域に役立つ人材養成」を目的とする地域再生・発展のための地（知）の拠点となる**ための**大学改革事業**である。またその**改革の成果を地域社会に還元し、地域社会に貢献していくことを目的**としている。

本学はその基本理念として、「『不言実行、あてになる人間』を信条とし、豊かな教養、自立心と公益心、国際的な視野、専門的能力と実行力を備えた、信頼される人間を育成するとともに、優れた研究成果をあげ、保有する知的・物的資源を広く提供することにより、社会の発展に貢献する。」こととしており、その社会貢献上の使命として、「さまざまな社会活動に参画し、大学が保有する知的・物的資源を活用することによって、地域を中心とする社会の福利向上と発展に貢献する」ことを学内外に明確にしており、地域貢献・地域連携は本来、本学の使命でもある。**本学はこの事業を通してさらに一層地方大学の社会的使命を探究し、持続可能な未来社会の創造とその教育のあり方をさらに力強く追求する。**

Ⅰ．全体としての目的

本事業全体の目的をさらに具体的に述べれば、地域社会の再構築のために必要な実践的人材の育成を目指し、現代社会の主役である高齢者にとって安心・安全で豊かな社会づくり、まちづくりを春日井市に展開する。その成果を春日井地域に還元し、都市づくりを進める。さらに、その成果と知識を広く日本社会全体に拡大することで日本の発展に貢献していく。こうした実践活動を学生自身が担っていくことで、学生自身が実践的知識を深め、支援技術を学び、前述の地域であてになる人材に育っていく。

Ⅱ．教育上の目的

地域社会の再構築のために必要な実践的人材の育成を目指す。

①「地域連携教育改革・教育システムの構築」

現在まで進めてきた教育改革をさらに発展させ、地域社会に役立つ人間となるための行動計画を持てるよう、全学共通教育の科目として**新たに『地域共生実践』を設置し**、学部・学科にも地域志向関連科目を設置する。こうして基礎教育と専門教育を交互に発展的に教育し、地域社会再構築のために必要な実践的人材を育成するための教育改革を目的とする。さらに**最終的に中部大学が認定する“あてになる人間＝『地域創成メディエーター』”の育成**を目的とする。

②「報酬型インターンシップ（就業体験）」

春日井商工会議所と連携協定を締結し、単なる就労ではなく、人材育成プログラムとして意識的に学生を教育するインターンシップ型の就労システムを構築する。

さらに③「コミュニティ情報ネットワーク」事業、④「生活・住環境を考えるまちづくり」事業でも学生を研究活動に参加させることで、地域の課題を解決していく能力の育成にも資することが目的ともなっている。⑤「高齢者と学生の交流、高齢者宅へのLearning Home Stay（ＬＨＳ）」、⑥「シニア大学（Chubu University Active Again College：ＣＡＡＣ）」、⑦「高蔵寺ニュータウンのキャンパスタウン化」といった地域貢献活動においても学生を社会貢献の実践に参加させ、高齢者と交流させることで、高齢化社会の地域課題を理解し、積極的に課題解決策を考える能力を涵養することも目的としている。

Ⅲ．研究上の目的

地域活性化の課題研究として以下の研究の推進を目的とする。

③「コミュニティ情報ネットワーク事業」

地域住民に役立つコミュニティ情報ネットワークを構築し、地域がＩＴ化により豊かで便利な地域として発展するための情報システムの開発研究を進める。

④「生活・住環境を考えるまちづくり」

春日井市のまちづくりの課題解決に協働し、地域の住民が安心して快適な生活を送れるようになることを目的に社会基盤の整備、地域環境の改善に関する開発研究を行う。

その他社会貢献活動関連研究

「高齢者−学生交流・ＬＨＳ」事業や「シニア大学」の開設などの社会貢献に関連しながら、地域の課題をさまざまな観点から調査研究し、地域活性化と高齢者の支援の手段を見いだしていくことを目的とした研究活動も並行して行う。

Ⅳ．社会貢献上の目的

改革の成果を春日井を中心とした地域に還元し、地域の再生・活性化を支援するため、以下の地域社会貢献を目的とする。

①「地域連携教育改革・教育システムの構築」

地域に役立つ人材を教育機関として養成し地域に送り出すことで社会に貢献する。地域の課題を現実的に理解し、解決のために行動を起こすことができる“あてになる人材”を養成する。そして地域のコミュニティ活動の中心人物であり、リーダーとなることのできる知識と問題解決能力を持ち、良好な対人関係を維持できる人材を地域に送り出す。これは教育機関として重要な社会貢献活動である。さらに本事業では、春日井市の課題克服のための解決策を中部大学が軸となって展開し、現代社会の最重要課題である高齢化社会の以下の課題解決に挑戦する。

⑤「高齢者と学生の交流、高齢者宅へのLearning Home stay（ＬＨＳ）」

高齢世帯や独居高齢者の見守りや生活支援を目的に若者による高齢者との交流や同居活動を進める。

⑥「シニア大学（Chubu University Active Again College ： ＣＡＡＣ)」
　高齢者の健康づくりや再雇用のための技術資格取得を目的に実践教育を行う。
⑦「高蔵寺ニュータウンのキャンパスタウン化」
　高齢化で衰退した高蔵寺ニュータウンを活性化する目的で中部大学のキャンパス機能を高蔵寺ニュータウン内に拡大し、地域と大学が融合した若者も生活する場にしていく。

その他、③「コミュニティ情報ネットワーク」事業、④「生活・住環境を考えるまちづくり」事業でも研究活動を通して地域社会を安全・安心で便利なものとしていくことで地域社会に貢献していく。

（1）-2　目標

前項の目的を達成するため、今年度の目標を以下のように設定した。

Ⅰ．全体

①ＣＯＣ推進委員会委員とワーキンググループの拡充
　昨年度設置された副学長をセンター長とする地域連携教育センター（ＣＯＣセンター）と各事業活動リーダーおよび各学部代表委員からなるＣＯＣ推進委員会の機能を拡大し、活動内容に応じてＣＯＣ推進委員会内のワーキンググループを随時拡充し（実施体制メンバー表参照)、本事業全体の推進にあたる。
②「地（知）の拠点整備事業」の学内と春日井市住民への広報活動
　1）「地（知）の拠点整備事業」の学内周知・広報活動のために 25 年度の活動報告会を上半期に学内で実施する。
　2）春日井市を中心とする地域住民への広報活動のために昨年度に引き続き地域連携市民フォーラムを下半期に学外の春日井市内で実施する。
③春日井市との定期的協議の場の設定
　昨年度に引き続き、春日井市との定期協議の場を設定し、自治体との連携を図る。
④ＮＰＯ団体との定期的協議の場の設定
　ＮＰＯ連携協議会を設置し、ＮＰＯの主要メンバーを学外委員に委嘱する。
⑤地域志向教育研究経費による教育研究の推進
　昨年度に引き続き地域志向教育研究経費を設定し、教育研究の推進を図る。
⑥内部評価委員会機能の強化と委員会の開催
　事業活動を報告しそれに基づいて評価を受けるために学部長会のメンバーに春日井市を加えて内部評価委員会を拡充する。年度末には内部評価委員会を開催し、事業評価を行う。
⑦外部評価委員会の開催
　大学・研究機関、行政、商工会議所の有識者からなる外部評価委員会を開催し、本事業の第三者評価を得ることで、事業の修正・改善に役立てる。

Ⅱ．教育

教育活動としては地域連携教育の推進と報酬型インターンシップの確立を目指す。

①地域連携教育改革を実施し、教育システムを構築する。具体的には以下の各項の達成を目標とする。

1）新設科目：地域共生実践の開講準備をする。

2）各学部・学科に新設する科目について、各学部・学科で具体化する。

3）地域創成メディエーターへの導きを確立し、学生の成長発表会（仮称）を開催する。

②報酬型インターンシップ制度を確立する。そのために以下の各項の達成を目標とする。

1）春日井商工会議所との連携強化。

2）広報の充実化をはかる。

Ⅲ．研究

研究活動としてコミュニティ情報ネットワークの構築と高蔵寺ニュータウンを中心としたまちづくり活動を展開する。

③コミュニティ情報ネットワーク構築

1）コミュニティ情報ネットワークの利用を普及するための啓発活動を展開する。

2）医師会や春日井市との連携を強化し、システムの利用価値を向上させる。

3）本人確認手段とセキュリティ強化策をシステムに実装していく。

4）NPO の地域活動支援として、情報受発信システムの構築と利用価値を向上させる。

5）シニア大学の講義内容を、学外で再学習するための講義映像配信システムの開発を行い、運用する。

④生活・住環境を考えるまちづくり

1）交通・移動システムを試行していく。

2）既設住宅の転用（高齢者用、障害者用など）策を実施していく。

3）スマートシティとしての可能性とその実現方法を検討し、実施していく。

4）住民、学生が協調したまちづくりの可能性を検討する。

Ⅳ．社会貢献

社会貢献活動として高齢者-学生交流・Learning Home stay（ＬＨＳ）事業、シニア大学、高蔵寺ニュータウンのキャンパスタウン化の各活動を軌道に乗せる。

⑤高齢者-学生交流・Learning Home stay（ＬＨＳ）事業

1）高齢者-学生交流活動の定期的開催：交流テーマを複数の学部から出すことにより、多くの学部からの学生参加を促進する。

2）地域における学生主導の健康増進教室の開催にも取り組む。

3）世代間交流活動がもたらす教育効果を検証し、教育プログラムの充実を図る。

4）学生教育セミナーの開催：世代間交流ならびにＬＨＳの意義を学生に啓発するとともに、ＬＨＳ体験を共有できる機会を設ける。

5）ＬＨＳの実績増加：25 年度の実績により地域リーダーを委嘱し、ＬＨＳの啓発と協力者の増大をはかる。

6）ＬＨＳの受け入れ条件とマッチング方法を改善し、進化させる。

⑥シニア大学の開設

1）シニア大学（ＣＡＡＣ）を開設する。

2）カリキュラムの充実を検討する。

⑦高蔵寺ニュータウンのキャンパスタウン化

1）中部大学附属図書館の分館の設置に向けて議論を展開する。

2）中部大学高蔵寺ニュータウン事務室（申請書では、地域連携教育センターと称していた施設の一部）を設置する。

春日井市における世代間交流による地域活性化・学生共育事業

春日井市の知の拠点＝**中部大学**

学部：7学部（29学科）、大学院：6研究科
学生数：約10000人、教員数：約500人

地域の方々と学生、地域と大学がキャンパスの壁を越えて融合し、持続可能な新しい未来社会とその教育を春日井の地に実現する。

中部大学は平成26年に開学50周年を迎える。中部大学ならやれる！中部大学が成功させる！

正課教育

正課教育との連携に基づいた課外教育

“らせん”構造
複合的学修システム

あてになる人間の育成
中部大学認定
＜地域創成メディエーター＞

地域との関り体験を通して他者を理解し、自身の価値観をみつめる

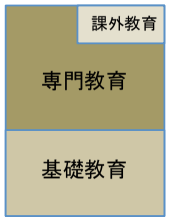
春日井市

- 自治体
- 市民
- 地域
- 企業
- 学校（小・中・高）
- その他

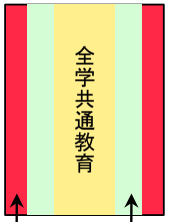
要請・課題・ニーズ

教育プログラム体系の新展開

従来の構成



新たなプログラム構成



正課教育との連携に基づいた課外教育

学部・学科専門科目

本プログラムでは、全学共通教育科目に『地域共生実践』（2単位）を新設する。さらに学部・学科において、地域連携に関する科目・演習等を設置する。

本プログラム推定参加学生数：
25年度：約50名、26年度：約80名
27年度：約400名
28年度：約600名
29年度：約800名
（以降、順次増加する。）

報酬型インターンシップ
生活・住環境を考えるまちづくり
キャンパスタウン化
高齢者・学生交流 Learning Home Stay
シニア大学（CAAC）
コミュニティ情報ネットワーク
<課題>認定基準の明確化

春日井市にある高蔵寺ニュータウンを課題解決のモデル地域と位置づけ、包括的な人材育成と地域活性化事業を中部大学と自治体が協力して実施する。
事業開始2年を目処に、本モデルを春日井市全域に発展させる予定である。
事業終了時には、春日井市が活性化され、人材が育つ。

＜教育改革＞
中部大学では、平成20年度以降大幅な教育改革を進めてきた。本事業では、更なる教育改革として、全学共通教育及び学部の正課の地域関連科目を導入した**『新しい教育課程』**を実施する。さらに、全学総合教育科を発展的改組し、**『全学総合COC教育科』**を新たにスタートさせる計画である。

本プログラムで育成した、中部大学認定『地域創成メディエーター』が、人と人との絆をつくる介在をし、活力あるコミュニティを形成する。

中部大学のCOCとしての目標

- ■“地域”と言う名のシャワー（刺激）で学生を育てる。
- ■地域だけでは解決できない課題を、大学の持つシーズを活かして、地域と協働で取り組む。
- ■“まちづくり”の不可欠な資源が次代を担う若者である。この意識を高め、地域と共に育てる。
- ■地域において優しい心配りができる、真のリーダー養成を目指す。
- ■地域からあてにされる大学を目指す。
- ■地域連携において、春日井モデルを明確にし、このモデルを全国に伝える。

まちづくりを通して、共に学び（共学）・共に育つ（共育）!!

地域創成メディエーターにおけるアウトカムの例

創造
- •持続可能な日本社会を創造するために有用な新しい教育構造を提示できる
- •世代間交流により意図的・政策的・教育的プログラムが創造できる
- •新たな視点による「まちづくり」の意義を創造する事ができる
- •高齢者対策にとって積極的で画期的な取り組みができる
- •新たな価値を創造する事ができる
- •情報共有システムに必要な技術を調査することができる
- •調査した技術を整理することができる
- •老若男女が同一の環境で学ぶ場を提供できる
- •学生本人が人生プランを創造することができる

協働
- •春日井市の活性化に寄与できる
- •プロジェクトメンバーの一員として，システムを運用できる
- •地域の方々と対話・議論し，システムの在り方を議論できる
- •地域社会を支える担い手としての使命感を育成することができる
- •異世代の結束は地域を活性化し、高齢社会問題の多くを解決できる
- •高齢者と若者の相互理解が、異なる世代同士の結束をもたらすことができる
- •共に支え合う、共に学び合う、共に理解し合うことを通じて社会に参画することができる

自立
- •社会人としての考え方や能力を伸ばすことができる
- •一人一人が多様な個性・能力を伸ばす事ができる
- •対人関係形成能力を改善し自立心を養うことができる
- •世代間交流により知的にも道徳的にも成長することができる
- •地域貢献することにより目的意識や学習意欲を高めることができる
- •世代を超え、相互に切磋琢磨し、いたわりの心と自立心を養う事ができる
- •地域特有の課題を見つけ出しその解決策を考える能力を伸ばす事ができる

学内の実施体制

学長主導の基、COC担当理事(兼)副学長を置き、本取組みを統括し、推進する。

協力・提案・シーズ

（２）実施体制・メンバー表

（２）実施体制・メンバー表

本事業を全学的に推進・実施するために以下のように学長を総括責任者とし、「地（知）の拠点整備事業（ＣＯＣ）」担当副学長（理事）が本事業を取り纏め、推進担当責任者となる全学体制を構築。実際の事業はＣＯＣ担当副学長を委員長とする全学部からの委員を含むＣＯＣ推進委員会を設置し推進にあたっている。またＣＯＣ推進委員会内に活動毎に 10 のワーキンググループを設け各活動を展開し、事務部門は地域連携教育センター（部長以下７名の専従職員）で事業全体の事務的管理にあたっている。（以下、中部大学ＣＯＣ事業体制図 および 「地（知）の拠点整備事業（ＣＯＣ）」ＷＧメンバー表　参照）

中部大学 ＣＯＣ事業 体 制 図

（平成 27 年 3 月現在）

学　長

COC担当理事
後藤副学長

関係部署

学生支援課
教務支援課
キャリア支援課
ｴｸｽﾃﾝｼｮﾝｾﾝﾀｰ
入学ｾﾝﾀｰ制作課
研究支援課
各学部事務室

地域連携教育センター（ＣＯＣセンター）

センター長（副学長）	後藤　俊夫
副センター長	杉村　公也
部長	庄山　正志
課長	梅村　勝利
担当課長	大橋　俊雄
担当課長(兼務)	宮原　清
課員	丹羽ゆかり
課員	石黒　幸子
課員	平野紀美子
課員	林　琴江

ＣＯＣ推進委員会

委員長（副学長・センター長）	後藤　俊夫
副センター長	杉村　公也
工学部	磯部　友彦
経営情報学部	山北　晴雄
国際関係学部	羽後　静子
人文学部	林　上
応用生物学部	小川　宣子
生命健康科学部	戸田　香
現代教育学部	高木　徹
生命健康科学部（全学共通教育部）	伊藤　守弘
生命健康科学部	對馬　明
学生部長補佐	櫻井　誠
工学部	勅使川原誠司
工学部	保黒　政大
経営情報学部	山下　裕丈
人文学部	末田　智樹
応用生物学部	上野　薫
応用生物学部	横山　信治
現代教育学部	大河内　修
地域連携教育ｾﾝﾀｰ	庄山　正志
学生教育部	木下　拡就
学生教育部	田中　恭一
工学部事務室	鶴見　直城
ｴｸｽﾃﾝｼｮﾝｾﾝﾀｰ	種村　育人
入学ｾﾝﾀｰ制作課	泉田　真吾

平成27年3月現在

地（知）の拠点整備事業（ＣＯＣ）ＷＧメンバー

※印は平成26年度から新たにメンバーになった者

１．地域志向教育研究経費ＷＧ

委員長	後藤　俊夫	（副学長）
副委員長	杉村　公也	（生命健康科学部・作業療法学科　特任教授）
委　員	磯部　友彦	（工学部・都市建設工学科　教授）
同	伊藤　守弘	（生命健康科学部・生命医科学科　准教授）
同	櫻井　誠	（学生部長補佐／工学部・応用化学科　教授）
同	對馬　明	（生命健康科学部・理学療法学科　准教授）
同	戸田　香	（生命健康科学部・理学療法学科　准教授）
同	保黒　政大	（工学部・電子情報工学科　准教授）

２．正課教育ＷＧ

委員長	伊藤　守弘	（生命健康科学部・生命医科学科　准教授）
委　員	杉村　公也	（生命健康科学部・作業療法学科　特任教授）
同	羽後　静子	（国際関係学部・国際関係学科　教授）
同	戸田　香	（生命健康科学部・理学療法学科　准教授）
同	上野　薫	（応用生物学部・環境生物科学科　講師）
同	山羽　基	（工学部・建築学科　教授）
同	今枝　健一	（工学部・応用化学科　教授）
※　同	竹内　環	（生命健康科学部・生命医科学科　助手）
※　同	吉村　和也	（応用生物学部・食品栄養科学科　准教授）
※　同	大日方五郎	（工学部・ロボット理工学科　教授）
同	田中　恭一	（教務支援課長）
	（後藤　俊夫	（副学長））

３．報酬型インターンシップＷＧ

委員長	櫻井　誠	（学生部長補佐／工学部・応用化学科　教授）
委　員	栗濱　忠司	（学生部長／工学部・電子情報工学科　教授）
同	石田　康行	（教務部長補佐／応用生物学部・応用生物化学科　准教授）
同	山口　直樹	（キャリア支援課　部長補佐／経営情報学部・経営学科　教授）
同	對馬　明	（生命健康科学部・理学療法学科　准教授）
同	武田　明	（生命健康科学部・臨床工学科　講師）
同	木下　拡就	（学生支援課長）
同	酒向　麻由	（学生支援課）
オブザーバー	後藤　俊夫	（副学長）

４．コミュニティ情報ネットワーク事業WG

委員長	保黒　政大	（工学部・電子情報工学科　准教授）
委　員	杉村　公也	（生命健康科学部・作業療法学科　特任教授）
同	富永　敬三	（生命健康科学部・理学療法学科　講師）
同	前田　和昭	（経営情報学部・経営情報学科　教授）
同	中路　純子	（生命健康科学部・作業療法学科　准教授）
同	河内　信幸	（国際関係学部・国際文化学科　教授）
※　同	宮下　浩二	（生命健康科学部・理学療法学科　准教授）

５．生活・住環境を考えるまちづくりWG

委員長	磯部　友彦	（工学部・都市建設工学科　教授）	
委　員	豊田　洋一	（工学部・建築学科　教授）	【まちづくり、家づくり】
同	松山　明	（工学部・建築学科　准教授）	【まちづくり、家づくり】
同	内藤　和彦	（工学部・建築学科　教授）	【高齢者、福祉】
同	山羽　基	（工学部・建築学科　教授）	【スマートタウン、省エネ】
同	勅使川原　誠司	（工学部・建築学科　教授）	【防災安全】
同	杉井　俊夫	（工学部・都市建設工学科　教授）	【防災】
同	武田　誠	（工学部・都市建設工学科　教授）	【防災】
同	磯部　友彦	（工学部・都市建設工学科　教授）	【交通】
※　同	伊藤　睦	（工学部・都市建設工学科　准教授）	
※　同	余川　弘至	（工学部・都市建設工学科　助教）	
同	岡本　肇	（中部高等学術研究所　講師）	【まちづくり】
同	行本　正雄	（工学部・機械工学科　教授）	
※　同	甲田　道子	（応用生物学部・食品栄養科学科　准教授）	
※　同	池澤　俊治郎	（工学部・電子情報工学科　教授）	

６．高齢者・学生交流・ＬＨＳ　ＷＧ

委員長	戸田　香	（生命健康科学部・理学療法学科　准教授）
ｽｰﾊﾟｰﾊﾞｲｻﾞｰ	杉村　公也	（生命健康科学部・作業療法学科　特任教授）
委　員	栗濱　忠司	（学生部長／工学部・電子情報工学科　教授）
同	内藤　和彦	（附属三浦記念図書館長／工学部・建築学科　教授）
同	河内　信幸	（国際関係学部・国際文化学科　教授）
同	長島　万弓	（応用生物学部・食品栄養科学科　教授）
同	櫻井　誠	（学生部長補佐／工学部・応用化学科　教授）
同	梶　美保	（現代教育学部・幼児教育学科　准教授）
同	堀　文子	（生命健康科学部・作業療法学科　准教授）
※　同	佐藤　友美	（人文学部・心理学科　講師）
※　同	杉本　英晴	（人文学部　助教）
※　同	宮本　靖義	（医療技術実習センター　講師）

同	矢澤　浩成	（医療技術実習センター　講師）
同	谷利　美希	（医療技術実習センター　助手）
※　同	城　　憲秀	（生命健康科学部・保健看護学科　教授）
※　同	野田　明子	（臨床検査技術教育・実習センター　教授）
同	木下　拡就	（学生支援課長）
同	原田　智之	（学生支援課／ボランティア・ＮＰＯセンター担当）

７．シニア大学ＷＧ

委員長	對馬　明	（生命健康科学部・理学療法学科　准教授）
委　員	尾方　寿好	（生命健康科学部・スポーツ保健医療学科　准教授）
同	伊藤　守弘	（生命健康科学部・生命医科学科　准教授）
同	甲田　道子	（応用生物学部・食品栄養科学科　准教授）
同	櫻井　誠	（工学部・応用化学科　教授）
同	羽後　静子	（国際関係学部・国際関係学科　教授）
同	藤丸　郁代	（生命健康科学部・スポーツ保健医療学科　准教授）
同	山北　晴雄	（経営情報学部・経営会計学科　教授）
同	林　　上	（人文学部・歴史地理学科　教授）
同	末田　智樹	（人文学部・歴史地理学科　准教授）
同	町田　千代子	（応用生物学部・応用生物化学科　教授）
同	根岸　晴夫	（応用生物学部・食品栄養科学科　教授）
同	堀田　典生	（生命健康科学部・スポーツ保健医療学科　講師）
※　同	宮本　靖義	（医療技術実習センター　講師）
同	市原　幸造	（キャリア支援課　次長）
同	種村　育人	（エクステンションセンター　次長）
※　同	稲ケ部　正幸	（附属三浦記念図書館事務部　次長）
※　同	木下　拡就	（学生支援課　課長）
同	桐山　まり	（教務支援課）
同	宮原　清	（生命健康科学部事務室　事務長）
ｽｰﾊﾟｰﾊﾞｲｻﾞｰ	杉村　公也	（生命健康科学部・作業療法学科　特任教授）

８．高蔵寺ＮＴキャンパスタウン化ＷＧ

委員長	櫻井　誠	（学生部長補佐／工学部・応用化学科　教授）
委　員	栗濱　忠司	（学生部長／工学部・電子情報工学科　教授）
同	戸田　香	（生命健康科学部・理学療法学科　准教授）
同	羽後　静子	（国際関係学部・国際関係学科　教授）
同	内藤　和彦	（附属三浦記念図書館長／工学部・建築学科　教授）
同	早川　紀朱	（工学部・建築学科　准教授）
※　同	福井　弘道	（中部高等学術研究所　教授）
同	木下　拡就	（学生支援課長）
※　同	蓑島　智子	（附属三浦記念図書館事務部　図書課長）

※　同　　大竹　雄平　（学生支援課）
　　同　　原田　智之　（学生支援課）
　　（後藤　俊夫　（副学長））

９．地域志向教育研究経　その他課題ＷＧ

委　員　　采睪　真澄　（現代教育学部・幼児教育学科　准教授）
　同　　梶　美保　（現代教育学部・幼児教育学科　准教授）
※　同　　上野　薫　（応用生物学部・環境生物科学科　講師）

１０．広報ＷＧ

委員長　　保黒　政大　（工学部・電子情報工学科　准教授）
委　員　　杉村　公也　（生命健康科学部・作業療法学科　特任教授）
　同　　伊藤　守弘　（生命健康科学部・生命医科学科　准教授）
　同　　櫻井　誠　（工学部・応用化学科　教授）
※　同　　泉田　真吾　（入学センター制作課）
　　（後藤　俊夫　（副学長））

２．活 動 報 告

（１）全 体 の 活 動 成 果

２．活動報告

（１）全体の活動成果

事業活動はＣＯＣ推進委員会の活動毎のワーキンググループを中心に行なわれてきたが、それらに共通する課題や統括する活動は副学長・センター長を中心にＣＯＣ推進委員会等ＣＯＣ全体で取り組んできた。それらの成果は以下のようである。

１）「地（知）の拠点整備事業」の学内と春日井市住民への広報・周知活動を実施した。

今年度は事業 2 年目となるので、活動内容をさらに広く学生、教職員、市民に周知し、活動参加者を増加させることに努めた。

(1)25 年度**ＣＯＣ活動報告会**実施（別紙①参照）

6 月 25 日（水）学内で開催し、正課教育活動を含む 7 つの活動プログラムのワーキンググループのリーダーが 25 年度の活動報告をした。一般市民参加者 10 名を含む 70 名が参加した。

(2) ＣＯＣホームページの拡充

各ワーキンググループの活動内容を中心に適宜更新し拡充した。今年度のアクセス数は 16,050 回となった。

(3) 中部大学フェアのブース出展

9 月 18 日（木）開催の中部大学フェアにＣＯＣ7 つの事業の紹介ブースを出展した。約 50 名がＣＯＣの紹介ブースに来場した。

(4) **地域連携市民フォーラム**開催（別紙②参照）

10 月 11 日（土）春日井市東部市民センターホールにおいて、地域連携市民フォーラムを開催した。講師に東京大学高齢社会総合研究機構 特任教授の秋山弘子氏を迎えて、「長寿社会を生きる」と題した講演に加え、本学工学部 都市建設工学科の磯部友彦教授による「パワースポットとしての高蔵寺ニュータウン　～都市を立地条件から見つめる～」と題した講演を行った。一般市民 103 名、教職員 17 名が来場した。

(5) 平成 26 年度市民アンケート実施（別紙③参照）

地域連携市民フォーラムに参加した一般市民 103 名にＣＯＣアンケートを依頼し、79 名から回答を得た。ＣＯＣ事業については約 30%の人が春日井市の広報誌で知り、さらに約 40%の人が地域連携市民フォーラムやその他の広報チラシで知ったと回答した。市民へのチラシ配布活動の重要性が配付方法の改善と共に重要であると認識された。

２）**地域志向教育研究の公募研究を実施**した。

22 件の研究課題を採択し、研究活動を支援（総額 719 万円）した。詳細は、「２．（３）地域志向教育研究経費の成果報告」に記載した。

３）**ＣＯＣ推進委員会**をさらに拡充した。

(1)今年度新たに地域志向教育研究に採択された研究者も各ワーキンググループの委員として参画することとした。その結果新たに 14 名の委員が任命された。ＣＯＣ事業に係わる教職員数は延べ 110 名となった。

(2)地域創成メディエーター判定会議を設置し、候補者 4 名を選出。なお、候補者はＣＯＣ推進委員会で地域創成メディエーターと認定された。

(3)ＣＯＣ推進委員会を定期的に６回開催した。各ワーキンググループリーダーと各学部代表委員などからなるＣＯＣ推進委員会（総数 25 名）を隔月毎に開催し、各活動の報告と重要事項の審議にあたった。

４）**地域創成メディエーター学生発表会「＋エクスプレッション」**開催（別紙④参照）

2 月 23 日（月）本学 51 号館ラウンジにおいて、中部大学地域創成メディエーター学生発表会「＋エクスプレッション」を開催した。

地域創成メディエーター資格認定の最終課題「＋エクスプレッション」は講義での規定単位取得に加え、キャンパスを地域に広げた課題体験に参加・実践した学生たちが、まちの再生や地域活性化などの特有の課題に地域と協働して現場で解決策を考えて取り組んだ過程と成果を発表。このほか、ポスターセッションや交流会を通じて地域の方々や他大学の教職員などとの意見交換を行った。参加者は、一般市民 64 名、教職員 38 名、学生 28 人が来場した。

参加者にアンケートを依頼し、75 名から回答を得た。60 歳以上の一般参加者約 35%、29 歳以下の学生等約 25%と幅広い層の参加があった。全体の感想について約 90%の方より「とても良かった・良かった」と回答があった。（別紙⑤参照）

５）学部長会メンバー、春日井市からなる**内部評価委員会**を開催した。

1 月 28 日（水）に学部長会構成員からなる内部評価委員会が開催され、26 年度の事業活動の内部評価が行われた。今後は養成された人材である地域創成メディエーターとシニア大学（ＣＡＡＣ）修了生が地域再生など社会に貢献していく必要性が改めて認識された。

６）大学・研究機関、行政、企業・商工会議所の分野の有識者からなる**外部評価委員会**を開催した。

3 月 2 日（月）、別掲の外部評価委員による外部評価委員会が開催された。詳細は「３．評価　内部評価委員会、外部評価委員会の報告」に記載した。

７）**ＮＰＯ連携協議会**の設置

ＮＰＯ側委員（2 名）とＣＯＣ副センター長及び各活動リーダー委員（5 名）からなるＮＰＯ連携協議会を定期開催（4 月 10 日，6 月 12 日，7 月 31 日，10 月 8 日，12 月 3 日，1 月 28 日，3 月 19 日）した。

各開催日の前週に行われたＣＯＣ推進委員会の報告を中部大学側委員が行い、それに引き続きＮＰＯ側委員から地域の活動や市民、ＮＰＯ諸団体の活動報告が行われた。さらに予定の活動計画について双方の協力のあり方を協議した。自由懇談ではそれぞれの抱える課題について情報やアドバイスを交換した。

８）**採択他大学との交流活動**を次の大学と実施した。

(1) ＣＯＣ事業採択校との情報交換会（岐阜大学はじめ中部圏 14 大学）

9 月 10 日岐阜大学で中部圏 14 大学のＣＯＣ採択校が参集して情報交換会が開催された。本学は先発校として 1 年間の活動の報告を行った。

(2) 中部地区ＣＯＣ事業採択校「学生交流会」に参加

3 月 5 日岐阜駅前「じゅうろくプラザ大会議室」にて、岐阜大学が幹事で、12 大学が集結し各大学の代表学生が地域での活動やその成果を発表した。本学からは、生命健康科学部スポーツ保健医療学科２年の翠川凌が「今はじまった　自分を創造する道」と題して発表を行った。

別紙①　ＣＯＣ活動報告会 チラシ

文部科学省 地(知)の拠点　文部科学省「地(知)の拠点整備事業」(COC事業)（平成25年度採択）

春日井市における世代間交流による 地域活性化・学生共育事業

まちづくりを通して、共に学び(共学)・共に育つ(共育)!!

◆◆平成25年度 ＣＯＣ活動報告会◆◆

文部科学省「地（知）の拠点整備事業」に採択された本学ＣＯＣ事業の平成２５年度の活動と成果について報告会を開催しますので、是非ともご参加ください。

日時：平成26年 6月 25日（水）15：30～17：30

場所：中部大学 リサーチセンター ２階大会議室

プログラム

［*司会*: 杉村 公也　教授
（地域連携教育センター副センター長）］

◇15:30～15:35　*あいさつ*　後藤 俊夫　副学長（地域連携教育センター長）

◇15:35～16:35　*活動報告（①～④）*

15:35～15:50	15:50～16:05	16:05～16:20	16:20～16:35
①正課教育	②報酬型インターンシップ	③コミュニティ情報ネットワーク事業	④生活・住環境を考えるまちづくり
伊藤 守弘　准教授（生命健康科学部）	櫻井　誠　教授（工学部）	保黒 政大　准教授（工学部）	磯部 友彦　教授（工学部）

（休憩　10分）

◇16:45～17:30　*活動報告（⑤～⑦）*

16:45～17:00	17:00～17:15	17:15～17:30
⑤高齢者・学生交流・LHS	⑥シニア大学	⑦高蔵寺NTキャンパスタウン化
戸田　香　准教授（生命健康科学部）	對馬　明　准教授（生命健康科学部）	櫻井　誠　教授（工学部）

（質疑応答）

■お問い合わせ先
中部大学　地域連携教育センター
Tel:0568－51－1763　Fax:0568－51－4659　E-mail:coc@office.chubu.ac.jp

別紙②　地域連携市民フォーラム チラシ

文部科学省　平成25年度「地（知）の拠点整備事業」選定取組

春日井市における世代間交流による地域活性化・学生共育事業

文部科学省 地（知）の拠点

まちづくりを通して共に学び 共学 共に育つ 共育

第2回 Chubu University

中部大学 地域連携 市民フォーラム

Kasugai City

2014 2nd in Autumn

参加無料

講演テーマ

長寿社会に生きる

東京大学 高齢社会総合研究機構 特任教授

秋山　弘子 氏

パワースポットとしての高蔵寺ニュータウン ～都市を立地条件から見つめる～

中部大学 工学部 都市建設工学科 教授

磯部　友彦

開催日時

平成26年

10月11日（土）

14:00～16:10（13:30 開場・受付）

開催場所

春日井市 東部市民センター ホール

春日井市中央台2-2-1 TEL.0568-92-8511

【交通のご案内】

■JR中央本線「高蔵寺」駅下車（名古屋駅より快速で約26分）

■名鉄バス、高蔵寺駅北口のりばより「高森台」（約8分）下車、徒歩約4分

▶4番のりば…かみや団地口、福祉の里、高森台北

▶4番のりば…桃花台センター（春日台経由）行

▶5番のりば…石尾台南

主催 中部大学　後援 春日井市

中部大学

文部科学省　平成25年度「地（知）の拠点整備事業」選定取組

春日井市における世代間交流による地域活性化・学生共育事業

春日井市と連携し、大学の「人材」「技術」「知」を活用して、地域の活性化に取り組みます。

平成25年度、中部大学の「春日井市における世代間交流による地域活性化・学生共育事業」が、文部科学省の「地（知）の拠点整備事業（大学COC事業）」に採択され、全学的に推進しています。この事業は、自治体、地域ＮＰＯ、住民が大学のキャンパスの壁を越えて融合し、持続可能な新しい未来社会とその教育を春日井の地に実現することを目的にしています。そのために、この事業の内容・趣旨を地域の皆様にお知らせし、事業への協力と積極的、自主的関与を依頼する機会として市民フォーラムを開催する運びとなりました。

※大学COC（Center of Community）事業は、文部科学省が推進する「地（知）の拠点整備事業」で、国が地域の課題解決に取り組む大学を支援するものです。

第2回 中部大学 地域連携市民フォーラム／開催プログラム

13:30～　開場・受付開始

14:00～14:30　開会挨拶　中部大学長　山下　興亜

来賓挨拶　春日井市長　伊藤　太 氏

来賓挨拶　文部科学省 高等教育局 大学振興課

14:30～15:15　講演 ❶

長寿社会に生きる

日本では永らく人生50年といわれてきたが、世界最長寿国の日本人女性の平均寿命は86年を超え、人生90年時代が到来した。長寿社会に生まれた私たちの課題は大きく分けて2つある。一つは90年の人生を設計して生きるという個人レベルの課題である。人生50年時代と人生90年時代の生き方はおのずと異なる。人生が倍近く長くなっただけでなく、人生を自ら設計する時代になった。もう一つは社会のインフラの見直しという社会レベルの課題。私たちが住む「まち」や社会システムは若い世代が多く人口がピラミッド型をしていた時代につくられたもので、これから日本が直面する超高齢社会のニーズにはとても対応できない。90年の人生を健康で、もてる能力を最大限に活用して、自分らしく生きることは、長寿社会に生れた私たちに与えられた特典であり、チャレンジでもある。長寿社会の課題と可能性を科学的データや取り組みの具体例を紹介してお話したい。

東京大学 高齢社会総合研究機構 特任教授

秋山　弘子 氏

【講師プロフィール】
イリノイ大学でPh.D（心理学）取得、米国の国立老化研究機構(National Institute on Aging) フェロー、ミシガン大学社会科学総合研究所研究教授、東京大学大学院人文社会系研究科教授（社会心理学）、日本学術会議副会長などを経て、現在、東京大学高齢社会総合研究機構特任教授。専門＝ジェロントロジー（老年学）。高齢者の心身の健康や経済、人間関係の加齢に伴う変化を20年にわたる全国高齢者調査で追跡研究。近年は超高齢社会のニーズに対応するまちづくりにも取り組む。超高齢社会におけるよりよい生のあり方を追求。

15:20～16:05　講演 ❷

パワースポットとしての高蔵寺ニュータウン
～都市を立地条件から見つめる～

都市を作ったのはだれか?と問えば様々な解答が出てくる。王様などの為政者、深い知識をもつ設計者、生活や仕事に必要な設備・施設を作る人、そして、その地域で工夫を重ねながら暮らし続ける人々など。そもそも、都市の成否はその土地固有の条件に大きく作用される。立地条件のわかる人が関与したり住んだりする都市は末永く生き延びるのではないだろうか。そのような達人になるための方法について高蔵寺ニュータウンで考えてみよう。

中部大学 工学部 都市建設工学科 教授

磯部　友彦

【講師プロフィール】
1980年、名古屋大学大学院工学研究科博士前期課程土木工学専攻修了。名古屋大学助手、群馬大学助教授をへて、1993年に中部大学助教授、2007年より現職。工学博士。専門は、土木計画学、地域交通政策、福祉のまちづくり。
日本都市計画学会中部支部副支部長。
日本福祉のまちづくり学会東海北陸支部長。春日井・豊田・恵那・瑞浪各市の都市計画審議会会長。
春日井・小牧・江南・岩倉各市の地域公共交通会議会長。

※各講演終了後に、質疑応答時間を設けます。

16:05～　閉会挨拶　中部大学 副学長・地域連携教育センター長　後藤　俊夫

16:10 終了予定

文部科学省
地（知）の拠点

キャンパスを春日井のまちに広げ、講義で得た専門知識を使って、学生が地域の人と人とを結びつけるメディエーター（媒介者）となり、地域の様々な課題に主体性をもって取り組んでいきます。この中部大学式　人材育成体験プログラムを通じて、建学の精神「不言実行・あてになる人間」を身につけた学生には、本学独自の資格『地域創成メディエーター』を認定。2015年度には「地域共生実践～春日井市問題発見のすすめ～」を講義として新設する予定です。

さらに、学生の成長を飛躍させる取り組みとして…

中部大学生がさまざまな形で関わる「地域との関わり体験プログラム」を導入します。

①報酬型インターンシップ
“報酬型”「給与を得る」＋“インターンシップ”「就業&育成」＝人材育成を目的とした就業体験

②高齢者・学生交流 Learning Homestay
高齢者宅に学生がホームステイすることで、ニュータウンの高齢化問題を解決する新しい試み

③シニア大学
中部大学アクティブアゲインカレッジ（CAAC：Chubu University Active Again College）
高齢者のセカンドライフづくりに貢献

④キャンパスタウン化
大学とニュータウンが一体化し、広がる学びの場

⑤生活・住環境を考えるまちづくり
地域の人々が安心して快適な生活を送るための研究を促進

⑥コミュニティ情報ネットワーク
地域の人々の役に立つ情報ネットワークの構築を目指す

※「地域との関わり体験プログラム」など、詳しくはホームページ（下記アドレス）をご覧ください。

◆主催／中部大学
◆後援／春日井市

お問合せ
中部大学 地域連携教育センター／〒487-8501 愛知県春日井市松本町1200番地
TEL.0568-51-1763（直通）　FAX.0568-51-4659
E-mail／coc@office.chubu.ac.jp　HP／http://www3.chubu.ac.jp/coc/
開催当日のお問合せは…090-1289-9755 まで。（この電話は開催当日以外は繋がりません。）

【第2回 地域連携市民フォーラム】の様子

開会挨拶：山下 興亜（中部大学長）

来賓挨拶：伊藤 太 様（春日井市長）

来賓挨拶：猪股 志野 様
（文部科学省 高等教育局 大学振興課
大学改革推進室長）

講演：秋山　弘子 様
（東京大学　高齢社会総合研究機構
特任教授）

講演：磯部　友彦
（中部大学　工学部 都市建設工学科
教授）

質疑応答の様子

会場の様子

閉会挨拶：後藤　俊夫
（中部大学　副学長・
地域連携教育センター長）

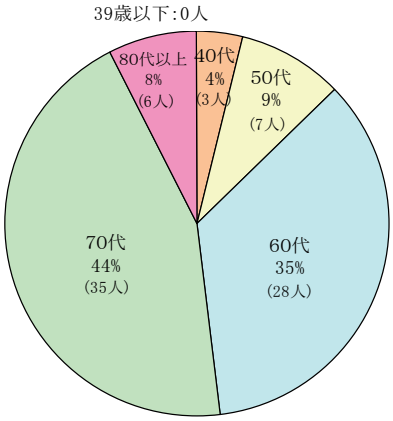
別紙③

第2回 「地域連携市民フォーラム」アンケー集計結果

開 催 日 ：平成26年10月11日（土） 14:00～16:10
場　　所 ：春日井市東部市民センター
参 加 者 ：一般103名（アンケートの対象） 教職員17名
回 答 者 ：79名（回答率 77%）

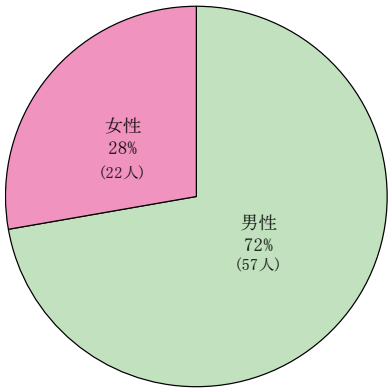
1. アンケート回答の全容

①参加者の年齢構成

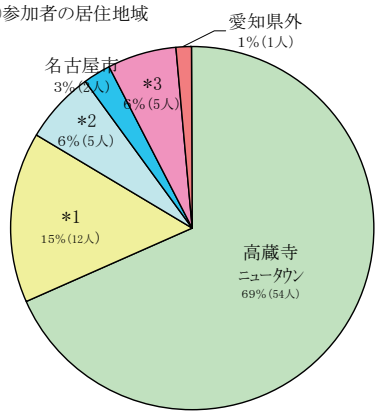


アンケート回答者７９名の内、「高齢者」と称される６５歳を含む６０代以上の方がほぼ９０％を占めている。

②参加者の性別構成



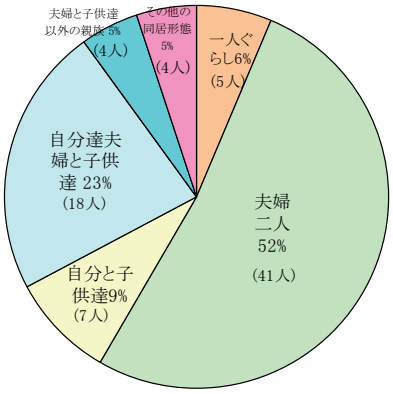
③参加者の居住地域



*1 高蔵寺町，坂下町，出川町，庄名町，白山町，不二が丘
松本町，大泉寺町，上野町，神屋町，廻間町
*2 高蔵寺NTと*1以外の春日井市
*3 春日井市と名古屋市以外の愛知県内

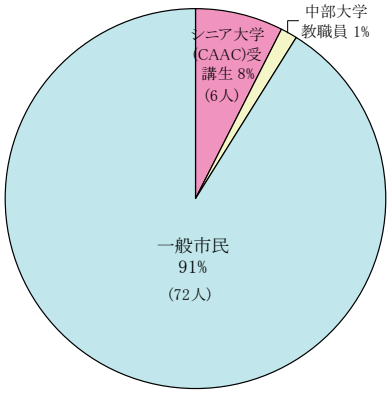
アンケート回答者の内、NTおよびその隣接地域からの参加者が９０％弱であった一方で、愛知県外から５０代の方１名も参加されておられた。

④同居者の構成（自分と子供達以外の親族(0人)）

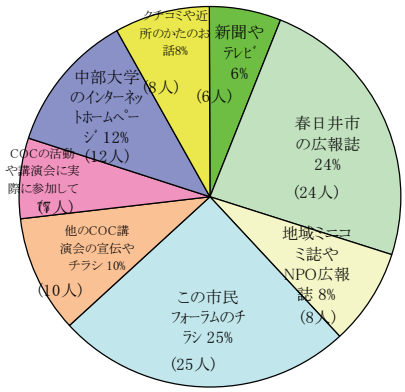


一人ぐらしならびに夫婦二人の方が約６０％であり、将来への不安故か今回のフォーラムに期待をされた様子がうかがえます。

⑤参加者の所属

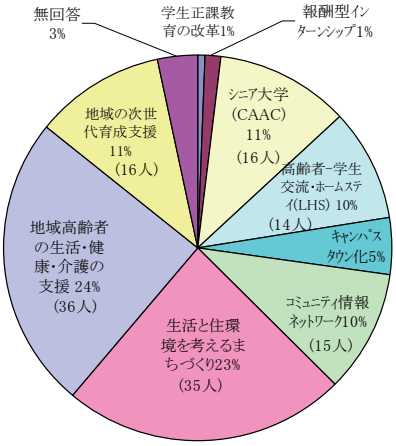


⑥大学COC事業を最初に知ったきっかけ



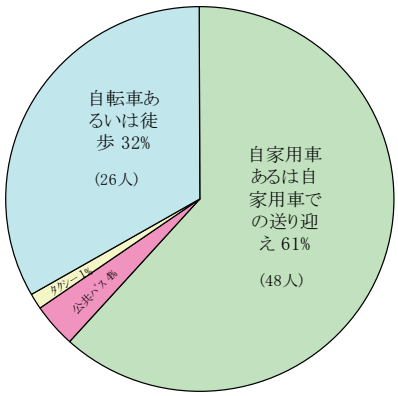
市の広報誌、ならびにチラシが広報に有効である事がわかりましたが、アンケート回答者の１/４が今回のチラシで本事業を初めて知った事には広報のあり方を検討する必要が認められます。

⑦この事業を知って地域と地域住民にとって最も有益あるいは興味深いと感じたプロジェクト

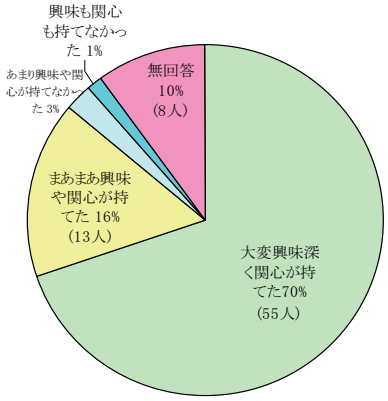


詳細は後述しますが、アンケート回答者の９０％がいわゆる高齢者と称される年代で、かつ、一人ぐらし、または、夫婦二人だけの方が６０％もおられ、何等かの不安を持たれておられるためか、「考えるまちづくり」と「高齢者の見守り」に関するプロジェクトへの関心が約半数を占めています。

⑩本日の会場までの移動手段

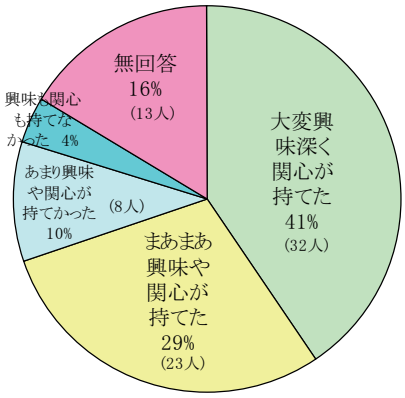


⑪講演−1「長寿社会に生きる」の感想

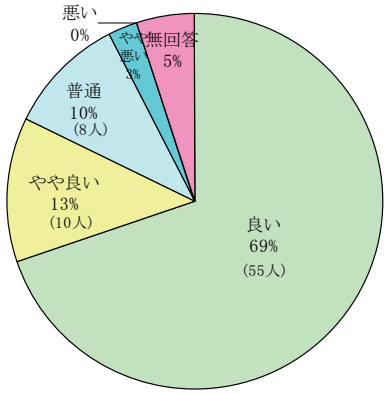


参加者が既に述べたような年齢構成、あるいは、同居者構成であり、アンケートの記述回答欄にも講演−1に対する評価は高く、それらを明確に表した結果となっています。

⑫講演−2「パワースポットとしての高蔵寺ニュータウン−都市を立地条件から見つめる−」の感想

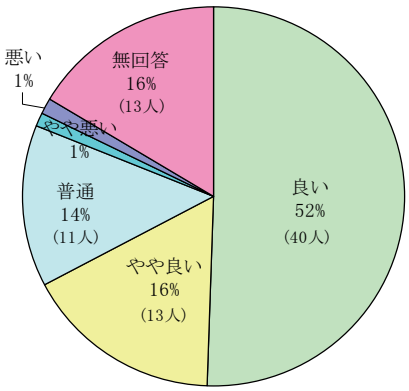


⑬−1 市民フォーラムの会場の感想

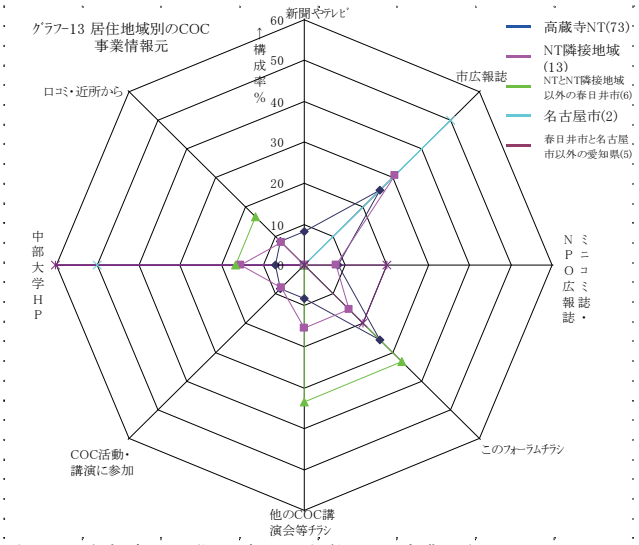


参加者のほとんどの方が会場周辺地域に居住され、また、既に何度か利用されておられたためかやや良いも含めほとんどの参加者に好評であった。

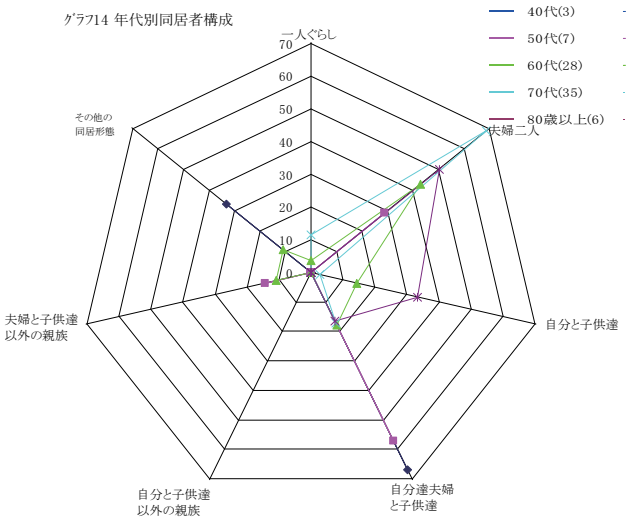
⑬−2 市民フォーラムの運営の感想



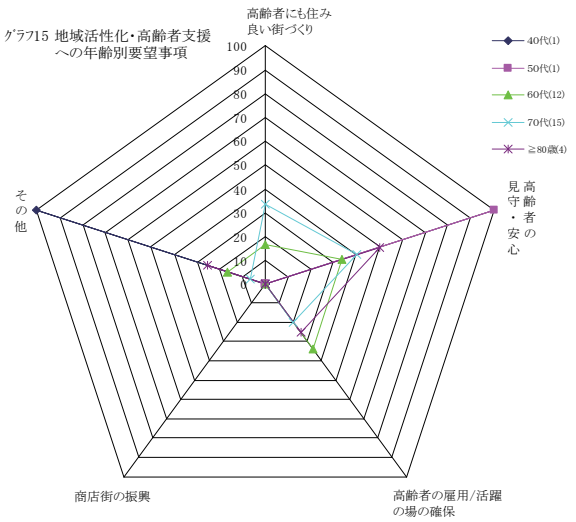
2. 年代別等詳細分析　（単位：凡例横()は人数 、ｸﾞﾗﾌの単位は構成率%）



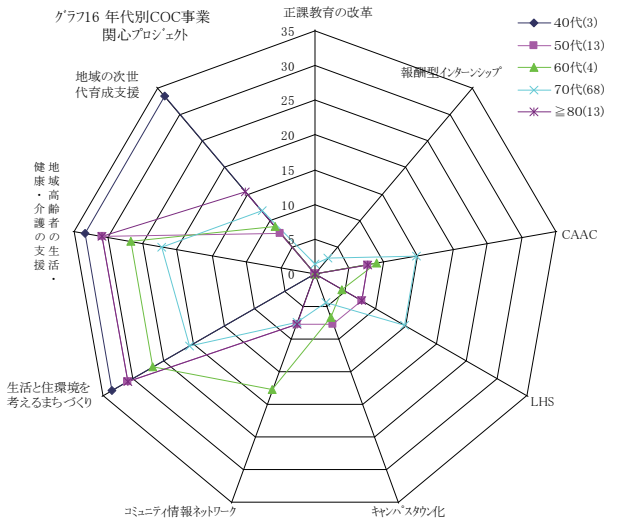
本ﾌｫｰﾗﾑ参加者の居住地域別に本学のCOC事業を知った経緯を示しますが、市の広報誌と本ﾌｫｰﾗﾑのﾁﾗｼによるものが有効（全体の５０％）であることがわかり、また、人数は少ないものの本学のﾎｰﾑﾍﾟｰｼﾞも有効であることがわかります。
但し、今回のﾌｫｰﾗﾑのﾁﾗｼが有効であった事は逆にそれ迄は本学のCOC事業を知らなかった事を意味しており、他大学の事例も参考に本事業に関する有効な広報活動のあり方を検討する必要があろう。



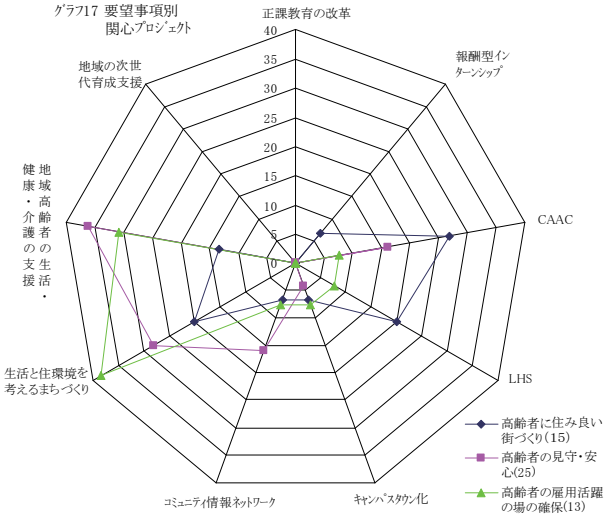
参加者の年代別同居者構成を示しますが、４０・５０代では「自分達夫婦と子供達」が多いものの、５０代の一部ならびに６０代以上ではほとんどが「夫婦二人」であり、また、５０・６０代には一人ぐらしの方もおられ、将来への不安故か、ｱﾝｹｰﾄ記述回答欄に本ﾌｫｰﾗﾑ、特に秋山先生の講演への高い関心が示され、ｸﾞﾗﾌ15以降の結果にもその事が如実に表れています。



地域活性化や高齢者支援に今後必要と思われる取り組みの記述回答を年代別に上記５つの区分に分けたものですが、４０代の１名を除いてほぼ全ての方の回答が、「高齢者にも住み良い街づくり」、「高齢者の見守り」、「高齢者の雇用/活躍の場の確保」に集約され、ｸﾞﾗﾌ14で記載した通り将来の不安を示しているものと思われ、そのためか、本ﾌｫｰﾗﾑに参加された方で「商店街の振興」をあげられた方はおられませんでした。



本学COC事業のどのﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄを有益あるいは興味深いと感じたかを示すものですが、結果は４０代の方の意見を除いて［地域高齢者の生活］と［考えるまちづくり］にほぼ集約され、ｸﾞﾗﾌ14、15に記載したように参加者の将来の不安からか、「高齢者が安心して暮らせる」の一点に集中した回答となっています。勿論、これらの結果は当日の講演の影響を受けた面もあり連携地域を代表した意見と判断するには早計ですが、本学事業の主たる対象者からの意見であり、今後の取り組みを検討する上で重要な示唆とも言えます。



ｸﾞﾗﾌ15の回答者の内、「高齢者にも住み良い街づくり」、「高齢者の見守り」、「高齢者の雇用活躍の場の確保」と回答された方が本学の９つのﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄのどのﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄに関心を持たれたかを示すものですが、ほぼ「地域高齢者の生活」と「考えるまちづくり」の２つに集約されることが分かります。

4. アンケート回答の総括

1)既に記載した通り、本フォーラムへの参加者がアンケート未回答者も含め６０代以上の方が９０％を占めているものと思われ、かつ、同居者構成が一人ぐらし、または、夫婦二人の方が半数以上であり、将来への不安を持たれておられるためか、本事業への期待事項、あるいは、関心ある本学COC事業のプロジェクトに、更には、秋山先生の講演への感想にその事が強く示されており、今後の本事業運営に貴重なご意見をお伺いできたものと思います。

2)勿論、今回のアンケート結果には秋山先生の講演の影響を強く受けた面も想定され、あまり関心を示されなかった本学のプロジェクトの優先順位が低い訳ではなく、昨年８月の正式採択以降今回のフォーラムのチラシで初めてCOC事業を知ったかたも多くおられた事から、関心をもっていただく十分な説明ができていないためと思われます。

3) 上記の通りこれ迄COC事業を知らなかった方が相当数おられた事と、高蔵寺ニュータウンでは人口約４万５千人中高齢者と称される６５歳以上の方が約１万人を占め、超高齢化が進行する状況下、今回のフォーラムへの一般の方の参加が１００人程度であった事の意味は大きく、本事業の成功には連携地域の方からの理解と支援が絶対条件であり、そのためにも広報の果たす役割は重要であり、広報機能も兼ね備えた住民の方と本学関係者が日常的に意見交換ができる仕組みづくりの必要性があるものと思われます。

別紙④　地域創成メディエーター学生発表会 チラシ

文部科学省 平成25年度「地(知)の拠点整備事業」選定取組
春日井市における世代間交流による地域活性化・学生共育事業

文部科学省 地(知)の拠点

春日井のまちがボクらのキャンパス。

Just move on!
What you are now makes what you will be in the future.

地域創成メディエーター資格とは?
地域の人と人とを結びつけるメディエーター「mediator:媒介者」となり、春日井市の様々な問題に主体性をもって取り組み、中部大学の建学の精神「不言実行・あてになる人間」を身につけた学生に認定される資格です。

中部大学
「地域創成メディエーター」学生発表会

参加無料

PLUS エクスプレッション

日時　2015 2/23 (MON) 13:30▸16:30
13:00受付開始

会場　中部大学 51号館 ラウンジ

主催／中部大学　後援／春日井市

地域創成メディエーターを育成する
「春日井市における世代間交流による地域活性化・学生共育事業」は、
平成25年、文部科学省が地域の課題解決に取り組む大学を支援する
「地(知)の拠点整備事業」=大学COC(Center of Community)事業に採択されました。
全国の大学等から319件が申請し、採択は52件、
そのなかで私立大学は15校のみという、優れた評価を得た事業です。

「地域創成メディエーター資格」認定の最終課題「プラスエクスプレッション」は
講義での規定単位取得に加え、
キャンパスを地域に広げた課外体験に参加・実践した学生たちが、
まちの再生や地域活性化などの特有の課題に地域と協働して
現場で解決策を考えて取り組んだ過程と成果の発表の場。
実社会のなかで起こった自身の変化や、自己成長を通じて得た、
いまの「自分」をプレゼンテーションします。
彼らの経験や努力の軌跡を知り、「自分」を生き生きと語るファイナルステージが
見る人を触発し、感動させてくれるでしょう。

お問い合せ
中部大学 地域連携教育センター
TEL.0568-51-1763　FAX.0568-51-4659
e-mail／coc@office.chubu.ac.jp
HP／http://www3.chubu.ac.jp/coc/
中部大学 COC　検索
中部大学　〒487-8501
愛知県春日井市松本町1200番地

「地域創成メディエーター」資格は、資格そのものが大切なのではなく、
その道のりこそが学生自らにとって大事なことであり、「意義」と「価値」がある「行動」です。

文部科学省 平成25年度「地（知）の拠点整備事業」選定取組
春日井市における世代間交流による地域活性化・学生共育事業

「地域創成メディエーター」学生発表会 PLUS エクスプレッション

プログラム

13：30　開会挨拶 ： 山下 興亜（中部大学長）
13：40　学生による自己プレゼンテーション［90分］
15：10　ポスターセッション＆交流会［60分］
16：10　地域創成メディエーター認定証 授与式
16：20　閉会挨拶 ： 後藤 俊夫（中部大学副学長・地域連携教育センター長）
16：30　閉会

自己プレゼンテーション
地域創成メディエーター資格に挑む学生が、これまでの知識修得と体験を振り返り、達成感や今後の課題、目標なども交え、自己成長について自らプレゼンテーションを行います。

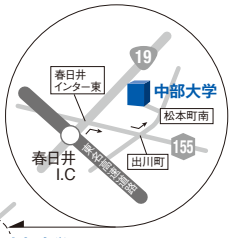
ポスターセッション&交流会
自己プレゼンテーションに続き、ポスターを用いて自己成長について視覚的にPR。参加者の皆さまには学生と直接コミュニケーションをとっていただき、ご意見やアドバイスをお願いします。

中部大学へのアクセス

●JR神領駅からスクールバス
JR中央本線「神領（じんりょう）」駅下車
（名古屋駅より「普通」で約26分）、
北口「中部大学スクールバスのりば」から約7分

●JR高蔵寺駅から名鉄バス
JR中央本線・愛知環状鉄道「高蔵寺（こうぞうじ）」駅下車
（名古屋駅より「快速」で約26分）、
北口8番のりばより名鉄バス
「中部大学前」行に乗車（約10分）

●お車ご利用の場合
東名高速道路
春日井インターチェンジより約5分



お申し込み締切 2/16（MON）

参加ご希望の方は、下記ご記入のうえFAXにてご送信ください。お申し込みはメール、お電話でも受けつけております。

ふりがな			
氏　名			
勤務先 団体名			
所　属		役　職	
連絡先	TEL		
	e-mail		

中部大学
［参加お申し込み・お問い合せ先］ 中部大学 地域連携教育センター
FAX. 0568-51-4659／TEL. 0568-51-1763　e-mail. coc@office.chubu.ac.jp

【地域創成メディエーター学生発表会】の様子

開会挨拶：山下 興亜（中部大学長）

概要説明：伊藤 守弘
（中部大学　生命健康科学部　准教授）

学生の発表　（地域活動時の服装で発表しました）

ポスターセッション＆交流会の様子

閉会挨拶：後藤 俊夫
（中部大学副学長・地域連携教育センター長）

地域創成メディエーター認定証授与

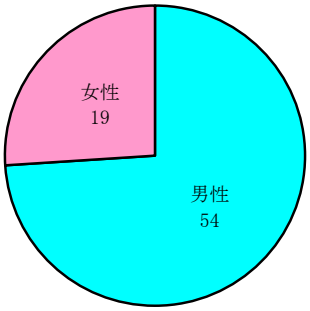
別紙⑤

「地域創成メディエーター学生発表会」
＋ エクスプレッション　アンケート集計結果
PLUS

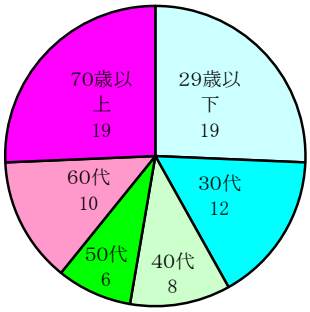
実施日：　平成27年2月23日
実施場所：　中部大学51号館ラウンジ

参加者数：　130名(一般64名,教職員38名,学生28名)
アンケート回収数：　75名(但し、無記入・重複記入等により各項目の人数は一致しません)

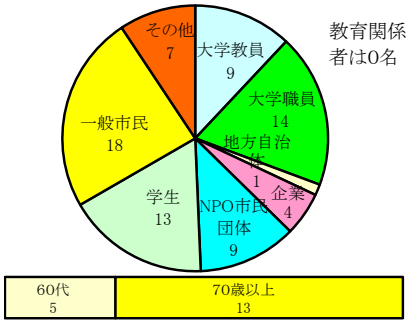
①性別（以下、数値単位は一部を除き″名″）



②年齢

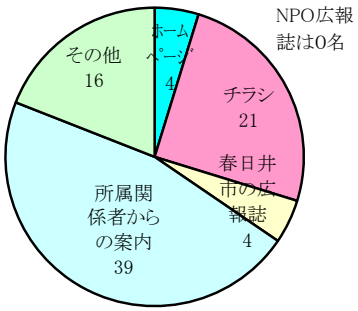


③所属

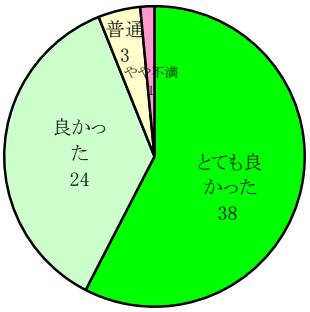


一般市民の年代構成

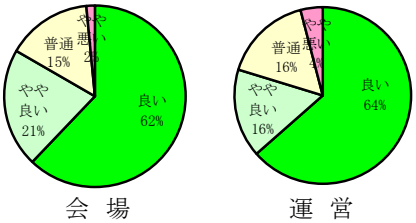
④この「地域創成ﾒﾃﾞｨｴｰﾀｰ発表会」を何で知ったか(重複回答)



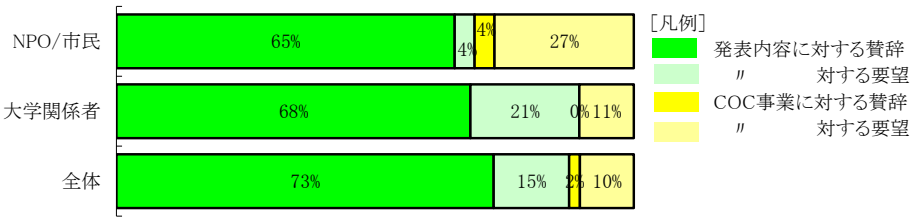
⑤「地域創成ﾒﾃﾞｨｴｰﾀｰ発表会」全体の感想



⑥この学生発表会の会場や運営への感想



⑦ 学生の自己ﾌﾟﾚｾﾞﾝﾃｰｼｮﾝを踏まえた本学教育実践に対する意見・感想



寄せられた４８件のご意見・感想は大まかに左の４通りに分類でき、NPO/一般市民、大学関係者、全体の３つのくくりで分類構成をまとめました。

⑧ その他ご意見ご要望

上記48件の回答者の約7割の方から回答をいただき、内容はほぼ上記と同じですが、スクリーンが小さい等運営に関する要望が散見されました。

（２）ワーキンググループ報告

①　正課教育ＷＧ

②　報酬型インターンシップＷＧ

③　コミュニティ情報ネットワーク事業ＷＧ

④　生活・住環境を考えるまちづくりＷＧ

⑤　高齢者・学生交流・ＬＨＳ　ＷＧ

⑥　シニア大学ＷＧ

⑦　高蔵寺ＮＴキャンパスタウン化ＷＧ

①　正課教育ＷＧ

１．活動組織

委員長　　伊藤守弘
委　員　　杉村公也、羽後静子、戸田香、上野薫、山羽基、今枝健一、
　　竹内環、吉村和也、大日方五郎、田中恭一
オブザーバー　後藤俊夫

２．活動計画

平成 27 年度秋学期開講『地域共生実践』の設置手続きの完了および講義内容の具体化を進める。さらに、中部大学が認定する“あてになる人間＝『地域創成メディエーター（以下、メディエーター)』”の第一期生の育成およびそのシステム構築を最大の目的とする。具体的計画は以下のとおり。

・全学科共通新科目「地域共生実践」の H27 年度開講準備
地域との結びつきの強化・協力教員・地域関係者への趣旨の説明・評価基準の確定と学内教務上の手続きの完了

・各学部・学科で地域連携教育科目の設定
各学部・学科における趣旨説明および協力者の確定、講義内容の確定

・「メディエーター」に関するガイダンス・広報
H26 年度春学期／秋学期オリエンテーションでの全学生チラシ配布、通年：学生対象の説明会、ホームページにおける詳細情報の提示と呼びかけ、「メディエーター」評価基準の具体化し、概要をホームページにて提示

・「メディエーター」発表会・認定式の開催
資格認定審査の一環としての学生の成長発表会（仮称）と資格認定式を開催

３．活動成果

１）平成 26 年度「メディエーター」応募資格・審査方法の確定

応募資格：下記【学ぶ】の A～C の条件を満たしかつ合計 10 単位を取得し、【動く】から 1 プロジェクトの実践を修了していること。(生命健康科学部のみｶﾘｷｭﾗﾑ進行の都合上、別枠)
【学ぶ】A：1 年秋～『自己開拓』（1 単位)、『社会人基礎知識』（2 単位)より 1 講義選択、B：2 年春～：『持続学のすすめ』(必須；2 単位)、『地域の防災と安全』・『地球を観る』・『人類と資源』・『ｸﾞﾛｰﾊﾞﾙ環境論』(各 2 単位）より 2 講義選択、C：地域関連科目（1～3 単位）既存の学部学科専門科目の中から学生自身が「メディエーター」としての成長の道すじを立てて選択。
【動く】1 年～4 年：地域との関わり体験プログラム（現場実践、基本的に正課単位外）　本学の取組 6 事業(①報酬型インターンシップ、②生活・住環境を考えるまちづくり、③コミュニティ情報ネットワーク、④高齢者・学生交流（Learning Homestay)、⑤シニア大学、

⑥キャンパスタウン化）のほか、学内で公募した地域志向教育研究活動約 20 課題のプログラムより、1 プログラムを実践。
応募者は、上記①～⑥の代表者で構成された資格審査委員会による評価の後、全体会、個別指導を経て、発表会での口頭発表とポスター発表にて最終審査を通過したものについて学長より認定される。

写真 1「メディエーターサロン」

写真 2「メディエーター」全体会

写真 3「メディエーター」認定式

2）「メディエーター」学生への広報・応募者への教育・発表会・資格認定

・「メディエーター」資格取得ｶﾞｲﾄﾞ 2 種（4 月，12 月），学生の成長発表会「＋エクスプレッション」開催ちらし 1 種（1 月）の作成、春・秋学期オリエンテーションおよび関連講義内での配布・説明
・「メディエーターサロン」の開催(6 月 4，25 日、写真 1)：講義型の説明会ではなく、昼休憩時間において開放型談話コーナーを設け、随時学生をキャッチして本資格およびＣＯＣ事業について案内し、学生の希望や意見も収集。
・H26 年度「メディエーター」資格申請者に対する指導（「メディエーター」全体会 3 回の実施；中間発表を含む申請者の教育の場（H27 年 1 月 30 日，2 月 5，16 日実施）、担当教員による個別指導（のべ 20 回）の実施（写真 2）
・H26 年度「メディエーター」＋エクスプレッション（学生の成長発表会および認定審査最終段階）の開催・資格の授与（2 月 23 日 13 時 30 分～16 時 30 分、本学 51 号館ラウンジ；発表学生 4 名全員が資格認定．出席者 130 名，写真 3）

3）H27 年度新設『地域共生実践』および「メディエーター」資格取得関連科目

・『地域共生実践』講義詳細の検討および開講手続きを完了
・現行の地域関連科について地域を志向した科目であるかを再考し、再認識
・『地域とのかかわり体験プログラム』への『持続学のすすめ』等の連携講義中における学生へのアナウンス・誘導・プログラムの実施（スポレクチャレンジ，森の健康診断ほか）

4）ワーキンググループ会議の実施

上記実践のため計 13 回の会議を開催した（4 月 2 日，5 月 28 日，6 月 4，25 日，9 月 12 日，10 月 10 日，11 月 17，26 日，12 月 9 日，1 月 10，30 日，2 月 5，20 日）

以上のように、本年度計画に基づき当初目標を達成することができた。

②　報酬型インターンシップＷＧ

１．活動組織

委員長　　櫻井誠

委　員　　栗濱忠司、石田康行、山口直樹、對馬明、武田明、木下拡就、酒向麻由

オブザーバー　後藤俊夫

２．活動計画

春日井商工会議所と連携協定を締結し、単なる就労ではなく、人材育成プログラムとして意識的に学生を教育するインターンシップ型の就労システムを構築する。

さらに③「コミュニティ情報ネットワーク」事業、④「生活・住環境を考えるまちづくり」事業でも学生を研究活動に参加させることで、地域の課題を解決していく能力の育成にも資することが目的ともなっている。

１）春日井商工会議所との連携強化

４月　医療系での連携についての議論を開始する。

学生への説明会を開催する。

６月　春日井商工会議所と参加企業増加について議論する。

９月　特命教授の会を開催する。

学生への説明会を開催する。

１月　アンケート調査を実施する。

３月　特命教授の会を開催する。

２）広報の充実化

４月　新入生にパンフレットを配布する。

３．活動成果

地（知）の拠点整備事業も 2 年目に入り、報酬型インターンシップ活動においても本格的な活動を行う時期に入った。報酬型インターンシップは春日井商工会議所との連携による取り組みと、医療機関で実施する医療系報酬型インターンシップの 2 種類があり、その両方を報酬型インターンシップＷＧで運用などについて議論を行いながら展開した。以下に活動内容を記述する。

・昨年度から引き続き、医療系報酬型インターンシップにおいては報酬型インターンシップＷＧ武田委員を中心に積極的に運用を行い、14 名の学生が参加した。

1. 報酬型インターンシップ参加企業は 32 社に増加した。
2. 春日井商工会議所と 5 回(5 月、6 月、9 月、1 月、2 月)打ち合わせを行った。

3. ポイント制度（春学期・秋学期：1 ポイント、夏季休暇・春季休暇：0.7 ポイント、合計 2.0 ポイント以上認定）により報酬型インターンシップ修了証書を授与することを決定し、本年度は 1 名に授与する予定である。
4. 学内説明会を 6 回（3/26 2 回、7/8、9/13 2 回、1/14）開催した。（図 1）
5. 参加者との座談会（10 月）を開催した。（図 2）
6. 中部大学側からは学長、副学長、学部長を中心にしたメンバーで構成され、春日井商工会議所からは会頭、学外特命教授、学外特命講師で構成された学外特命教授の会を 2 回行った。（図 3）
   参加学生が研修後、学生支援課へ提出する報告書によりアンケート調査を実施した。
7. 春学期、夏季休暇、秋学期、春期休暇、医療型報酬型インターンシップにおいて、合計 54 名が参加した。（図 4）
8. 報酬型インターンシップ参加を促すポスターを作成し、学内に掲示している。
9. 学生居住地に近い企業については春日井商工会議所特別会員制度を用いて、企業に参画をお願いし、学生が登録企業に参加できるようにした。
10. 報酬型インターンシップＷＧ委員会を 6 回開催した。
11. 学生向けのパンフレットを作成し、全学に配布した。

図 1　学内説明会での面談風景

図 2　参加学生との座談会風景

図 3　学外特命教授の会

図 4　企業での実習風景

③　コミュニティ情報ネットワーク事業ＷＧ

１．活動組織

委員長　　保黒政大

委　員　　杉村公也、富永敬三、前田和昭、中路純子、河内信幸、宮下浩二

２．活動計画

地域住民に役立つコミュニティ情報ネットワークを構築し、地域がＩＴ化により豊かで便利な地域として発展するための情報システムの開発研究を進める。

主として、春日井市の医療情報共有を促進するためのシステム開発と提供、ＮＰＯなど諸団体の活動情報や市民生活に役立つ情報を公開・提供するシステムの構築、シニア大学の講義映像を記録・配信するためのシステム構築を行う。

３．活動成果

【活動】

・シニア大学の講義映像配信システム開発に関する講習会（通年）
　参加学生数：最大で 19 名
　企業で活躍する本学のＯＢエンジニアを講師として、年間で 12 回実施
・ＮＰＯ法人 まちのエキスパネットの方々と様々に議論を実施。年間で 4 回
　参加学生数：1 名
・春日井在宅ネットワーク講演会にて、医療情報共有システムについて解説（8 月）
　出席者：約 100 名
・子育て相談会を実施　(9 月)
　参加学生数：7 名
　13 組 33 名からの相談を、6 名の専門スタッフで対応
・「まちこみゅニュース」を発行　(10 月)
　参加学生数：1 名
　NPO 活動情報を発信する web サイトの広報媒体として「まちこみゅニュース」を作成し、約 10,000 部を配布
・子育て相談会のフォローアップとして勉強会(第 1 回)を開催（11 月）
・春日井高校の教員に対して体育会系部活動のための講習会を開催（12 月）
　参加学生数：2 名
　「部活動におけるスポーツ外傷・障害の予防のために」と題して講習会を実施
　スポーツ医療に関する情報についての現状と問題点についてアンケート調査を実施
・春日井高校水泳部部員を対象とした講義（12 月）
　参加学生数：3 名
　「ケガや故障の予防のためのトレーニング」と題して講義および実技指導を実施

高校生の立場からみたスポーツ医療に関する現状と問題点についてアンケートおよび聞き取り調査を実施

・春日丘高校野球部部員を対象とした調査（1 月）
参加学生数：4 名
「ケガの実際およびその後の行動様式」についてアンケートおよび聞き取り調査。

・子育て相談会のフォローアップとして勉強会(第 2 回)を開催（2 月）

・春日井高校の全運動部員対象の講演会（3 月）
参加学生数：5 名（予定）
「部活動におけるスポーツ外傷・障害の予防のために」をテーマとした講習会を実施

【状況】

・ＮＰＯの活動情報発信と情報共有のためのホームページを開発し、サービスを開始した。
また，10 月には本ホームページの周知と電子媒体が苦手な方々への対応として紙媒体の「まちこみゅニュース」を発行した。(参加学生数：1 名)

・発達障害児を持つ家族など、子育をサポートする活動として「子育て相談会」を 9 月に実施した。(参加学生数：7 名)
また、子育て相談後のフォローのための第 1 回勉強会・交流会を 11 月に実施した。
(参加学生数：4 名)

・シニア大学の講義映像配信のため、配信システムの開発のための勉強会を実施。
オープンソースを利用して環境構築を開始した。(参加学生数：19 名)
そのノウハウを、2 月に開催されるオープンソースのユーザ会にて学生 (3 年生) が発表。
(参加学生数：4 名)
また、講義映像の自動編集機能実現のため、要素技術の研究を開始した。
(参加学生数：3 名)

・医療情報共有サービスシステムの新たな機能を実現するために、仕様を検討して実装を開始した。(参加学生数：2 名)
また、春日井市医師会の医療情報連携サーバを構築し、仮サービスを開始した。

・春日井市内の高校にて、部活動時のケガ防止やケガ発生時の対応に関する講習会やアンケートを実施した。(参加学生数：14 名)

図１．シニア大学の講義映像配信システム開発に関する講習会と作成したホームページ

図２．NPO 情報ホームページの打ち合わせと作成したホームページ

図３．　高校での実技指導

図４．　春日井在宅医療ネットワーク講演会

④　生活・住環境を考えるまちづくりＷＧ

１．活動組織

委員長　　磯部友彦

委　員　　豊田洋一、松山明、内藤和彦、山羽基、勅使川原誠司、 杉井俊夫、武田誠、伊藤睦、余川弘至、岡本肇、行本正雄、甲田道子、池澤俊治郎

２．活動計画

春日井市のまちづくりの課題解決に協働し、地域の住民が安心して快適な生活を送れるようになることを目的に社会基盤の整備、地域環境の改善に関する地域開発研究を行う。

1）意見交換会などの実施

5 月　高蔵寺ニュータウンの課題についての住民との意見交換

10 月　高蔵寺ニュータウンの問題解決法についての住民との意見交換

2）まちづくり講演会(仮称)の開催

まちづくり講演会を開催して、全学部の学生に「まちづくり」の意義とそれへの参加方法を学ぶ機会をつくる。

5 月　まちづくり講演会を公開で実施

11 月　まちづくり講演会を公開で実施

3）タウンウォッチングの実施

6 月　まちづくり勉強会(学内)の実施

10 月　タウンウォッチング(学外)の実施

4）正課並びに自主活動の強化

通年　演習・ゼミナールのテーマとして現実の地域課題を取り上げる。

通年　卒業研究のテーマとして地域課題に対する解決方法に取り組む。

通年　地域の人々との十分なコミュニケーションを交えた学生の自主活動を促進する。

３．活動成果

今年度は、以下に示す通り、WG 全体での活動、各学科単位での活動、個々のメンバーによる活動がなされた。主なものを経時的に列挙する。

1）6 月 18 日　理学療法学科学生対象のバリアフリー体験歩道(国土交通省中部技術事務所構内)での実習　(磯部対応)　【参加学生 5 名】

2）8 月 5 日～10 日　建築作品展(文化フォーラム春日井)。優秀な卒業設計作品ならびに修士設計作品を一般の方々にもご紹介した（建築学科教員対応)。

3）9 月下旬から 10 月　高蔵寺ニュータウン住宅流通促進協議会（春日井市、春日井市商工会議所、ＵＲ都市機構、市政アドバイザー(服部敦・中部大)等で構成。平成 26 年 6 月に発足)の調査への協力。大学生による高蔵寺ニュータウンの住まい大調査として、「居住意向把握調査」「空き家実態把握調査」に WG として協力。【参加学生 40 名】

4) 都市建設工学科の講義で地域志向の見学会実施。(都市建設工学科教員対応)【参加学生延べ81名】

・9月30日　金山駅地区のバリアフリー整備状況の視察、名古屋都市センターの見学【参加学生18名】

・10月7日　春日井市役所への訪問、春日井市中心部、ＪＲ春日井駅の視察【参加学生18名】

・10月7日　東海環状自動車道高架橋施工現場の見学(岐阜県安八郡神戸町)【参加学生27名】

・10月28日　多治見市役所、多治見まちづくり株式会社を訪問、多治見市中心市街地(本町周辺)、郊外住宅地(ホワイトタウン等)、市之倉地区の視察【参加学生18名】

5) 10月18日　日本都市計画学会中部支部研究発表会(名古屋学院大学名古屋キャンパス)において、シシンポジウム『地(知)の拠点整備事業(大学COC事業)における都市計画教育活動』に磯部が中部大学の事例を報告。他に、福井大学と名古屋学院大学の報告があり、それらを基にパネルディスカッションを行った。

6) 10月19日　高蔵寺ニュータウン・ESD対話フォーラム(第8回)「高蔵寺ニュータウンをより楽しくするためにできること」に豊田が対話フォーラムのファシリテーターとして協力。

7) 11月16日　高蔵寺ニュータウンESD対話フォーラム(第9回)「ニュータウンが元気になるバスの運行のあり方を考える」に磯部が講師として協力。

8) 2月10日～13日　都市建設工学科卒業研究発表会の実施。(都市建設工学科教員対応)全体で70件の卒業研究のうち、地域志向の研究テーマは54件。さらに、春日井・高蔵寺ＮＴ関連は6件。

9) 2月　高蔵寺ニュータウンセンター開発株式会社が実施する「サンマルシェ循環バス関連調査」(利用者と住戸対象)に磯部が協力。

４．次年度に向けての課題

1) 都市建設工学科と建築学科における講義・演習等で当該学科の学生に対する地域志向教育は充実しつつあるが、他学科の学生に対する教育が不十分である。全学部学生を対象にした勉強会や講演会等を実施する。

2) 複数の研究室の協力によるプロジェクトを進める必要がある。

3) 本WGのメンバーには特別課題教育の科目担当者も兼ねているものがいるので、特別課題科目を活用して、その受講生に地域志向教育を行うことを検討する。

4) 今年度において他のWGメンバーとの共同事業が試行できたが、さらに様々なWGやプロジェクトとの経常的な協力体制を作る。

⑤　高齢者・学生交流・ＬＨＳ　ＷＧ

１．活動組織

委員長　　戸田香

委　員　　杉村公也、栗濱忠司、内藤和彦、河内信幸、長島万弓、
櫻井誠、梶美保、堀文子、佐藤友美、杉本英晴、宮本靖義、
矢澤浩成、谷利美希、城憲秀、野田明子、木下拡就、原田智之

２．活動計画

高齢世帯や独居高齢者の見守りや生活支援を目的に若者による高齢者との交流や同居活動を進める。

１）高齢者−学生交流活動の定期的開催

交流テーマを複数の学部から出すことにより、多くの学部からの学生参加を促進する。

5 月　第 1 回　世代間交流会開催　学生教育セミナーと同時開催
6 月　第 2 回　世代間交流会開催（ガラス雑貨作り体験）
7 月　第 3 回　世代間交流会開催（調理体験）
11 月　第 4 回　世代間交流会開催（体力測定会）
12 月　第 5 回　世代間交流会開催（バルーンアート体験）

２）世代間交流活動がもたらす教育効果を検証し、教育プログラムの充実を図る。

5 月　学生教育セミナーの開催　世代間交流ならびにＬＨＳの意義を学ぶ。

３）地域連携講演会の開催

10 月　ホームシェアの取り組み啓発、ＬＨＳ体験紹介

４）ＬＨＳの実施

4 月　世代間交流会ならびにＬＨＳへの参加学生募集
7 月　ホストファミリー募集
8 月　受け入れ説明会
ホストと学生の顔合わせとマッチング
9 月　ＬＨＳ実施
10 月　体験報告会　地域連携講演会と同時開催

５）ＬＨＳの受け入れ条件とマッチング方法の充実

10 月　ホストファミリー懇談会開催

３．活動成果

１）交流会参加人数（地域住民および学生）

５月　第１回　世代間交流会　＆　教育セミナー　　58 名（内　学生　40 名）

セミナーテーマ「高蔵寺ニュータウンの今昔を知ろう！～これからの大学と町の関係はどうあるべきか～」講師　曾田忠宏 氏（ＮＰＯ法人高蔵寺ニュータウン再生市民会議）

６月　第２回　世代間交流会　　35 名（内　学生　28 名）

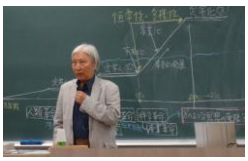
７月　第３回　世代間交流会　　21 名（内　学生　14 名）

10 月　地域連携講演会　＆ＬＨＳ報告会　35 名（内　学生８名）

11 月　第４回　世代間交流会　　88 名（内　学生　45 名）

12 月　第５回　世代間交流会　　20 名（内　学生　８名）

第１回交流会　座談会



教育セミナー

第２回交流会ガラス細工

第３回交流会　栄養教室

ＬＨＳ報告会（地域連講演会）

第４回交流会　体力測定会　　第５回交流会　バルーンアート

２）ＬＨＳ参加人数

受け入れ世帯　３世帯（60 歳代、70 歳代、80 歳代）

参加学生　６名（理学療法学科　４名、作業療法学科　２名）

２泊３日～３泊４日で実施

ＬＨＳ報告会を通して、新たにホストファミリーをお申し出いただくことができた。

３）世代間交流会のひろがり

イベント的な世代間交流会に加えて、地域に根差した地域連携健康教室が発足

「ＫＣＧサークル　ｉｎ　高森台」

自分たちの健康を自分たちで支えられる身近な場が欲しいという地域住民の要望に応える形で、教員と学生が月 2 回の定期的な体操教室を支援。

現在 31 名のシニアメンバーが参加登録をしている。

４）世代間交流活動への参加に関する学生への教育効果検証に着手

各世代間交流企画の前後の変化、初めての交流会参加から年度末にかけての変化について、高齢者観の変化、自己効力感、コミュニケーションスキルなどの変化を検証予定である。

４．今後の課題

１）持続可能な世代間交流会の企画

単発のイベントで終わる交流会ではなく、学生と地域住民との共育の一環ともなる継続性のある企画の検討を要する。

２）ＬＨＳ受入れ世帯の獲得

ＬＨＳの意義、効果が検証されていない。そのため、協力者を十分に獲得できていないと思われる。ホストとしての協力が高齢者にもたらす効果検証が必要であり、同時に活動自体を地域住民に知ってもらうための広報活動も重要である。

３）ＬＨＳ参加学生の増大

実施までのタイムテーブルは整った、しかし、教育としての基本的なシステム化は十分に検討されていない。共育効果を狙えるテーマの選定と効果検証が重要である。

⑥　シニア大学ＷＧ

１．活動組織

委員長　　對馬明

委　員　　尾方寿好、伊藤守弘、甲田道子、櫻井誠、羽後静子、藤丸郁代、山北晴雄、林上、末田智樹、町田千代子、根岸晴夫、堀田典生、宮本靖義、市原幸造、種村育人、稲ケ部正幸、木下拡就、桐山まり、宮原清

スーパーバイザー　　杉村公也

２．活動計画

高齢者の健康づくりや再雇用のための技術資格取得を目的に実践教育を行う。

4 月～8 月　　開講に向け諸問題発生予測を行い、対処法を早期に検討しておく。

9 月　　入学式を行い、授業を開始する。

通年　　受講生募集方法のさらなる検討を行う。

10 月～3 月　ＣＡＡＣ受講生の希望、他の高齢者大学を参考にカリキュラム内容を検討。

通年　　学びの専門性を広げるために、コースの増設を検討する。

通年　　地域に根ざした開講場所を多角的に検討する。

３．活動成果

1．ＣＡＡＣ開校準備／開校後ＷＧの定期開催

5 月　第 7 回ＷＧ開催

6 月　第 8 回ＷＧ開催

7 月　第 9 回ＷＧ開催

その他、介護職員初任者研修開催サブＷＧ、増設コースカリキュラム作成サブＷＧ、受講生募集サブＷＧを随時開催

2．昨年度からの開校準備を経て、今年度は以下の通りの成果を得た。

5 月　健康福祉コース時間割、カリキュラムを決定し、募集を開始した。

7 月　シニア大学規則および運営委員会細則を定めた。

7 月　ＣＡＡＣ受講生応募を行い、13 名（定員 15 名）が合格となった。

8 月　ＣＡＡＣ教員に対し、ＣＡＡＣ設立趣旨など説明会を開催した。

8 月　ＣＡＡＣガイドブック（受講生向け）を作成した。

9 月　入学式を行い、授業を開始した。

●入学式には春日井市副市長の中村幹雄氏、立教セカンドステージ大学教員・社会貢献活動サポートセンター副所長の坪野谷雅之氏はじめ多数の来賓、関係者にご参列いただき入学式を挙行した。

●第１回の講義では、独立行政法人国立長寿医療研究センター名誉総長、大島伸一氏のＣＡＡＣ開設記念特別講義が開講された。

10 月　来年度募集パンフレット作成し、配布を開始した。
10 月　平成 27 年度開講予定の「介護職員初任者研修」を開催することを決定した。
10 月　増設コース（人文・国際ＥＳＤコース；仮称）に着手した。
10 月　CAAC 運営委員会を開催した。

3．写真によるＣＡＡＣ開校後の活動紹介

○入学式を挙行（リサーチセンター）

○オリエンテーショ合宿を開催（新穂高山荘）

○授業を開始（22 号館 2 階ＣＡＡＣ講義室）

○サークル活動（PC）によるシニアー学生交流

４．謝辞

ＣＡＡＣ開校に当たっては、ＣＡＡＣワーキンググループとして関係事務部署と 6 学部からの教職員、計 20 名の方々に多大な協力をいただいた。ＣＡＡＣの講義においては 46 名の内部教員と最近本学をリタイアされた教員、本学の非常勤講師など 26 名、全 72 名の先生方にお願いした。関係各位にこの場を借りて深謝申し上げる。

⑦　高蔵寺ＮＴキャンパスタウン化ＷＧ

１．活動組織

委員長　　櫻井誠

委　員　　栗濱忠司、戸田香、羽後静子、内藤和彦、早川紀朱、福井弘道、
　　木下拡就、箕島智子、大竹雄平、原田智之

オブザーバー　後藤俊夫

２．活動計画

高齢化で衰退した高蔵寺ニュータウンを活性化する目的で中部大学のキャンパス機能を高蔵寺ニュータウン内に拡大し、地域と大学が融合した若者も生活する場にしていく。

１）中部大学附属図書館の分館の設置

9 月　分館候補地の議論を開始する。

２）中部大学高蔵寺ＮＴ事務室の設置

4 月　春日井市・ＵＲと中部大学高蔵寺ＮＴ事務室の設置に向けた協議を開始する。

5 月　中部大学高蔵寺ＮＴ事務室の候補地の選定および視察を開始する。

10 月　中部大学高蔵寺ＮＴ事務室を開設する。

３）春日井市・ＵＲとの連携による地域連携住居の充実

4～3 月　春日井市・ＵＲとの協議を実施する。

5 月　シェアハウスの仕組みづくりの検討を開始する。

10 月　パンフレットの作成・配付を行う。

地域連携住居およびシェアハウスの学生への説明会を開催する。

※平成 26 年度は地域連携教育センターを中部大学高蔵寺ＮＴ内事務室と呼ぶこととする。
地域連携学生寮を地域連携住居と名称変更した。

３．活動成果

地（知）の拠点整備事業も 2 年目に入り、キャンパスタウン化活動においても本格的な活動を行う時期に入った。キャンパスタウン化は学外において春日井市、ＵＲ都市機構、NPO 法人との連携による取り組みであり、学内においては学生支援課、図書館との連携による取り組みである。その両方をキャンパスタウン化ＷＧで運用などについて議論を行いながら展開した。以下に活動内容を記述する。

1. ＵＲ都市機構および春日井市と協議を重ねた結果、平成 27 年 4 月から地域連携住居の運用を開始する。
2. 中部大学高蔵寺 NT 事務室（地域連携拠点として位置づけ、コミュニティプラザ Kozoji と命名）を高森台団地 004 号棟 1 階の旧医療施設跡に設置した。

3. 図書館分館機能を高蔵寺ＮＴ内に設置すべく議論を行ったが、設置には至らなかった。しかし、2 に記載したようにコミュニティプラザ Kozoji を開設することができたので、今後、その施設内で運用の可否について検討を行う。
4. 中部大学・ＵＲ連携講座として「地域との交流をワイン講座で！！」を高蔵寺ＮＴ内中央台団地 228 号棟で開催した。
5. 地域連携住居の実施にあたり、新入生用合格通知に案内を同封した。
6. 在学生および学生寮退寮生を対象に地域連携住居入居説明会を開催した。（図 1）
7. 中部大学アクティブアゲインカレッジ（ＣＡＡＣ）、地域拠点機能および図書館機能を高蔵寺ニュータウン（ＮＴ）内で展開するため、春日井市が平成 28 年 3 月をもって使用を停止する 2 小学校について、中部大学が利活用することを提案すべく検討を行った結果、提案を行わないこととなった。今後は地域拠点機能についてはコミュニティプラザ Kozoji に持たせるよう運用を行い、ＣＡＡＣ実施教室などの確保については平成 27 年度中に確保する取り組みを行う必要がある。
8. 地域連携住居のパンフレットを作成し、全学に配布した。
9. キャンパスタウン化WG委員会を 6 回開催した。
10. 地域志向教育研究経費には「ＣＯＣ図書館活動の実践と活動拠点施設の設計計画案の作成」、「愛知県地球温暖化防止活動推進センターと連携した地域レベルの「身近な」地球温暖化対策交流教育によるＥＳＤの推進」の 2 テーマが採択された。前者はビブリオバトルを 11 月に開催した。春日井市の小学校跡理利用に関する設計計画案作成においては、計画案を作成した。後者は中部大学の気候変動対策連続講座「高蔵寺ニュータウンから気候変動に対する身の処し方を考える」を企画し、第１回 地球温暖化の最新状況～IPCC5 次報告から見えるもの、第２回 影響と対策の事例～地域から学ぶ温暖化対策、第３回 交流ワークショップ～私たちが地域でできることは何か、を実施し 3 回すべて参加した受講者に修了証書を授与した。

図１　地域連携住居説明の風景

（３）地域志向教育研究経費の成果報告

（３）地域志向教育研究経費の成果報告

地域志向教育研究経費は、学内の教員が広く地域志向の教育研究活動を実践できるよう、助成を行うものである。

課題解決に資する様々な人材や情報・技術が集まる、地域コミュニティの中核的存在としての本学の地域志向教育研究活動の強化を図る課題を学内に広く公募した。

本学の「地（知）の拠点整備事業」を推進するため、多くの教員から積極的に応募があり、22 件の採択となった。

活 動 課 題 一 覧

＊職名等は平成 27 年 3 月時点

NO	氏名	所属	役職	課題名	分担者/協力者
＜①地域連携教育改革・教育システムの構築＞					
1	吉村　和也	応用生物学部 食品栄養科学科	准教授	高校との連携による 蜜蜂の訪花嗜好性調査を通した地域志向の研究人材の養成	南基泰教授
2	大日方（オビナタ）　五郎	工学部 ロボット理工学科	教授	これからのモビリティを考える −若年者層と高齢者層の交流を通して−	李ジェリョン助教
＜③コミュニティ情報ネットワーク＞					
3	前田　和昭	経営情報学部 経営情報学科	教授	講義映像を題材としたデジタル映像に関する教育研究	
4	宮下　浩二	生命健康科学部 理学療法学科	准教授	春日井市内高校運動部に対するスポーツ医療情報提供システムの試み	矢澤浩成講師
5	河内　信幸	国際関係学部 国際文化学科	教授	中部大生アクションプラン・春日井市国際交流プロジェクト	和崎春日教授、羽後静子教授、中山紀子教授、中野智章准教授
＜④生活・住環境を考えるまちづくり＞					
6	甲田　道子	応用生物学部 食品栄養科学科	准教授	高蔵寺ニュータウンの在宅高齢者の食環境整備に向けての実態調査	
7	勅使川原　誠司	工学部 建築学科	教授	春日井市の地震被害と安全評価に関する調査研究	
8	豊田　洋一	工学部 建築学科	教授	地域や人から学ぶ建築をつくるための実践的学習	
9	行本　正雄	工学部 機械工学科	教授	春日井市の廃食油の回収とそれを原料とするBDFの製造・利用	波岡知昭准教授・竹島喜芳准教授
10	池澤　俊治郎	工学部 電子情報工学科	教授	大気圧プラズマにより生成した硝酸溶液肥料を花壇（高森南花の会）に用いたまちづくり	饒村修准教授

NO	氏名	所属	役職	課題名	分担者/協力者
＜⑤高齢者と学生の交流、高齢者宅への Learning Home Stay(LHS) ＞					
11	城　憲秀	生命健康科学部 保健看護学科	教授	学生の傾聴による介護認定高齢者のQOL向上の試み	福田峰子准教授、小塩泰代准教授
12	野田　明子	臨床検査技術教育 実習センター	教授	高齢者認知症予防に対する在宅臨床検査教育	祖父江沙矢加助教
13	谷利　美希 →　堀　文子＊	医療技術実習センター ＊10 月 1 日より、産前・産後休暇、育児休暇の為、 堀　文子　准教授（生命健康科学部　作業療法学科）　に代表者交替。	助手	大学生のための世代間交流による実践型教育の創造	戸田香准教授、堀文子准教授、佐藤友美講師、杉本英晴助教
＜⑥シニア大学(Chubu University Active Again College : CAAC)＞					
14	堀田　典生	生命健康科学部 スポーツ保健医療学科	講師	科学的根拠に基づく身体トレーニングを通じて、共に学び、共に育ち、健康社会実現への貢献を目指す	對馬明准教授
15	根岸　晴夫	応用生物学部 食品栄養科学科	教授	学内キャンパスに「ソーセージの手作り体験教室」を開講しよう！	
16	羽後　静子	国際関係学部 国際関係学科	教授	世代間交流による伝統知の継承プロジェクト(継続)	和崎春日教授、河内信幸教授、舛山誠一教授、對馬明准教授
17	町田　千代子	応用生物学部 応用生物化学科	教授	地域との交流をわいん講座で！ シリーズ2−赤ワインとともに−	堤内要准教授、小島晶子講師
＜⑦高蔵寺ニュータウンのキャンパスタウン化＞					
18	内藤　和彦	工学部建築学科 三浦記念図書館	教授 館長	COC図書館活動の実践と活動拠点施設の設計計画案の作成	
19	福井　弘道	中部高等学術研究所	教授	愛知県地球温暖化防止活動推進センターと連携した地域レベルの「身近な」地球温暖化対策交流教育によるESDの推進	原研究員（協力者）
＜⑧その他＞					
20	釆睪　真澄	現代教育学部 幼児教育学科	准教授	保育者・教員を目指す学生の実践的指導力を育成する地域連携共学・共育支援プログラム（その 2）	三品陽平助教、花井忠征教授、山本彩未講師
21	梶　美保	現代教育学部 幼児教育学科	准教授	4年制保育者養成大学における地域と連携した共学・共育プロジェクト（その 2）	三品陽平助教、蘇珍伊准教授、大河内修教授
22	上野　薫	応用生物学部 環境生物科学科	講師	産官学民協働による庄内川流域におけるカヤネズミ生息環境保全の試み	本多潔教授・渡部展也准教授

※②報酬型インターンシップ（就業体験）は、平成 26 年度は、採択課題なし。

平成26年度 地域志向教育研究経費 成果報告書(1)

活動項目	①地域連携教育改革・教育システムの構築		
フリガナ 氏　　名	ヨシムラ カズヤ 吉村　和也	所属・職名	応用生物学部食品栄養科学科・准教授
活動課題	高校との連携による 蜜蜂の訪花嗜好性調査を通した地域志向の研究人材の養成		

活動組織
（分担者は本学の専任教員（助手を含む常勤の専任教員），協力者はそれ以外。）

フリガナ 氏　名	代表者及び 分担者	所属・職名	現在の専門	学　位	役割分担
ヨシムラカズヤ 吉村和也	代　表　者	食品栄養科学科・准教授	植物分子生理学	農学博士	DNA バーコーディング解析によるミツバチが嗜好する植物種の特定
ミナミ　モトヤス 南　基泰	分　担　者	環境生物科学科・教授	分子生態学	農学博士	恵那および春日井キャンパス周辺の植生調査
ワカバ　リョウ 若葉　亮	協　力　者	恵那農業高校・教諭			植生調査および花粉採取の協力

活動経過と成果

日本在来種のニホンミツバチは農業上重要なポリネーターとして地域の作物の送受粉に役立っているだけでなく、様々な植物種への訪花を介して豊かな森林生態系における生物多様性の維持にも貢献しているにもかかわらず、駆除やその生態を顧みない農薬散布が行われているのが現状である。そこで本研究では、春日井市および周辺地域の農作物および希少植物の受粉におけるニホンミツバチの重要性を明らかにするために、中部大学生と恵那農業高校生との連携で、本種により送受粉が行われる植物種を調査した。中部大学里山および恵那キャンパス森林内に蜂群が営巣した巣箱を設置した。周辺の植生調査および帰巣したミツバチから採取した花粉の DNA バーコーディング法による植物種の解析を行った結果、野生植物の野バラに加え、園芸植物のアカメガシワ、バラ、ナンテン、アサガオや農作物のヒョウタンの花粉も収集していることが明らかになり、農業と自然環境、両者へのニホンミツバチの貢献が窺いしれた。

活動成果の公表

現時点で特に無し。

平成26年度 地域志向教育研究経費　成果報告書(2)

活動項目	①地域連携教育改革・教育システムの構築		
フリガナ 氏　　名	オビナタ　ゴロウ 大日方　五郎	所属・職名	工学部ロボット理工学科・教授
活動課題	これからのモビリティを考える　-若年者層と高齢者層の交流を通して-		

活動組織
（分担者は本学の専任教員（助手を含む常勤の専任教員），協力者はそれ以外。）

フリガナ 氏　名	代表者及び分担者	所属・職名	現在の専門	学　位	役割分担
オビナタ　ゴロウ 大日方　五郎	代表者	工学部ロボット理工学科　教授	ロボット工学	工学博士	研究統括、コンセプト立案、アンケート調査
イ　ジェリョン 李　ジェリョン	分担者	工学部ロボット理工学科　助教	ロボット工学	博士 （工学）	アンケート調査、インタビュー調査

活動経過と成果

若年者数名のグループ、および高齢者１１名のグループに、最近の自動運転技術の内容を説明し、この技術の活用では、さまざまな新しいモビリティの形の実用化が可能であることを理解してもらった。そのうえで、高齢者に対しては、高齢者本人たちが、日ごろどのような移動手段を使っているのか、自家用車の運転ではどのような問題を抱えているかを探るためのアンケート調査を行った。アンケート調査の結果では、混雑する場所、障害物やライティング、天候などの条件によって見えにくくなる状況での運転を控えたり、そのような場所に行くことを避けるような傾向があり、運転支援が必要な場所や条件についての知見が得られた。また、加齢に伴い運転中に受けている感覚が変わる様子、それによって運転中に意識することが変化することを捉えることができた。

自動運転や運転支援の実用化では、交通事故が発生した場合の責任が運転者本人によるものか自動運転装置を装備した機械側の責任であるかといった法規則に関わる問題が新たに発生する。この問題は、地域社会での新しいモビリティのあり方を探る上でも関連をもつものであるので、弁護士、法津の専門家へのインタビューを行った。現在、この問題に対する確たる道筋がないことが分かった。

活動成果の公表

アンケート調査の結果をまとめ、協力している他大学の同様なアンケート結果と統合することによって、アンケート結果の信頼性をあげたうえで、自動運転技術の実用化の形をつくるベースにしていく。自動運転技術の実用化に関する内容とともに関連学会で公表する予定である（2015 年 10 月自動車技術会秋季大会）。

自動運転にかかわる責任の法的問題は、現在学会の中でも未整理であり、学界、行政、法曹界、技術者、関連企業がそれぞれの立場から意見を述べ、意見交換する企画が行われ今後も行われることになっている。この事業でインタビュー調査した結果を踏まえ、自動運転に関わる法律や責任の問題での公開フォーラムの中で意見を述べていくことにより、新しい自動運転技術の社会への導入に寄与していくことにしている（2014 年 12 月 11 日、自動車技術会フォーラム「自動運転の実用化の形を探る」で発表、2015 年 5 月 20 日、自動車技術会春季大会フォーラム「カー・ロボティクス—自動運転の社会導入に向けた最新動向と課題—」にて発表予定）。

地域志向教育研究事業として、自動運転を題材に「新しい技術の地域社会への導入」に関する諸問題を整理して、教育の中に取り入れることを検討していく。

平成26年度 地域志向教育研究経費 成果報告書(3)

活動項目	③コミュニティ情報ネットワーク		
フリガナ 氏　　名	マエダ カズアキ 前田 和昭	所属・職名	経営情報学部経営情報学科・教授
活動課題	講義映像を題材としたデジタル映像に関する教育研究		

活動組織
（分担者は本学の専任教員（助手を含む常勤の専任教員），協力者はそれ以外。）

フリガナ 氏　名	代表者及び分担者	所属・職名	現在の専門	学　位	役割分担
マエダカズアキ 前田 和昭	代表者	経営情報学科・教授	ソフトウェア工学	工学修士	外部専門家との会合の企画と 講義映像変換のノウハウを学生に指導

活動経過と成果

本教育活動では，学生が「知恵」を習得するために，専門家として働いている社会人と一緒に活動する機会を作りだし，今年度スタートしたCAACの講義映像を題材にして，学生がデジタル映像を変換・応用できるように経験を積むことを目的とした．

学生と専門家では現場で実施する仕事の質に雲泥の差がある．そこで，専門家と接する機会を積極的に作り，大学の授業では得ることのできない現場を学生に経験させ，専門家が持つ「知恵」を吸収できるように工夫した．さらに，吸収できた知恵を「実施」するために，デジタル形式の講義映像をインターネット配信に適した形式に変換し，配信システムに配備する作業を経験してもらった．

これらの作業を進めるにあたり，自由に改造可能であり，かつ，無料で入手可能なソフトウエアを学生に調査させた上で，その可能性を探ることにした．具体的には，Googleがアプリケーション開発で積極的に活用しているプログラミング言語Pythonで開発されたソフトウェアをダウンロードし，その内側を調べ上げ，改造することにした．学生が，与えられた作業の効率を上げるために，学生自身による調査を進めた上で，学生自身の手で改造を進めたところが素晴らしい．学生だけによる作業の結果として，講義映像をインターネット配信に適した形式に変換する作業が非常にスムーズに行えるようになった．

活動成果の公表

学生が動画変換を行い，試行的にインターネット上で視聴できるようなった講義動画ポータルの画面の一部（印刷の都合で，カラーの画面をグレースケールに変換ずみ）を以下に示す．未だ本格稼働までには至っていないものの，性能的にも機能的にも十分使えそうなレベルにまで達している．これら平成 26 年度の活動成果を外部に公表すると同時に，東海地域のコミュニティへ貢献するため，平成 27 年 2 月 11 日に浜松で開催される「オープンソースカンファレンス 2015」にて，本教育研究活動に参画した学生が発表することを予定している．

平成26年度 地域志向教育研究経費 成果報告書(4)

活動項目	③コミュニティ情報ネットワーク		
フリガナ 氏　　名	ﾐﾔｼﾀ　　ｺｳｼﾞ 宮下　浩二	所属・職名	生命健康科学部理学療法学科・准教授
活動課題	春日井市内高校運動部に対するスポーツ医療情報提供システムの試み		

活動組織
（分担者は本学の専任教員（助手を含む常勤の専任教員），協力者はそれ以外。）

フリガナ 氏　名	代表者及び 分担者	所属・職名	現在の専門	学　位	役割分担
ﾐﾔｼﾀｺｳｼﾞ 宮下浩二	代表者	生命健康科学部理学療法学科・准教授	理学療法学	博士	システムの運用（窓口）・学生指導
ﾔｻﾞﾜﾋﾛﾅﾘ 矢澤浩成	分担者	生命健康科学部理学療法学科講師	理学療法学	修士	研究補助

活動経過と成果

＜活動経過＞

12 月 1 日：春日井高校の教員に対して、「部活動におけるスポーツ外傷・障害の予防のために」をテーマとした講習会を開催。および、スポーツ医療に関する情報についての現状と問題点についてアンケート調査（調査のまとめは学生 2 名に依頼）

12 月 18 日：春日井高校水泳部の部員に対して、「ケガや故障の予防のためのトレーニング」について講義および実技指導。加えて、高校生の立場からみたスポーツ医療に関する現状と問題点についてアンケートおよび聞き取り調査。（この指導およびデータのまとめには学生 3 名が参加）

1 月 8～14 日：春日丘高校野球部で部員に対して、「ケガの実際およびその後の行動様式」についてアンケートおよび聞き取り調査。（この指導およびデータのまとめには学生 4 名が参加）春日丘高校へは来週 2 回さらに調査予定。

2 月 13 日：春日井高校ハンドボール部の部員に対して、「ケガや故障の予防のためのトレーニング」について講義および実技指導。加えて、高校生の立場からみたスポーツ医療に関する現状と問題点についてアンケートおよび聞き取り調査。（この指導およびデータのまとめには学生 1 名が参加）

＜成果＞

高校側のスケジュールの都合により現在進行中の事案が多く、最終結果には至っていないが、高校教員、運動部部員が現在抱える部活動に関連する医療的問題点の一端が垣間見られた。医療機関に関する情報が、部活動の現場にまでほとんど行き届いておらず、またその情報源も知られていない実態がわかった。ネット社会の現状でありながら、このような医療情報を高校性がネットで検索することは稀で、多くは母親の意見に従うということであり、今後の方策のヒントを伺う事ができた。

部員および指導者は部員が自分で日常的に行い得る障害予防方法に関する情報を望んでおり、これに対する講習会を実施した。今後の成果が期待できる。一方、教員と大学との情報交換も少しずつではあるが始まり、これはメール等のツールにより時間的制約が最小限で行えるという各立場の実情に対応しうる方法として、今後さらに検討していきたい。

活動成果の公表
まだ本格化しはじめたばかりであり、現時点では未定である。 ただし、アンケート結果等については、顧問教員および部員に対してフィードバックし、医療情報の活用方法等を伝達する予定である。これは今後も継続していく予定である。 また、医療機関に関わる問題もあり、これは関係する学会等で報告できる内容にまで進めていく予定である。

平成26年度 地域志向教育研究経費 成果報告書(5)

活動項目	③コミュニティ情報ネットワーク		
フリガナ 氏　　名	カワウチ　ノブユキ 河内　　信幸	所属・職名	国際関係学部国際文化学科・教授
活動課題	中部大生アクションプラン・春日井市国際交流プロジェクト		

活動組織
（分担者は本学の専任教員（助手を含む常勤の専任教員），協力者はそれ以外。）

フリガナ 氏　名	代表者及び 分担者	所属・職名	現在の専門	学　位	役割分担
カワウチ　ノブユキ 河内　信幸	代表者	国際文化・教授	アメリカ研究	博(文)	立案・具体化
ワザキ　ハルカ 和崎　春日	分担者	国際文化・教授	アフリカ研究	博(社)	総括・発信
ハノチ　セイコ 羽後　静子	分担者	国際文化・教授	国際ジェンダー研究	修(国際)	発表・社会貢献
ナカヤマ　ノリコ 中山　紀子	分担者	国際文化・教授	文化人類学	博(文)	学部の将来構想
ナカノ　トモアキ 中野　智章	分担者	国際文化・教授	エジプト学	博(文)	高大連携

活動経過と成果

＊5 月 24 日・25 日：名古屋学生エキスポへの参加（名古屋テレビ塔周辺）
＊8 月 10 日：中部大生と春日井市国際交流会ＫＩＦの連絡会
＊8 月 29 日～31 日：日本ど真ん中祭り参加企画(公益財団法人・日本ど真ん中祭文化財団との協力)
＊10 月 25 日・26 日：ワールドコラボフェスタ 2014＜学ぼう。そしてはじめよう：国際交流・国際協力・多文化共生＞（オアシス 21）への参加
＊11 月 2 日：学生発表会「学生よ、夢を語れ！　まだ見ぬ 100 周年に向けて」
国際関係学部ホームカミングデー(ありがとう先輩！　中部大学国際関係学部の「あの頃」と「今」、そして「これから」)
＊11 月 5 日：開学 50 周年記念行事「持続可能な地球と私のために」への学生参加
＊11 月 6 日：国際フォーラム「大学におけるグローバル人材の育成と国際協力」への学生サポート
＊11 月 29 日：世界民族衣装ファッションショー（民俗資料博物館との共催・中部大学第一高校との協力→高大連携）

活動成果の公表

＊学部のホームページを通じて、次のようなジャンルで活動成果を公表・発信
①Web 特派員：イベントに参加した学生が、生の声で体験したことを発信→在校生や卒業生へのアピール
・名古屋学生エキスポ、ワールドコラボフェスタ 2014、学生発表会「学生よ、夢を語れ！」、国際関係学部ホームカミングデー、世界民族衣装ファッションショーなど
②学部トピックス
・イベントの実施を公表し、適宜、社会貢献の役割をトピカルに発信
③研究室をのぞいてみよう
・留学や海外研修、フィールドワークの報告…教員の専門と学生の活動がリンクしていることを公表
④国際ニュースの深層を読む
・多くのイベントを通して、“think globally, act locally”の視点から、地域を基盤に世界を展望することの重要性を発信

平成26年度 地域志向教育研究経費 成果報告書(6)

活動項目	④生活・住環境を考えるまちづくり		
フリガナ 氏　　名	コウダ　ミチコ 甲田　道子	所属・職名	応用生物学部食品栄養科学科・准教授
活動課題	高蔵寺ニュータウンの在宅高齢者の食環境整備に向けての実態調査		

活動組織
（分担者は本学の専任教員（助手を含む常勤の専任教員），協力者はそれ以外。）

フリガナ 氏　名	代表者及び 分担者	所属・職名	現在の専門	学　位	役割分担
コウダ　ミチコ 甲田　道子	代表者	食品栄養科学科・准教授	栄養学・疫学	教育学修士	企画、実施、分析、統括

活動経過と成果

＜目的＞
高齢者の食生活を考える上では，栄養素等摂取量だけでなく，健康的で豊かな食生活を営み食事を楽しむことのできる食環境の整備についても考える必要がある．しかし，高齢者の中には，近くに食料品店がなかったり体力低下や健康上の問題で買物に困難をきたしたりする者もいる．本研究では，高蔵寺ニュータウンの在宅高齢者を対象として，食料品の入手方法や健康状態，食事への満足度，買物への要望，食事内容，食料品店の位置等を調査し，食環境の問題点や課題を明らかにすることを目的とした．

＜方法＞
自記式のアンケート調査を実施した．食料品の入手方法，買い物の不便さや現在抱えている問題，食事内容等についての 31 の質問で構成されている．アンケート用紙は返送してもらった．
なお，この調査は中部大学倫理委員会の承認を得ている（承認番号 260071）．回答は無記名であり，個人を特定しない旨を明記した．アンケート用紙の返送をもって本研究に同意したとみなした．

＜活動経過＞
平成 26 年 11 月：老人クラブに所属している人へのアンケート用紙の配布（550 部用意）を高蔵寺老人クラブ会長に依頼した．
平成 27 年 1 月：1 月末までに 349 部の回答があった．

＜結果の概要＞

①回答者の居住地区は，藤山台 41 名（12%），岩成台 59 名（17%），高森台 119 名（34%），中央台 22 名（6%），石尾台 59 名（17%），押沢台 38 名（11%），高座台 4 名（1%），その他・未記入 7 名.

②年齢は，60-64 歳 19 名（5%），65-69 歳 43 名（12%），70-74 歳 91 名（26%），75-79 歳 87 名（25%），80-84 歳 70 名（20%），85 歳以上 30 名（9%），未記入 9 名で，半数が 70 歳代であった．家族構成は，ひとり暮らし 64 名（18%），夫婦のみ 173 名（50%），本人（夫婦）と子ども 70 名（20%），本人と親 2 名（1%），その他 34 名（10%），未記入 6 名で，約 7 割が「夫婦のみ」あるいは「ひとり暮らし」の世帯であった.

③食料品の買物に不便を感じている人は 106 名（30.4%）で，それ以外の人はそれほど感じていないと回答していた．不便を感じる理由として，「近くに店がない」が 85 名（感じている人の 80%），「歩いて買物に行くのが大変」が 51 名（同 48%），「家族の協力なしでは買い物に行けない」が 34 名（同 32%），「重い物が持てないので，一度に少量しか買えない」が 33 名（同 31%），「安くて便利な交通手段がない」が 31 名（同 29%）であった.

④食料品の買物に関して要望があると回答した人は 133 名（38%）で，「近くに店があると良い」が 117 名（要望のある人の 88%），「安くて便利な交通手段があると良い」が 46 名（同 35%），「重い物を配達してほしい」が 37 名（同 28%）であった.

⑤家から一番近い食料品店まで歩くとしたらかかる時間は，5 分以内 34 名（10%），10 分以内 75 名（21%），20 分以内 112 名（32%），30 分以内 88 名（25%），31 分以上 31 名（9%）であった.

このように，10 分以内に食料品店があると回答した人は全体の 3 割であり，不便を感じている人の 8 割が「近くに店のない」ことを挙げていた．大型スーパーの開店の影響もあり個人商店が少なくなっていることが買い物を不便にしている大きな要因であり，それが買い物への要望につながっていると考えられた．また，高蔵寺ニュータウンは坂が多いのが特徴である．自家用車の運転が可能なうちは買い物に不便を感じないが，高齢になり運転が困難になると自分自身での買い物が難しくなるのではないかと推察された.

＜今後の予定＞

買い物の不便さと年齢や家族構成，交通手段，食品摂取状況等との関係について分析を進めていく．高蔵寺ニュータウンが抱えている食環境に関する問題点を明らかにしたい.

活動成果の公表

調査結果の概要を老人クラブに配付することになっている．また，栄養や健康に関する学会で発表し報告書としてまとめる予定である.

平成26年度 地域志向教育研究経費 成果報告書(7)

活動項目	④生活・住環境を考えるまちづくり		
フリガナ 氏　　名	テシガワラ　　セイジ 勅使川原　誠司	所属・職名	工学部建築学科・教授
活動課題	春日井市の地震被害と安全評価に関する調査研究		

活動組織
（分担者は本学の専任教員（助手を含む常勤の専任教員），協力者はそれ以外。）

フリガナ 氏　名	代表者及び 分担者	所属・職名	現在の専門	学　位	役割分担
テシガワラ　セイジ 勅使川原　誠司	代表者	建築学科・教授	建築構造	工学博士	調査・学生指導全部

活動経過と成果

建築学科のゼミ学生・卒研生を中心に、大学周辺の地域を対象に地震被害ハザードマップを作成する為の建物属性(築年数、構造、階数、屋根種類等)を実地調査で収集し、春日井市役所の家屋台帳との比較を行っている。このデータを基に、勅使川原研究室が 15 年ほど前から収集したデータによる被害予測結果と比べ、地域の建物の耐震対策状況を把握し、地域の安全避難経路の作成、避難場所の決定等を考える。これまでに、高蔵寺ニュータウン内の高森台 1-10 丁目、高座台 1-5 丁目、岩成台 1-10 丁目他と再開発が進んでいる勝川町 1-4 丁目の家屋台帳転記作業が終了し、現在これらのデータベース化を進めている。また、これらの経験を活かして尾張西部の津島市を対象に実地調査を実施し、地震ハザードマップの作成を行った。

活動成果の公表

この 10 年ほど、勅使川原研究室では、卒研生を主として夏休みに春日井市の防災訓練に参加して、春日井市の地震被害ハザードマップの研究紹介を行っている。パソコンによるシュミレーションを実際に体験してもらうものであるが、子供からお年寄りまで非常に興味を持って取り組んでおり、参加学生も質問に答えるなど勉強の場となっている。本年度も平成 26 年 8 月 24 日に岩成台西小学校での訓練に参加し 2 千人規模の避難訓練会場で地震防災についての研究成果を紹介した。また、これらの活動成果については平成 27 年 1 月 21 日に中部大学のテレビ中継で学生向けに地震防災・減災をテーマに話をし、この 2 月中は春日井ケーブルテレビの中部大学アワーに出演し、春日井市の地震被害予測を中心とした「いつ起きるかもしれない地震に備えて」の題目で解説を行っており、春日井市を始めとする愛知県尾張地域の地震被害予測結果も論文等で発表している。

平成26年度 地域志向教育研究経費 成果報告書(8)

活動項目	④生活・住環境を考えるまちづくり		
フリガナ 氏　　名	トヨダ　ヨウイチ 豊田　洋一	所属・職名	工学部建築学科　教授
活動課題	地域や人から学ぶ建築をつくるための実践的学習		

活動組織
（分担者は本学の専任教員（助手を含む常勤の専任教員），協力者はそれ以外。）

フリガナ 氏　名	代表者及び 分担者	所属・職名	現在の専門	学　位	役割分担
トヨダ　ヨウイチ 豊田　洋一	代表者	工学部建築学科 教授	建築計画	工学修士	全体

活動経過と成果

活動は下記の３つの内容から構成される。

① 高蔵寺ニュータウンの新たなまちづくりの手法提案
高蔵寺ニュータウンセンター地区の再生について卒業研究の課題として取り上げ、従来からの調査を継続し具体的な再生案としてまとめた。提案は最終的に外部発表用に手直しをして展示・発表を行い、関係者等の意見を聴取し、再検討を行う予定である。

② まちづくり拠点カフェボーノのファサードリニューアル計画の実施
前年度にまとめられた最終案を実施するための検討を行い、学内にて加工作業を行い、現地にて設置及び仕上げ作業を行った。その後、経過を観察し、不備な点などを改善した。

③ まちづくり活動への参加・支援
・高蔵寺商店街振興組合が行う夏祭「楽市楽座」（７月２６日）への参加・協力
・高蔵寺ニュータウン押沢台北町内会が行う「ブラブラまつり」（１０月１１日）への参加・協力

活動成果の公表

各活動は下記のように公表された

① については下記３編の卒業設計としてまとめられた。今後、展示の予定。
・「高蔵寺ニュータウンセンター地区に必要な施設の検討」
・「高蔵寺ニュータウンセンター地区活性化への提案」
・「高蔵寺ニュータウン内のバス交通に関する提案」

② については下記メディアにて取り上げられた
・中日新聞　「中部大生　カフェに木製デッキ」平成２６年１０月
・くらしのニュース　「バルカフェボーノがリニューアル　中部大生の若い感性を生かす」　平成２６年１０月２３日

③ については下記メディアにて取り上げられた
・中日新聞　「自宅が祭り会場に　春日井で工作教室やフリマ」　平成２６年１０月１２日
・春日井ケーブルテレビ　Ｃステーション「押沢台北ブラブラまつり」　平成２６年１０月

平成26年度 地域志向教育研究経費 成果報告書(9)

活動項目	④生活・住環境を考えるまちづくり		
フリガナ 氏　　名	ユクモト　マサオ 行本　正雄	所属・職名	工学部機械工学科　教授
活動課題	春日井市の廃食油の回収とそれを原料とする BDFの製造・利用		

活動組織
（分担者は本学の専任教員（助手を含む常勤の専任教員），協力者はそれ以外。）

フリガナ 氏　名	代表者及び 分担者	所属・職名	現在の専門	学　位	役割分担
ユクモト　マサオ 行本　正雄	代表者	機械工学科・教授	熱工学	博士(工学)	取りまとめ
ナミオカ　トモアキ 波岡　知昭	分担者	機械工学科・准教授	エネルギー工学	博士(工学)	BDF 製造
タケジマ　キヨシ 竹島　喜芳	分担者	国際 GIS センター・准教授	地球システム学	農学(修士)	GIS 指導

活動経過と成果

1,現状調査(春日井市環境部に協力)は廃食油回収ステーションの位置情報、春日井市民の天ぷら油消費量などの情報を収集しており、道路網などの GIS に使用する際に使用する基本的なデータは取得済みである。また、本年度初めて導入で、GIS に関する様々な知識を得るため、ArcGIS などのソフトを実際に使用し実務学習を毎週 1 回行った。

2,BDF 燃料の製造(行本研、波岡研を中心に)は今年度特に力を入れて研究を行った。装置の大型化に関して珪藻土と活性白土を使用して精製を行う事により、遠心分離機を使用する必要がなくなり電力消費を押さえる事が出来た。珪藻土と活性白土は定期的な取り替えが必要であるが、両者とも安価で入手可能なものである為、精製時のコスト削減にも有効なものである。また、この行程で製造された BDF の成分分析結果より JIS 規格を十分に満足する事が出来た。今後は、珪藻土と活性白土の取り替え時期と使用量の最適値を明確にしていく。

3,地域への貢献では、データの取得が十分に行えなかった為、回収ルート・製造プラントの検討中であり、実験で製造した BDF を使用した春日井市でのゴミ収集車の実証運転は 3 月末までに実施する予定である。

活動成果の公表

・2014 年 3 月 17 日(月)の東海学生会第 45 回学生員卒業研究発表講演会にて、BDF と DME の混合燃料を用いた超小型発電機の排ガス特性の改善と題し BDF の燃焼時に排出される排ガスの改善について発表を行った。
・2014 年 7 月 27 日（日）に愛知県田原市の田原文化会館で開催された田原エコフェスタにて、廃食油を原料とするバイオマス燃料とその利用に関するパネル展示を行い、地域住民への説明を行った。
・2014 年 7 月 22 日（火）の春日井市役所環境部に対して、春日井市での廃食油の利用システムの改善について現状報告を行った。
・2015 年 8 月 3 日(月)のエネルギー学会で本年度の成果の発表を予定している。

平成26年度 地域志向教育研究経費 成果報告書(10)

活動項目	④生活・住環境を考えるまちづくり		
フリガナ 氏　　名	イケザワ　シュンジロウ 池澤　俊治郎	所属・職名	工学部電子情報工学科・教授
活動課題	大気圧プラズマにより生成した硝酸溶液肥料を花壇（高森南花の会）に用いたまちづくり		

活動組織
（分担者は本学の専任教員（助手を含む常勤の専任教員），協力者はそれ以外。）

フリガナ 氏　名	代表者及び分担者	所属・職名	現在の専門	学　位	役割分担
イケザワ　シュンジロウ 池澤　俊治郎	代表者	電子情報工学科・教授	プラズマ応用	工学博士	全体のまとめ
ニヨムラ　オサム 饒村　修	分担者	応用化学科・准教授	有機合成化学	博　士 （工学）	化学反応式の検討

活動経過と成果

大気圧プラズマは環境問題を解決する重要な手段である。大気圧 Air または酸素 O_2 プラズマをアンモニア溶液（例えば屎尿）に入射すると硝酸イオンが容易に生成されること[1]、及び植物は硝酸イオンを容易に吸収すること[2]が今までの研究でわかっている。

（1）　まず硝酸溶液肥料をプラズマで作成した。装置は文献[1]を用い硝酸イオン測定器はデジタルパックテスト（共立理化学研究所、DPM-$NO3^-$-N）を用いた。Fig.1 に Air 流量 20～30L/min、し尿 150mL、距離ｄ＝1ｃｍの結果を示す。O_2 プラズマの場合は硝酸イオン測定値が約十分の一と小さかった。これは O_2 プラズマの場合は窒素が含まれていないためであろう。Air と O_2 プラズマでそれぞれ 20L の溶液肥料を作成した。

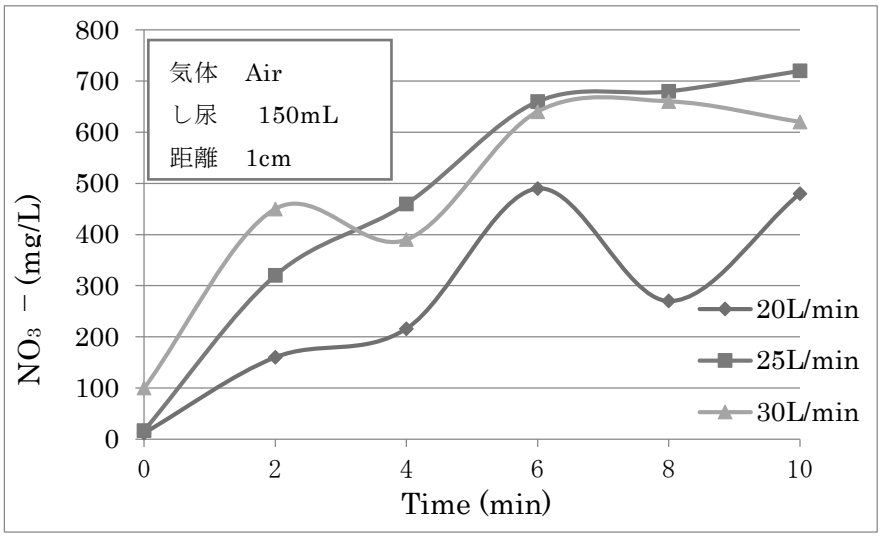


Fig.1　NO_3^- density increased in excreta by Air plasma

（2）高森南花の会花壇の作成と世話

町内担当者の小塚孝志氏、餅 武司氏（高森台南団地町内会長：大平常二氏）、卒研生、院生により次のように花壇を作成し世話をした。

（2-1）6 月 8 日に作成した溶液肥料を花壇（12m x 60ｃｍ）に散布した。

（2-2）6 月 19 日春日井市緑化推進協議会の補助によりサルビア（20 株）、マリンゴールド(20 株)を 2 列で植え込んだ。

（2-3）週に 1～2 回、除草や注水、追加溶液肥料等の世話をした。

Fig.2 写真上は 7 月 30 日散水の世話をする学生、写真下は 9 月 4 日早朝の花壇の様子である。左の通路とバス停は昼間大勢の人が通行し、花壇は人々の癒しになっている。

Fig.2　Flowers grown up by the excreta of NO_3^-

成果として

この地域住民と学生が協調して、春日井市の補助を得て、地域活性化のため作成した硝酸溶液肥料を用い高森南花の会花壇を作成し住民に喜んでもらい、癒しを与えたと思われる。また春日井市の花のまちづくりコンクールに出品し「奨励賞」を受賞した。

文献：[1] 池澤、饒村、長瀬、総合工学(中部大学総合工学研究所)第 26 巻 pp.64-71（2014）
[2] 石川雄一、植物にとっての硝酸イオン、ファームテック㈱技術情報のページ(Web)(2014)

活動成果の公表

・池澤俊治郎、大気圧ラズマの環境への応用、中部大学フェアー、2014（9 月 18 日）
・藤井栄人、渡邊直弥、プラズマによる硝酸溶液肥料を用いた春日井市の花のまちづくり、中部大学フェアー、(大学院ブース)、2014（9 月 18 日）
・高森南花の会（代表・大平常二)、奨励賞の受賞、春日井市緑化推進協議会（会長・春日井市長 伊藤 太）2014（10 月 7 日）

平成26年度 地域志向教育研究経費 成果報告書(11)

活動項目	⑤高齢者と学生の交流、高齢者宅へのLearning Home Stay（LHS）		
フリガナ 氏　　名	タチ　ノリヒデ 城　憲秀	所属・職名	保健看護学科・教授
活動課題	学生の傾聴による介護認定高齢者のQOL向上の試み		

活動組織
（分担者は本学の専任教員（助手を含む常勤の専任教員），協力者はそれ以外。）

フリガナ 氏　名	代表者及び分担者	所属・職名	現在の専門	学　位	役割分担
たち　のりひで 城　憲秀	代表者	保健看護学科・教授	公衆衛生学	医学博士	研究活動総括・全般
ふくた　みねこ 福田　峰子	分担者	保健看護学科・准教授	老年看護学	博士（看護学）	学生傾聴活動の指導・訪問時の記録
おじお　やすよ 小塩　泰代	分担者	保健看護学科・講師	在宅看護学	修士（看護学）	学生訪問活動の指導

活動経過と成果

【活動目的】

われわれは、科研費による先行研究から、学生が高齢者と同居あるいは近住して高齢者の介護にあたるための基礎研究を前年度までに実施してきた。学生・高齢者の両者に対する質問紙調査からは、ともにそれほど濃密な関係を構築するよりは必要に応じて接触することを希望していることが判明した。すなわち、同居等による交流を図るためには、それ以前に両者の意識改革が必要なことが示唆されたのである。そこで、本教育研究では、学生によって高齢者（とくに被介護者）のケアを進めるうえの第一歩として、高齢者の過去などを傾聴することで、高齢者のQOL向上が果たせないかを検討する目的で企画された。同時に、学生に対しては、傾聴法という手法により、高齢者が過ごしてきた過去や考え方を積極的に聞き取り、歴史や経験を現代の学生生活や今後の人生に活かすような「知恵」を得ることを目的としている。

【方法】このような目的を達成するために、以下のような計画を立てた。

① 対象者：

学生；当面、本研究に参加する学生は、健康に対する基盤ができている生命健康科学部の学生とする。希望者を募り、これらの学生に対して傾聴法や簡易な高齢者ケア手法などを教育する。なお、この教育はカリキュラム外の活動で行う。

高齢者;春日井市内の要介護状態にある65歳以上の高齢者で研究への参加を自らの意志で承諾する者とする。

② 訪問と傾聴内容；

高齢者訪問にあたっては、訪問看護ステーションの協力のもとに、ステーションの看護師とともに訪問し、その際に、高齢者との会話（傾聴）を30分程度実施する。訪問の初期の時点においては小塩もしくは福田が同行する。高齢者との会話では、高齢者が話したいことを中心にして進めていく。過去の出来事や今の思いなど内容を限定せずに会話を進める。

③測定項目

(1)QOL　参加高齢者からは活動の前後におけるQOLをWHO版質問紙を用いて測定する。本人が

記入できないときは介護者あるいは研究者が聞き取りながら記入する。
(2)聞き取り内容　高齢者との会話は、その骨子を記録し、後日、質的調査のために利用する。
(3)参加学生の満足度・人間的発達　活動参加前後における学生の状況を評価する。
④解析
上記のデータを量的・質的に解析し、本活動の有効性を確認する。
期待される成果として、本活動結果から学生による要介護高齢者への支援の在り方、基本的情報やアプローチの仕方を明らかにできるものと期待している。

【活動経過と成果】上記計画を立案したが、実際に高齢者に接することを考慮すると、高齢者への思いやりやマナーなどについて十分な研修を行ってから実践することが重要である。そのため、本研究の現時点における実状は、学生によるボランティア活動として、実践研修が進行しているところと考えている。これまでの活動経過は以下の通りである。

6 月 26 日　研究者会議：対象学年の検討、妥当な学生数の検討、おおよその日程予定、対象高齢者および学生への質問項目の検討、利用施設の候補を検討
8 月 19 日　研究者会議：傾聴トレーニングの方法について検討、学生の募集の仕方（2 年生を中心に募集）、学生人数の検討、今後のスケジュール確認、利用施設の検討（介護老人保健施設、介護カフェを候補とする）
9 月 10 日　研究者による施設訪問：「あいあいの郷」へ研究協力のお願いと施設見学
9 月 23 日　老年看護学講義参加：傾聴トレーニング講師（小菅もと子先生）との顔合わせ。授業内で実施する傾聴法の講義に参加し傾聴トレーニングの体験と対象学生の受講内容の把握
9 月 25 日　老年看護学臨地実習に参加：傾聴法演習へ参加、傾聴法の演習方法を見学および体験
10 月 31 日　学生との会議①：学生との顔合わせ　学生出席 7 名、趣旨の説明、名簿作成、傾聴トレーニングの日程調整を実施
11 月 14 日　学生との会議②：学生出席 9 名、傾聴トレーニング実施日程の確認（12 月 2 日に決定）
12 月 2 日　傾聴トレーニングの実施　講師（小菅もと子先生）から傾聴法のトレーニングを受ける。講義後、3 人 1 組でロールプレイ実施。学生は演習を通して自分の傾向を把握し徐々に傾聴の姿勢が取れつつある。
12 月 16 日　介護カフェ「てとりんハウス」へ挨拶および打ち合わせ。学生の訪問日程の確認、対象高齢者の有無確認。午前の方が対象者が多いなどの情報をいただく
12 月 22 日以降　介護カフェ「てとりんハウス」にて、傾聴を実施し、お昼ご飯を（一緒に）食べ終了、というスケジュールで研修中

活動成果の公表

活動経過にも記しているように、現時点では研究というよりもボランティアによる研修中という実状にあると思われ、今後、確実な傾聴活動が期待されると考えられる時点より、計画に従った研究活動に移行したいと思っている。成果の公表はそれ以降に学会等での発表、あるいは学会誌等への寄稿を予定している。

平成26年度 地域志向教育研究経費 成果報告書(12)

活動項目	⑤高齢者と学生の交流、高齢者宅への Learning Home Stay(LHS)		
フリガナ 氏　　名	ノダ　　アキコ 野田　明子	所属・職名	臨床検査技術教育・実習センター・教授
活動課題	高齢者認知症予防に対する在宅臨床検査教育		

活動組織
（分担者は本学の専任教員（助手を含む常勤の専任教員），協力者はそれ以外。）

フリガナ 氏　名	代表者及び分担者	所属・職名	現在の専門	学　位	役割分担
ノダ　アキコ 野田　明子	代表者	臨床検査技術教育・実習センター・教授	循環病態学・睡眠医学	医学博士	研究総括・臨床検査・学生指導

活動経過と成果

我が国では、65 歳以上の高齢者のうち、認知症の人は推計 15%で、2012 年時点で約 462 万人に上ることが厚生労働省研究班の調査で明らかにされた。本教育研究の目的は、①超高齢化社会で問題となっている認知症予防を目指すこと、②臨床検査知識・技術を深め、さらには、未だ十分確立されていない臨床検査技師の在宅医療における役割やチーム医療を学ばせることである。

本研究に 19 名の学生が参加した。参加学生は、第一段階として、認知症に関する臨床検査知識・技術を学んだ。地域高齢者を対象とした健康教室では、尿検査、脈波速度検査、超音波検査および脳機能検査を施行した。また、地域高齢者の在宅訪問または大学内で、臨床検査説明、尿検査、超音波検査、睡眠検査、脳機能検査および認知機能検査を施行した。本研究は倫理委員会の承認後、対象者に同意を得て実施した。

今回の活動により、臨床検査技師を目指す学生や医療関連企業に就職を予定する学生の臨床検査医学の知識・技術を高め、さらに、地域高齢者と健康長寿および認知症予防に対する討論やチーム医療についての理解を深めることとなった。超音波検査による動脈硬化評価、睡眠検査は非侵襲的であり、在宅で十分実施可能であることが今回明らかとなった。

超高齢化社会を背景として、今後、臨床検査の現場において、在宅訪問による臨床検査の説明や実施は、認知症予防および健康科学を学ぶ地域志向教育の観点からも、重要な位置づけになる可能性が考えられた。

活動成果の公表

成果の一部を 2014 年度生命健康科学部生命医科学科卒業研究発表会で報告する予定である。また、現在、関連の学会誌への投稿準備を進めている。

平成26年度 地域志向教育研究経費 成果報告書(13)

活動項目	⑤高齢者と学生の交流、高齢者宅への Learning Home Stay（LHS）		
フリガナ 氏　　名	ホリ　フミコ 堀　文子	所属・職名	生命健康科学部作業療法学科･准教授
活動課題	大学生のための世代間交流による実践型教育の創造		

活動組織
（分担者は本学の専任教員（助手を含む常勤の専任教員），協力者はそれ以外。）

フリガナ 氏　名	代表者及び分担者	所属・職名	現在の専門	学　位	役割分担
ホリ　フミコ 堀　文子	代表者	生命健康科学部作業療法学科・准教授	基礎看護学	看護学修士	学生教育・世代間交流活動の企画・運営
トダ　カオル 戸田　香	分担者	生命健康科学部理学療法学科・准教授	内部障害理学療法	博士(医学)	地域高齢者の窓口・世代間交流活動の企画・運営
サトウ　トモミ 佐藤　友美	分担者	人文学部　心理学科・講師	発達心理学	博士（人文科学）	質問紙作成・データ集計
スギモト　ヒデハル 杉本　英晴	分担者	人文学部・助教	教育心理学	修士（人間科学）	質問紙作成・データ集計
タニカガ　ミキ 谷利　美希	分担者 （代表者）	医療技術実習ｾﾝﾀｰ・作業療法学科・助手	中枢疾患の作業療法	修士（リハビリテーション療法学）	質問紙作成・データ集計・学生教育・世代間交流活動の企画・運営

活動経過と成果

【活動経過】

本年度は大学生と地域在住高齢者の学内外における 5 回の交流会と 3 世帯に 2 名ずつの学生（計 6 名）がホームステイ（LHS）を行なった。

交流会日程及び内容を、表に示した。

活動参加前と終了した 1 月に参加経験者と理学療法学科と作業療法学科の 1～3 年に対して高齢者観の変化、自己効力感、コミュニケーションスキルなどの変化についての調査と各世代間交流会の前後に 7 項目の対比する質問のアンケートを実施した。設問は表 2 に示す。また、高齢者の理解と高齢者に接するときに気を付けた方がよい事については、当てはまると回答した学生に具体的内容の記述を求めた。

交流会日程及び内容

回数	日程	テーマ（講師など）	参加者数	
			高齢者	学生
第1回	5月28日（水） 15：15～16：45	第1回学生教育セミナー 「高蔵寺NTの今昔を知ろう！」曾田忠宏 氏 座談会　「こんな交流、あったらいいな！！」	18	40
第2回	6月28日（土） 13：30～16：00	ガラス小物雑貨制作体験 「手軽で簡単！　ガラス細工を作ろう！　」	7	28
第3回	7月12日　（土） 13：30～15：30	ミニ講義と調理体験 「ゴマを知り、ゴマを味わおう！」	7	14
第4回	11月8日　（土） 9：30～15：30	体力測定会 「あなたの体力・血管年齢は？！！」	43	45
第5回	12月13日　（土） 13：30～15：30	バルーンアート体験 「クリスマスツリーとサンタを作ろう！」	12	8
合計	合計		87	135

交流会前後の回答（1：あてはまらない、2：やや当てはまる、3：当てはまる、4：よくあてはまる、5：非常によく当てはまる）を比較する。

設　　問	1	(%)	2	(%)	3	(%)	4	(%)	5	(%)	合計
今回の世代間交流会への参加を楽しみにしている。	0	0.0	12	8.9	27	20.0	66	48.9	30	22.2	135
今回の世代間交流会に参加して楽しかった。	0	0.0	1	0.9	11	10.4	31	29.2	**63**	**59.4**	106
今回の世代間交流会に参加することは、自分のためになると思う。	1	0.7	6	4.4	16	11.9	53	39.3	59	43.7	135
今回の世代間交流会に参加したことは、自分のためになった。	0	0.0	2	1.9	8	7.5	39	36.8	**57**	**53.8**	106
高齢者との交流に必要なマナーを守ることができる。	2	1.5	5	3.7	36	26.7	57	42.2	35	25.9	135
高齢者との交流に必要なマナーを守ることができる。	0	0.0	3	2.8	18	17.0	59	55.7	26	24.5	106
積極的に高齢者とコミュニケーションを取ることができる。	1	0.7	18	13.4	57	42.5	39	29.1	19	14.2	134
積極的に高齢者とコミュニケーションを取ることができる。	0	0.0	8	7.5	22	20.8	**44**	**41.5**	**32**	**30.2**	106
高齢者に対して十分に理解している。	7	5.2	60	44.4	51	37.8	15	11.1	2	1.5	135
高齢者に対して十分に理解している。	3	2.8	29	27.4	43	40.6	27	25.5	4	3.8	106
今後、高齢者に接する時に気を付けた方がよいことが見つかると思う。	**2**	**1.5**	22	16.3	48	35.6	46	34.1	17	12.6	135
今後、高齢者に接する時に気を付けた方がよいことが見つかった。	**4**	**3.8**	22	20.8	38	35.8	29	27.4	13	12.3	106
高齢者との交流を積極的に行いたいと思う。	2	1.5	4	3.0	24	17.8	51	37.8	54	40.0	135
高齢者との交流を積極的に行いたいと思う。	0	0.0	2	1.9	9	8.5	33	31.1	**62**	**58.5**	106
前	15	11.8	127	49.0	259	79.2	327	151.4	216	22.9	944
後	7	10.4	67	45.0	149	56.9	262	101.9	257	34.6	742

交流会前には不安が強く、楽しみを期待できなかった学生が、参加後楽しかったと感じる割合が増えていた。また、マナーやコミュニケーションなども参加後に自己評価が高くなっていた。しかし、高齢者の理解や接する時の配慮については、参加者が元気な高齢者であることや短時間の交流であったために気づけていないことがうかがえた。今後の交流会への参加の意欲も向上しており、交流会の参加が高齢者理解やコミュニケーションの向上に効果が期待できると思われる。

LHS に向けては、4 月に世代間交流会ならびに LHS への参加学生募集、地域への案内等の発送の後、平成 26 年 7 月 31 日（木）高齢者・学生世代間交流　Learning Homestay（LHS）トライアル 説明会を実施し、3 世帯 4 名の参加を得た。その後、マッチングのためのお見合い交流会を 8 月 28 日（木）11：30～14：00、50 号館 3 階　看護実習センター会議室にて実施した。ホストファミリーごとのテーブルへホームスティ予定学生がペアで順に回っていき、紹介や家庭の状況など情報交換を行った。（写真）

9 月に 2 泊 3 日および 3 泊 4 日の LHS を実施した。

終了後学生には今回の参加目的や達成度についてインタビューを実施、シニアには 9 月 30 日にご自宅を回り感想や今後に向けてのご意見を頂き、地域連携講演会での発表をお願いした。

10 月 25 日（土）の地域連携講演会では、LHS トライアルの報告会を実施した。

6 名の学生全てが参加してよかったと述べた。参加目標は「たくさんコミュニケーションをとる」「地域について知る」など各自が目標をもって参加した。目標の達成状況は「コミュニケーションの苦手意識の克服につながった」「将来の目標のために高齢者とのかかわりが持ててよかった」「地域の方との交流の機会があり活動を知ることができた」と得られたものを評価していた。また、他人の家に入ることへの抵抗感や不安があったが、高齢者の暮らしを見聞きし、ともに体験することで、生活の大変さや工夫など気づきも多く、高齢者の特性を実感する機会となっていた。

生活を共にするという事では、一緒に食事を作ったり、食後の片づけを担ったりと普段あまり行っていないことを実施したり、窓の開け方や締め方にもこだわりがあり、長い人生で培われてきたことを感じる機会ともなっていた。また、ホストファミリーとのかかわりだけでなく、地域の活動にも同行させていただき、視野を広げることができていた。

数日間という限られた時間であったが、学生は多くを学ぶことができていた。

今後、アンケートの分析を通して、具体的な成果について検討を行いたいと考えている。

活動成果の公表

10 月 25 日（土）の地域連携講演会で、LHS トライアルの報告会を実施した。

平成26年度 地域志向教育研究経費 成果報告書(14)

活動項目	⑥シニア大学 Chubu University Active Again College(CAAC)		
フリガナ 氏　　名	堀田 典生(ホッタノリオ)	所属・職名	スポーツ保健医療学科・講師
活動課題	科学的根拠に基づく身体トレーニングを通じて、共に学び、共に育ち、健康社会実現への貢献を目指す		

活動組織
（分担者は本学の専任教員（助手を含む常勤の専任教員），協力者はそれ以外。

フリガナ 氏　　名	代表者及び分担者	所属・職名	現在の専門	学　位	役割分担
堀田(ホッタ)　典生(ノリオ)	代表者	スポーツ保健医療学科・講師	運動生理学	博士(医学)	研究全般
對馬(ツシマ)　明(アキラ)	分担者	理学療法学科・准教授	理学療法学		CAAC 受講生対応

活動経過と成果

目的

大学という高等教育・研究機関でしかできない科学的根拠に基づく身体トレーニング方法を高齢者と学生が共に学び，そして，それを地域に広めることで街全体が健康になり，健康社会実現を目指すという教育研究活動を実施した.

そしてこの課題を通じて，学生には科学的根拠に基づく運動指導や体力測定結果のフィードバックにより運動指導の成果をあげることができることと運動がいかに健康の維持・増進に重要であるかを学ばせるのと同時に，高齢者への接遇方法を学ばせた．そして，これらの活動が学生のキャリア形成の助力となり得るか否かを検討することを目的とした.

学生側には，科学的手法によって得られた研究結果は説得力を持ち，それを地域社会に還元することで価値が見いだせることを学ぶことができ，キャリア形成に役立てることができると考えた．一方参加者(高齢者)には，学生と CAAC 科目の中で接することで，本大学を身近なものと感じ，正しい運動方法は効果的に健康の維持・増進につなげることができることを体験できると考えた．そして，以上より，本学にて学生・高齢者一緒に活動する環境となり，共育・共学を加速させることにつながり得るとの期待の下研究は実施された.

計画・方法

1)生命健康科学部の学生を対象にした．その理由は，生命健康科学部が，医学の基礎と生命科学技術(科学的根拠)を基盤に人々の健康に貢献することを第一に掲げている学部だからであった． 2) CAAC の 1 年次共通科目“健康増進実習”を利用し，半年間，高齢者と共に実習を受け，さらに指導や身体測定結果の管理およびそのフィードバックに関わった．3) 授業の最後に，学生と受講高齢者双方にアンケートを実施し，この取り組みが両者にどのような効果があるのか調査した．堀田(代表者)が研究全般を担当し，對馬(分担者)が CAAC 受講者の対応を行った.

成果

スポーツ保健医療学科 6 名(4 年 1 名, 3 年 1 名,2 年 4 名)が本プロジェクトに参加した. 対象となった CAAC 授業の受講生は, 11 人であった. 授業は 16 回実施され, 初回と最終回が体力測定であった. 最終回の体力測定では, 運動の成果を知るためにも初回の記録との比較を示しながら行った. 全ての項目において平均値は向上していた.

また, 最終回に学生及び受講生にアンケートを実施した. 1,全く思わない, 2,思わない, 3,どちらでもない, 4,思う, 5,とても思う, の 5 件法にて質問した. 共学の精神に基づきお互いに何か教えたかという質問に対して, 受講生側が, 4,思う, 5,とても思うと答えた割合が 6 割だったのに対して, 学生側のそれは 10 割であった. 一方で, 共学の精神に基づきお互いに何か教わったという質問に対しては, 4,思う, 5,とても思うと答えた割合がお互いに 10 割を占めており, 我々の本活動が, 本事業の『共学』の目的達成の成功裏に実施されていることが確認できた.

本活動は, 受講生に対して, リーダーとして地域の方々に健康運動に関して学習したことを広めるという目的の下実施しているが, それができたかの質問に対しては, 4,思う, 5,とても思うと答えた方は 56%に留まった. 一方で,学生に対するキャリア形成に役に立ったかという質問に対しては,4,思う,5,とても思うとの答えは 100%であった.『共育』の観点からは, 受講生に対する本活動の目的の周知を強める必要性があるということが示唆された結果となった.

活動成果の公表

中部大学“地域創成メディエーター学生発表会(プラス・エクスプレッション) 2015 年 2 月 23 日
冨田兼弘 「俺って、大学生活で何してきた？」

平成26年度 地域志向教育研究経費 成果報告書(15)

活動項目	⑥シニア大学 Chubu University Active Again College(CAAC)		
フリガナ 氏　　名	ネギシ　ハルオ 根岸　晴夫	所属・職名	応用生物学部・教授
活動課題	学内キャンパスに「ソーセージの手作り体験教室」を開講しよう！		

活動組織
（分担者は本学の専任教員（助手を含む常勤の専任教員），協力者はそれ以外。）

フリガナ 氏　名	代表者及び 分担者	所属・職名	現在の専門	学　位	役割分担
ネギシ　ハルオ 根岸　晴夫	代表者	食品栄養科学科・教授	乳肉利用学/食品加工学	博　士	ネギシ　ハルオ 根岸　晴夫

活動経過と成果

本件は、学内キャンパスに身近な食の手作り体験教室を開講し、シニアを中心とする春日井市民と学生たちとの交流の場をつくることを目的として活動を行った。学内で実施できる候補として、ソーセージ、クッキー、アイスクリームなどの中から、道の駅やテーマパークにある手作り工房で人気の「手作りソーセージ教室」を企画し、2回開催することができた。

この活動では、もの作りを通して、市民と学生らとのコミュニケーションを深め、地域の活性化と学生たちの社会性・自立心の養成に貢献することを期待した。実施場所は、応用生物学部内の食品プラントを使用した。

＜活動経過と成果＞

(1)教室開催要領

春日井市民を対象として15～20名募集し、4～5名/グループに分けて、２回のソーセージ教室を開催した（図1募集ポスター例）。開催時間は3時間以内で完結するように企画した。

各グループには、予めソーセージ作りの技術研修を数ヶ月間受けた学生を1～2名配置した。

教室のスタイルは、各グループに配置した学生らが参加した市民のソーセージ作りをサポートできるようにした。ソーセージ作りのトレーニングを受けた学生たちは10数名に及んだ。

(2)ソーセージテキストの作成

ソーセージ教室のテキスト第1版（図2）を完成させ、参加者に配布した。このテキストは参加者にたいへん喜ばれた。

http://www3.chubu.ac.jp/coc/
地(知)の拠点
第2回
「ソーセージの手作り教室」開催のご案内
中部大学 応用生物学部 食品栄養科学科
教授 根岸 晴夫
中部大学 応用生物学部の食品プラントにて、春日井市民と学生たちが一緒になってソーセージ作りを体験し、できたてのソーセージを試食しながら交流を楽しみます。
開催日時：2015年1月24日(土)
開催時間：午前10時～13時00分頃までの予定
開催場所：33号館1,2階 食品プラント実習室
午前10時00分頃 2階食品プラント入口前にご参集下さい。
参 加 費：無料(先着 16名)
連絡先：参加希望者は、メール、FAX、又は電話で、根岸までご連絡下さい。
E-mail: negishih@isc.chubu.ac.jp
Tel/Fax: 0568－51－8925
お名前と連絡先(電話、又はメールアドレス)をご連絡下さい。
当日、できればエプロンか割烹着をご持参下さい。
入口
33号館

図1　募集ポスター

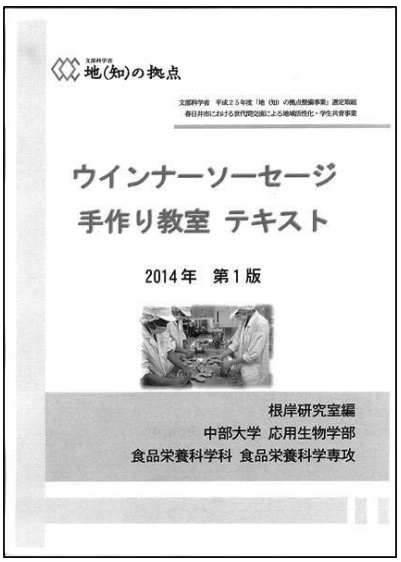


図2　ソーセージ教室テキスト

活動成果の公表

１．ソーセージ教室の実際

（１）ソーセージの種類

ソーセージは、豚挽き肉に塩、調味料、スパイスなどを混ぜ合わせた生地を家畜の腸に詰め、加熱調理したものである。ケーシングに使用する家畜の腸の種類によって、羊腸はウインナーソーセージ、豚腸はフランクフルトソーセージ、牛腸はボロニアソーセージと呼ばれる。ここでは、最も一般的な羊腸を使用したウインナーソーセージの手作り教室を開催した。

（２）ソーセージのレシピー

食べ物は美味しさが第一義であることから、春学期は昨年度の基本配合をベースに学生たちと試作検討を重ねた。その結果、満足できるレシピー（表 1）を完成することができた。参加者は、このレシピーで図 3 の手順に従ってソーセージを作製した。教室で作ったソーセージは美味に仕上がり、参加者の評価はたいへん好評であった。

（３）作り方の手順

図 3 に手作りソーセージの手順を記載した。ソーセージの美味しさは、適度な歯ごたえと弾力のある食感にすることが重要である。理論的には、食塩添加で肉の主要たん白質のミオシン、アクチン、アトクトミオシンの抽出性を高めて、肉の粘りを出す工程が大切であり、教室では生地混合がポイントであることを強調した。

表 1　ウインナーソーセージのレシピー

	原材料	配合割合（%）	試作量（g）	備　考
食　肉	豚挽き肉	77.62	776.2	豚ウデ肉、φ=3mm
塩せき剤	塩	1.35	13.5	ヒマラヤ岩塩
	硝精#10	0.15	1.5	亜硝酸塩10%含有
	ポリリン酸ナトリウム	0.35	3.5	
	L-アスコルビン酸ナトリウム	0.10	1.0	
調味料	コーンシロップ	1.50	15.0	
	上白糖	0.30	3.0	
	コンソメ	0.14	1.4	
	かつお節エキス	0.15	1.5	
香辛料	ホワイトペッパー	0.20	2.0	
	ブラックペッパー	0.05	0.5	
	ナツメグ	0.03	0.3	
	カルワイ	0.03	0.3	
	パプリカ	0.03	0.3	
水	氷水	18.00	180.0	
	合計	100	1,000	

図 3 ソーセージの作り方の手順

（４）ソーセージ手作り教室の開催

秋学期以降、計 2 回のソーセージ教室を開催した。第 1 回は、9 月 19 日（金）13:00～15:30 に開催し、高蔵寺ニュータウンの住民 17 名、本学学生 7 名が参加し、1 チーム 4～5 名ずつグループ分けを行い、5 グループでソーセージ作りを楽しんだ。第 2 回の教室は、1 月 24 日（土）10:00～12:30 に開催した。高蔵寺周辺の住民 12 名、学生 5 名が参加し、前回と同様のスタイルで 4 グループに分け、市民と学生とが交流しながら、手作りソーセージ教室を体験した。

以下に、ソーセージ教室のスナップ写真（図 4～6）を示した。参加者はシニアが大半であり、はじめてのソーセージ教室の体験を楽しんでいた。学生らも熱心に取り組み活動の手応えを感じた。事前準備など負担は大きいが、大学のキャンパスを市民に開放した食の体験型教室は、世代間交流を通して、地域の活性化と学生らの自己成長にも大いに貢献できる食育イベントになり得ることを実感した。

図 4　食品プラントでの教室風景

図 5　ソーセージ生地の混合

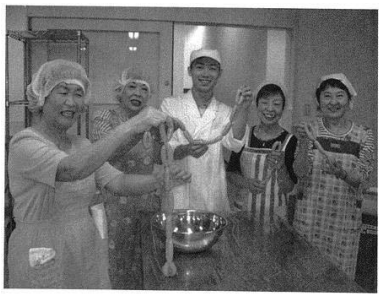


図 6　ウインナーソーセージ完成

平成26年度 地域志向教育研究費 成果報告書(16)

活動項目	⑥シニア大学 Chubu University Active Again College(CAAC)		
フリガナ 氏　　名	はのち　せいこ 羽後　静子	所属・職名	国際関係学科・教授
活動課題	世代間交流による伝統知の継承（高蔵寺塾）プロジェクト		

活動組織
（分担者は本学の専任教員（助手を含む常勤の専任教員），協力者はそれ以外。

フリガナ 氏　　名	代表者及び分担者	所属・職名	現在の専門	学　位	役割分担
ハノチセイコ 羽後静子	代表者	国際関係・教授	国際政治学		プロジェクトの立案・具体化
ワザキハルカ 和崎春日	分担者	中国関係・教授	文化人類学		理論的精緻化・国際関係学部との連携
カワウチノブユキ 河内信幸	分担者	国際文化・教授	アメリカ研究		春日井市国際交流ネットワークとの連携
マスヤマセイイチ 舛山誠一	分担者	中国関係・教授	国際経営学		プロジェクトの立案・具体化サポート
ツシマアキラ 對馬 明	分担者	理学療法学科・准教授	理学療法学		CAAC カリキュラム全体との連携サポート

活動経過と成果

2 年度は、精力的に毎月 ESD フォーラムを開催してきた。8 月以外の毎月と 2 月には、映画上映会も開催した。話題提供者も幅広く多様な分野の専門家を招き、まちづくりについて対話を重ねてきた。これまでに延べ 1000 人近い市民・学生と教員が参加した。例えば元犬山市長の石田芳弘氏によるまちづくりの経験、朝日新聞元海外特派員の伊藤千尋氏は世界各地を取材し、「市民の市民による市民のためのまちづくりー世界の輝く地域から」を報告した。中部大学工学部豊田洋一教授は、「高蔵寺ニュータウン 50 の提案とブラブラまつり」同じく工学部礒部友彦教授は、「ニュータウンが元気になるバス運行のあり方を考える」を報告、なごやまちづくり公社の山中絵里子氏は、春日井市が発表した「未来プラン」に向けて連続ワークショップを開催し、成果報告書にまとめた。ニュータウンのまちの歴史やこれまでの研究活動を学び合うことができた。

また毎回、ニュータウンでつくった野菜での料理の試食や、ニュータウンでつくった手作りの石釜パン、スイーツ、お茶での交流タイムやニュータウン在住の作家によるてづくりアクセサリーやアート展示販売も行った。

シニア大学（ＣＡＡＣ）学生と中部大学生との世代間の知の交流と継承が成立するためには、歴史認識の共有が極めて重要だと考える。　本プロジェクトでは、5 年計画で、世代間の違いをむしろ互いに生かしながら、人生経験を積んだシニア学生の過去への問題関心と中部大学生の未来志向的な立場とが、地の利（高蔵寺ニュータウン）を共通の歴史認識の出発点として、近代知、伝統知、経験知を補い合うことで、持続可能な地域の発展（ＥＳＤ）という観点から、人類の遺産としての伝統知の継承をテーマに教育研究活動を行う「人の集まる場と議論する空間」の構築をめざし、数年後にはＣＡＡＣ独自の特色のある教材をつくり、歴史を基にした未来志向の持続可能な発展（ＥＳＤ）教育の新しい視点の教材を開発することを目標としている。

発表参加団体有志：
国際交流 NGO ピースボート、高蔵寺ニュータウン再生市民会議、あっとわん、ギブアンドテイク、いちょうの会、けやきフォーラム、中部 ESD 拠点推進会議、SALVIFIC、クロスカル、ワーカーズかすがい、コーディネーター協会、野の花他、一般市民と学生

以下のように、毎月第 3 日曜日午後に、世代間の地と知の交流を行う「高蔵寺ニュータウンＥＳＤ対話フォーラム（高蔵寺塾）」開催を準備した。以下がその活動報告である。

2014 年４月 20 日に第３回高蔵寺ニュータウン ESD・対話フォーラム。講師、石田芳弘氏「祭りの心とニュータウンの心」場所、サンマルシェＮＡＳホール

５月 18 日に第４回高蔵寺ニュータウン ESD・対話フォーラム。講師、伊藤千尋氏「市民の市民による市民のためのまちづくりー世界の輝く地域から－ 」場所、サンマルシェＮＡＳホール

６月 15 日に第５回高蔵寺ニュータウン ESD・対話フォーラム。講師、浅井栄子氏「滑舌の良い話し方で自分の思いを伝えましょう」場所、サンマルシェＮＡＳホール

７月 20 日に第６回高蔵寺ニュータウン ESD・対話フォーラム。講師、山中絵里子氏「パリのコミュニティーガーデンからニュータウンの未来を考える」場所、野の花

９月 21 日に第７回高蔵寺ニュータウン ESD・対話フォーラム。講師、豊田洋一氏「高蔵寺ニュータウン 50 の提案とブラブラまつり」場所、サンマルシェＮＡＳホール

10 月 19 日に第８回高蔵寺ニュータウン ESD・対話フォーラム。講師、豊田洋一氏「高蔵寺ニュータウンをより楽しくできる方法」場所、野の花

11 月 16 日に第９回高蔵寺ニュータウン ESD・対話フォーラム。講師、礒部友彦氏「ニュータウンが元気になるバス運行のあり方を考える」場所、サンマルシェＮＡＳホール

12 月 21 日に第 10 回高蔵寺ニュータウン ESD・対話フォーラム。講師、山中絵里子氏「未来プランに向けてのワークショップ」①場所、野の花

2015 年１月 18 日に第 11 回高蔵寺ニュータウン ESD・対話フォーラム。講師、山中絵里子氏「未来プランに向けてのワークショップ」②場所、野の花

2 月 15 日第 12 回高蔵寺ニュータウン ESD・対話フォーラム。講師、山中絵里子氏「未来プランに向けてのワークショップの成果発表と討論会」③場所、野の花

2 月 1 日　番外編　高蔵寺ニュータウン ESD フォーラム映画会。講師　宇井孝司監督

活動成果の公表

１　2014 年 5 月 14 日中部大学 ESD 教育研究発表会で学生が発表
２　2014 年 11 月１～３日　中部大学大学祭にて展示発表
３　2014 年 11 月 11 日　ESD ユネスコ世界会議分科会で報告
４　朝日新聞土曜版『Be』、中日新聞地域版『草の根最前線』で紹介される。
５　2015 年　3 月中部大学チャレンジサイト報告会で学生が発表（予定）
６　報告書作成配布(予定)
７　中部大学ホームページに報告書アップ（予定）

平成26年度 地域志向教育研究経費 成果報告書(17)

活動項目	⑥シニア大学(Chubu University Active Again College : CAAC)		
フリガナ 氏　　名	マチダ　チヨコ 町田　千代子	所属・職名	応用生物学部・教授
活動課題	地域との交流をワイン講座で！シリーズ２ --赤ワインとともに--		

活動組織
（分担者は本学の専任教員（助手を含む常勤の専任教員），協力者はそれ以外。）

フリガナ 氏　名	代表者及び 分担者	所属・職名	現在の専門	学　位	役割分担
（共同研究の場合）					
マチダ　チヨコ 町田　千代子	代　表　者	応用生物化学科・教授	植物分子発生学	農学博士	ワイン講座全体の総括
ツツミウチ　カナメ 堤内　要	分　担　者	応用生物化学科・准教授	高分子化学，有機化学，分析化学	農学博士	ワインの成分分析の成果発表企画
コジマ　ショウコ 小島　晶子	分　担　者	環境生物科学科・講師	植物分子生物学	理学博士	ブドウ樹の茎頂培養の成果発表企画

活動経過と成果

中部大学・UR 都市機構連携講座の一貫として行った。
講座名：地域との交流をワイン講座で！！　シリーズ２～赤ワインとともに～
日時：平成２６年１２月１９日（金）17:00～19:00

場所：中央台団地２２８号棟　地下一階　中央台第２集会所　愛知県春日井市中央台 3-1-2
プログラム：
17:00～17:50　「ワインと友だちになりませんか？　その２」　三輪錠司（中部大学客員教授）
17:50～18:05　「ブドウ樹について 一年間の研究報告」 町田千代子（プロジェクト代表者 中部大学教授）
18:05～19:00　　ワインテイスティングとポスター発表

３種のブドウ品種によるワインの香りの違いを知るために試飲した。ワインの外観（色合いや透明度など）、香り、味わい（甘味、酸味など）の見方について解説を聞きながら試飲した。

ポスター発表：
・　応用生物学部の町田研、堤内研、小島研の４年生、大学院生によるブドウの研究成果を会場内でポスター発表した。

関係者を含めて、約５０名が参加した。開場は、ほぼ満員であった。
応用生物の学生がポスター発表に加えて、場所の案内、受付、試飲の準備等を行い、地域の参加者と交流することができた。地域の方も、講義と試飲を楽しんでいた。前回参加した方もいた。以上の活動を通して、地域との交流とともに、将来的には地域産業活性化に貢献できると期待される。

活動成果の公表

特になし

平成26年度 地域志向教育研究経費 成果報告書(18)

活動項目	⑦高蔵寺ニュータウンのキャンパスタウン化		
フリガナ 氏　　名	ナイトウ　カズヒコ 内藤　　和彦	所属・職名	工学部建築学科・教授 （図書館館長）
活動課題	ＣＯＣ図書館活動の実践と活動拠点施設の設計計画案の作成		

活動組織
（分担者は本学の専任教員（助手を含む常勤の専任教員），協力者はそれ以外。）

フリガナ 氏　名	代表者及び 分担者	所属・職名	現在の専門	学　位	役割分担
ナイトウカズヒコ 内藤和彦	代表者	建築学科教授	建築計画学	工博	統括（協力者：図書館員２名、学生３名、ＮＰＯ団体代表者若干名）

活動経過と成果

○　春日井市と連携した図書館広報活動の実践については、本学と市との調整が不調に終わった為、従来通りの活動を行った。

○　２０１４年１１月２６日（水）１３：００～１５：００　中部大学図書館３Ｆセミナールームにて「ビブリオバトル」を開催した。
参加者数
オーディエンス（聴衆）：２４名
ビブリオバトラー（本の紹介者）：計７名
高蔵寺ニュータウン在住者４名（日高、山田、飼沼、松田）
本学学生３名（伊藤、中川、水野）

・投票の結果、チャンプ本（もっとも好評だった紹介本）は中川氏の「戸村飯店　青春１００連発」に決定した。紹介された本は漫画から哲学的なものまで広範なジャンルに亘った。他に「山里の竹籠職人」「ローマ人物語」「十二国記　月の影　影の海」「リスボンへの夜行列車」「韃靼疾風録」の紹介があった。
・参加者の評判は極めて良好で、次回開催の強い要望があった。（実施アンケート調査結果）

○　活動拠点施設の設計計画案の作成については、立地に関する調査等を行い、藤山台西小学校跡地、岩成台商店街、高森台商店街の３地区を選定した。本学建築学科卒業設計のテーマとして３名の学生を指導し、３地区の拠点施設の設計計画案を学生提案として作成した。
活動成果の公表
成果の公表については、今年度は行っていない。今後については検討中だが、「活動拠点施設の設計計画案の作成」の成果については、本学建築学科卒業設計の作品として、暫時、公表・公開していく予定がある。

平成26年度 地域志向教育研究経費 成果報告書(19)

活動項目	⑦高蔵寺ニュータウンのキャンパスタウン化		
フリガナ 氏　　名	フクイヒロミチ 福井　弘道	所属・職名	中部高等学術研究所　教授
活動課題	愛知県地球温暖化防止活動推進センターと連携した地域レベルの「身近な」地球温暖化対策交流教育によるESDの推進		

活動組織　（分担者は本学の専任教員（助手を含む常勤の専任教員），協力者はそれ以外。）

フリガナ 氏　名	代表者及び分担者	所属・職名	現在の専門	学　位	役割分担
フクイヒロミチ 福井弘道	代表者	中部高等学術研究所副所長　国際 GIS センター所長	環境情報科学・GIS	理学博士	活動代表、統括、講師
ハラマサシ 原　理史	協力者	国際 GIS センター研究員（期限付き）、愛知県地球温暖化防止活動推進員	環境コミュニケーション・普及啓発・地域連携	博士（環境マネジメント）	活動運営、外部協力者調整、ナビゲーター

活動経過と成果

１．活動概要

ESD 世界会議開催の年であり、開学 50 周年という本学の重要な節目である今年、IPCC5 次レポートの公開を機に改めて地球温暖化への取組みの必要が認識されている。一方で地球温暖化問題は京都議定書約束期間以降メディアの取り上げられ方も少なく、市民の関心が低くなっていると考えられ、取組みのモチベーションは以前に比べて決して高いとは言えない。こうしたことから、愛知県地球温暖化防止活動推進センター（以下愛知県センター）や愛知県地球温暖化防止活動推進員（以下推進員）と連携し、地域の身近な事例を用い、IPCC の報告を元に温暖化の現状とその対策（緩和と適応）を学び、地域に根差した「身近な」地球温暖化対策の営みに結びつける交流ワークショップなどの普及啓発を行うことを通じて本学学生と地域市民との交流を促し ESD を推進することを目的とした。

２．活動経緯

(1)アシスタントの募集とレクチャー（場所：中部高等学術研究所）

大学院生から４人のアシスタントを募集し、愛知県センターの作成した「気候変動テキスト」を用い推進員の協力を得て講座内容のレクチャーとアシスタントとしての打合せを行った。

日時：平成 26 年 9 月 24 日（水）15:30～17:30　　参加者：大学院生 4 名

担当：原理史（国際 GIS センター研究員）

内容：登録、ガイダンス、概要説明・気候変動背景情報についての説明・打ち合わせ

(2)連続講座参加者の募集

以下の方法で本学学生等定員 15 人、春日井市内一般市民定員 15 名の連続講座（3 回）の参加者を募集した。

・チラシの作成と施設への設置（春日井東部市民センター、高蔵寺ふれあいセンター）
・高蔵寺ニュータウンの NPO メンバー、環境ボランティアを通じた周知の依頼
・本学 Web ページに募集案内を掲載
・高蔵寺ニュータウンのタウン誌、まちつぼニュース 10 月 1 日号に広告を掲載
・ポスター作成と学内掲示

(3)連続講座の開催

以下の 3 回の講座を実施した

第 1 回　地球温暖化の最新状況～IPCC5 次報告から見えるもの

日時：10 月 18 日(土)　13:30-16:00　場所：春日井東部市民センター第 2 集会室

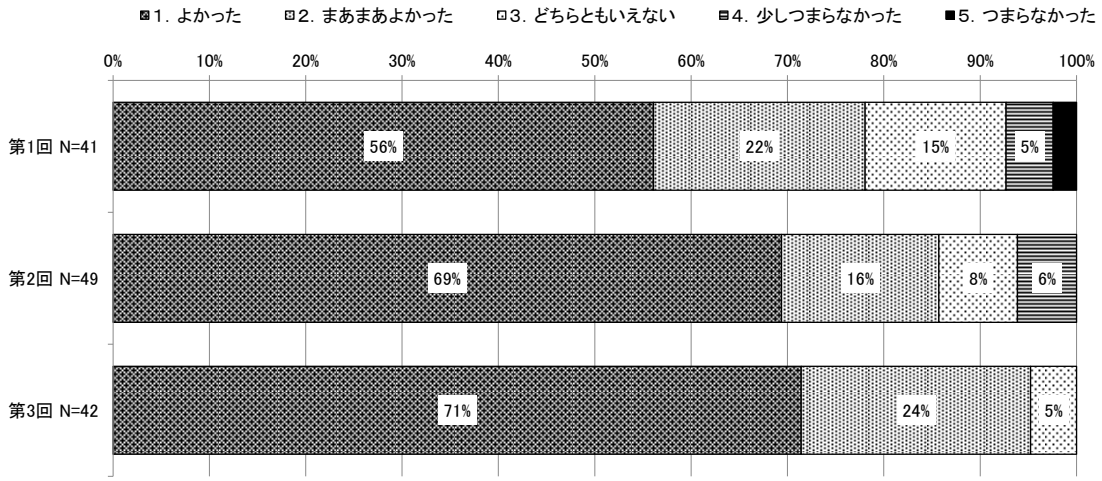
内容：IPCC5 次報告を踏まえ、温暖化問題の歴史、現在の動向、地域の実例等についての講座を行った

プログラム：

〇連続講座ガイダンス～地球温暖化を見つめなおす～　ペアリングアイスブレーク
〇基礎講座～地球温暖化の最新状況～IPCC5 次報告から見えるもの～
〇基礎講座の質疑
〇ペアインタビューワークショップ

第２回　影響と対策の事例～地域から学ぶ温暖化対策
日時：11 月 15 日(土)　13:30-16:00　場所：中部大学リサーチセンター１F　デジタルアースルーム
内容：省エネの実例として中部大学スマートグリッドの現地見学を行うとともに、適応としての防災の情報化や緩和としての小規模事業所の省エネ取組みなどの実例について紹介した。
プログラム：
〇前回の振り返りと今回の予定
〇中部大学スマートグリッドの説明と見学
〇防災の情報化～デジタルアースルーム説明～
〇事業所の省エネ事例～省エネの見える化と春日井市での活動
外部講師：元 ESCO 推進協議会理事（省エネ専門家）　杉山　利夫
〇この講座の振り返り～感想レポート、アンケートの記入
第３回　交流ワークショップ：私たちが地域でできることは何か
日時：12 月 13 日(土)　13:30-16:00　場所：春日井東部市民センター第２集会室
内容：学生と住民が交流しつつ、「身近な」温暖化対策についてのワークショップを行う。
プログラム：
〇前回の振り返り「温暖化の対策、緩和と適応」、今回の流れ
〇ワークシート記入
〇話題提供１～緩和による対策：家庭の緩和策＜うちエコ診断の紹介＞
外部講師：愛知県温暖化防止活動推進センター　事務局長　清本三郎
〇話題提供２～適応による対策：防災対策の基本とは
〇ワークショップ　身近な取組みを共有しよう
〇アンケート記入、総括・修了証授与

３．活動成果
(1)参加者数（延べ 81 人）
第１回　市民 14 人、学生等７人、その他（講師・スタッフ等）７人、計 28 人
第２回　市民 13 人、学生等６人、その他（講師・スタッフ等）11 人、計 30 人
第３回　市民 12 人、学生等４人、その他（講師・スタッフ等）７人、計 23 人
(2)アンケート評価（各回、個別プログラム毎の回答の延べ数集計）
各回ともおよそ８割以上が「よかった」、「まあまあよかった」との評価をいただき、回を追うごとに評価が高くなった。



(3)第３回ワークショップ成果、各班の作成した標語

班	緩和(省エネ)	適応(防災)
１班	こまめにスイッチオフ！	電話がつながらない時は避難場所へ
２班	見たいテレビだけ見よう	常にあると思うな電気と水
３班	省エネはひとりひとりの心がけ	一日の行動家族で共有
４班	「もったいない」をまず考えよう！！	いざとなったら自分の身は自分で守る

活動成果の公表

講座概要、ワークショップ成果、アンケート結果等をとりまとめ、報告書を作成する。

平成26年度 地域志向教育研究経費 成果報告書(20)

活動項目	⑧その他		
フリガナ 氏　　名	采睪（わけびき）　真澄（ますみ）	所属・職名	幼児教育学科・准教授
活動課題	保育者・教員を目指す学生の実践的指導力を育成する地域連携共学・共育支援プログラム（その2）		

活動組織
（分担者は本学の専任教員（助手を含む常勤の専任教員），協力者はそれ以外。）

フリガナ 氏　名	代表者及び 分担者	所属・職名	現在の専門	学　位	役割分担
采睪真澄	代　表　者	幼児教育学科・准教授	造形	修士	学生活動の教育支援及び活動全体の分析
三品陽平	分　担　者	幼児教育学科・助教	教師教育	修士	学生活動の教育支援及び活動全体の分析
花井忠征	〃	幼児教育学科・教授	体育学	博士	学生活動の教育支援
山本彩未	〃	幼児教育学科・講師	運動生理学	修士	学生活動の教育支援

活動経過と成果

本研究では、春日井市の子どもが学び育ち、同時に子どもに関わる学生たちも学び育つ互恵的な教育支援プログラム（わんぱく隊活動）を実施することで、地域と連携できる力を形成する新たな教員養成の形を検討することを目指し、地域の子どもたちを大学に招き、学生たちが企画・準備した活動に共に参加してもらっている。本年度はCOC地域志向教育研究費の助成を受けて2年目になる。

1）学生活動

117人の学生が、年間7回の活動に参加した。学生たちはレクレーション、科学遊び、田んぼでの稲作、畑でのサツマイモ栽培を軸に、オープニングから主活動、エンディングへと、一日の流れを企画・運営しながら、活動ごとに省察を重ねていった。さらに活動の始まりと終わりにおける子どもの引き渡しにおいて、学生たちは保護者と積極的にコミュニケーションをとり、保護者や子どものニーズを聞き、それを企画に反映するように努めた。その反映の一例として、子どもからの「もっと遊びたい」の発言をきっかけに、学生たちはその本意を考察し、自分たちが子どもたちに「やらせる活動」を行っていることに気づき、根本的な見直しを行った10 月の企画が挙げられる。このように学生たちは主体的に活動しながら、地域の子ども・保護者と連携する経験をすることができた。

今年度の新しい取り組みとして、栽培・収穫したもち米を使い、COCの予算を使用して、学生たちのみで餅つき大会を開催した。これは学生の生活経験の充実、食育の学びの観点からと、今後子どもたちとともに行うためのプレ企画である。

また、昨年度本格的に導入された特別支援が必要な子どもたちを迎え入れるグループ「ふれあい隊」について、昨年度の問題を繰り返し議論することによって、今年度は連携強化を図り、大変進化した様子が伺えた。

2）教員の支援活動

わんぱく隊活動は学生の自治的な活動であるため、教員はその自治的・主体的な活動が円滑に進むような支援をおこなった。今年度は全体集会や各ワーキンググループミーティングの開催のあり方、リーダー会議の設置など、昨年度何かと問題の根底にあった連携を強化する仕組みを促した。それとともに田畑の管理のしかたや、科学実験のアイデアの助言、アレルギーの対応についての知識の提供など、学生たちの求める情報と学生とを結びつける援助をおこなった。

なお、本年度は電子書類の処理や印刷などに関して、昨年度COCの予算で購入したノートパソコン・プリンター等によって全て学生たち自律的に行った。

3）考察

まず、子ども、学生、保護者に対して行ったアンケートについて触れる。

参加した子どもたちのアンケートによると、「わんぱく隊を楽しみにしていたか」という質問に対して 96%の子どもが肯定的に答えていた。おおむね、子どもたちにとっても楽しく学べる場となっていたことがわかる。学生たちのアンケートでは、「実践的指導力が向上しているか」という質問に対して、95%の学生が肯定的に答えている。これより、わんぱく隊活動は子どもにとっても学生にとっても、本人たちの実感として共に学び育つ場となっていると言える。

保護者へのアンケートによると、93.6%の保護者が活動そのものを評価しており、学生の行動についても93.6%が肯定的に答えている。実際には様々な問題も学生たちには見られたが、こうした保護者からのアンケートに示唆されるように、保護者の声に耳を傾けながら連携することで、学生たちは保護者の信頼を得ることができたため、このような結果になったと考えられる。

また、子ども、保護者に共通した結果として、活動内容に自然体験・キャンプを非常に高い割合で望んでいることが分かった。今後企画を検討すると共に、その背景も探っていきたい。

わんぱく隊の活動全体の反省点として挙げられたのは、前年度回を重ねるごとによくなっていった学生の活動が、この４月には０ベースに戻る現象が顕著に見られたことである。これについては、今年度は引き継ぎを明文化し、徹底的に行うことで改善を試みる。

活動成果の公表

1）全国フレンドシップ福井大学大会への参加と実践報告の公開

2015 年 3 月 4 日から 3 月 9 日まで開催される全国フレンドシップ福井大学大会に、学生 10 名が参加した。その際に、中部大学のわんぱく隊の活動の実施内容と成果について報告する。

2）2015 年 5 月に開催予定である中部大学 ESD 研究発表会にて、地域社会と連携して共学・共育を進めてきたわんぱく隊の活動を発表する予定である。

3）2015 年 3 月に行われるチャレンジサイト報告会において、わんぱく隊を通しての子どもへの自然体験活動の提供とその成果について発表を行う予定である。

4）2014 年 9 月 27 日に玉川大学に於いて開催された日本教師教育学会にて、「組織で学生は何を学んでいるのかー教員養成学部における学生ボランティア組織の分析よりー」のタイトルで発表した。（三品）

5）中部大学現代教育学研究所より、2015 年 3 月に、わんぱく隊の活動を、フレンドシップ活動報告として冊子にまとめ公表する。

平成26年度 地域志向教育研究経費 成果報告書(21)

活動項目	⑧その他		
フリガナ 氏　　名	カジ　ミホ 梶　　美保	所属・職名	幼児教育学科・准教授
活動課題	４年制保育者養成大学における地域と連携した共学・共育プロジェクト（その２）		

活動組織
（分担者は本学の専任教員（助手を含む常勤の専任教員），協力者はそれ以外。）

フリガナ 氏　名	代表者及び 分担者	所属・職名	現在の専門	学　位	役割分担
カジ　ミホ 梶　　美保	代表者	幼児教育学科・准教授	小児保健・乳児保育・子育て支援	社会科学（修士）	全体統括
ミシナ　ヨウヘイ 三品　陽平	分担者	幼児教育学科・助教	教育学	教育学（修士）	教育実践
ソ　　ジニ 蘇　　珍伊	分担者	幼児教育学科・准教授	社会福祉	博士（学術）	教育実践、データ分析
オオコウチ　オサム 大河内　修	分担者	幼児教育学科・教授	社会的養護	修士（学術）	教育実践

活動経過と成果

平成 26 年度は、すくすく隊として、地域子育て支援ボランティア実践を 51 回、延べ 477 名の学生が実施した（資料参照）。具体的には、当初の活動目標に沿い、1）地域連携の更なる広がりと連携力の強化：学生ボランティアを受け入れ、連携・協力関係を持つことのできる自治体・団体との関係づくりを推進した。2）地域子育て支援実践力の質の向上を図った。活動毎に企画書を作成し、反省会を持ち、月に一回の全体会では活動を報告しメンバー間における学びの共有を図った。その中で教育力：プレゼンテーション力、資料作成力が培われた。各種シアター・バルーン・ふれあいあそびなどの製作・技能なども事前活動を充実することで向上し、教育・保育技術の習得が図れた。大学内の催し、春日井市行政企画にも積極的に参加した。

なかでも春日井市の子どもフェスタである、かすがいわいわいカーニバルが落合公園で開催され 6 万人の参加者があったが、そこにすくすく隊 76 名が参加し、春日井市こども政策課、バルーン業者と産官学協働でブース参加し、1 万 8 千人が参加したことは最大の実績である。また、中部大学ならではの特色である、男子学生による男性の子育て支援活動であるパパと赤ちゃんのためのふれあいあそびは、本年は 4 回開催、バルーンを活用した子育て支援（環境構成、バルーン教室、バルーンレクリエーションなども毎年外部からの依頼も増え子育て支援のツールとして効果的であった。地域の子育て支援団体との交流および世代間交流促進事業の推進についても昨年に引き続き、社会福祉協議会や老人会と連携して進めることができた。

以上、現在まで進めてきた次世代育成支援活動をさらに学外活動、学内活動共に発展することができた。平成 26 年度は加えて子育て支援社会のために重要な世代間交流促進を推進できた。具体的には、シニア世代の子育て支援者との交流事業、子育て支援活動も実施し、子育て支援スキルの学びあいを促進するような取り組み等である。さらに春日井市の行政、地域との連携体制をさらに発展させることができた。

正課外活動における、すくすく隊（中部大学子育てすくすく育て隊）では、地域に出向き、子育て支援実践ボランティア活動を実践する。この活動は、学外において春日井市を中心とした地域の連携の基に学生の共学・教育プログラムを展開することから、大学生による社会貢献、地域活性化につながるとともに、学生自身は地域社会の理解を促され、教育・保育実践力を培われることが期待される活動といえる。

評価として、活動毎に反省会やアンケートなどを実施しているが、2014 年度全体のアンケートを実施中であり、3 月発行予定の報告書に学生たちの学びの感想・意見と共に掲載予定である。

活動成果の公表

〇学会　3題、シンポジウム1題、報告書作成
　・日本保育学会第67回大会（2014年5月17日・18日　於：）にて発表。
「 保育者養成大学における地域と連携した共学・共育プロジェクト
ー地域に育てられ地域に還元する保育力・教育力育成の試みー」（共同）として地域と連携した活動及び教育的効果について報告した。〇三品陽平（中部大学現代教育学部）梶美保（中部大学現代教育学部）
蘇珍伊（中部大学現代教育学部）花井忠征（中部大学現代教育学部）

・日本乳幼児教育学会　第24回大会(2014年11月29日　於：広島大学)にて発表
「保育者養成における実践的指導力の育成-地域と連携した子育てセイン、世代間交流促進ー」（単）」
梶美保（中部大学現代教育学部）
　愛知県小児保健協会　平成26年度学術集会(2015年1月25日　於：愛知県あいち小児保健医療総合センター)にて発表　「幼児教育・保育におけるESDの取り組み-地域と連携した次世代育成支援活動ー」（単）
梶美保（中部大学現代教育学部）

・シンポジウム
中部大学中部高等学術研究所国際ESDセンター主催シンポジウム「高山の場所愛（トポフィリア）を育むためにーESD高山モデルを目指してー」(2014年9月3日　於・高山市役所　地下会議室)のシンポジストとして「現代教育学部のＥＳＤの取組み　地域と連携した次世代育成支援を目指した循環型共学・共育」の講演。

・報告書　2014年度すくすく隊の活動実践と評価を報告書にまとめた（3月作成予定）。

〇学生の研究発表・報告
・第5回ＥＳＤ研究・活動発表会(2014年5月14日)にて幼児教育学科3年リーダー3名が発表。
「すくすく隊の世代間交流促進プログラムの実施と評価」市原諒真　二村成美　水野真奈

・　2014年度チャレンジサイト報告会(2015年3月4日)にて、2014年度の活動実践を幼児教育学科2年リーダー4名が報告予定。

（資料）

2014年度　中部大学子育てすくすく育て隊（すくすく隊）活動一覧　年51回　477名参加

	月日	曜日	時間	活動場所	内容	参加学生
1	4月12日	土	10:00-12:00	げんきっ子センター	手遊び、バルーン	8
2	3月22日	土	10:00-12:00	げんきっ子センター	パネルシアター、ふれあい遊び、手遊び、見守り	7
3	4月18日	金	17:10-18:30	中部大学現代教育学部多目的ホール	バルーンアーチ、簡単オブジェ	12
4	4月19日	土	9:00-15:00	春日井市勝川大弘法通商店街	イベント運営補助(カエルまつり2014)	6
5	5月10日	土	8:00-18:00	かすがいわいわいカーニバル	前日準備、バルーンの森で遊ぼう	60
6	5月11日	日	8:00-18:00	かすがいわいわいカーニバル	当日バルーンの森で遊ぼう	73
7	5月24日	土	10:00-12:00	げんきっ子センター	手遊び、紙芝居、バルーン製作	7
8	6月3日	水	17:05-19:00	中部大学現代教育学部多目的ホール	子育て支援者のためのバルーン講習	16
9	6月10日	水	17:05-19:00	中部大学現代教育学部多目的ホール	子育て支援者のためのバルーン講習	14
10	6月14日	土	10:00-12:00	げんきっ子センター	手遊び、紙芝居、バルーン製作	12
11	6月21日	土	9:15-16:30	三重県いなば園プリズム	発達障害児相談会(運営補助)	3
12	7月4日	金	14:20-15:10	春日丘中学校	啓明祭への取り組み　中学生へのバルーン講習	2
13	7月5日	土	10:00-12:00	げんきっ子センター	パパのためのベビーマッサージとふれあいあそび	6
14	7月12日	土	9:30-12:00	げんきっ子センター	子育て支援プログラム活動	12
15	7月25日	金	10:00-13:30	第二希望の家	「夏まつり」バルーン配布	4
16	8月8日	金	10:00-12:00	中部大学現代教育学部多目的ホール	「保育表現技術講習会」着ぐるみバルーン	13
17	8月20日	水	17:00-21:00	三重大学医学部付属病院	「小児科病棟夏まつり」魚釣り、おもちゃ	10
18	8月23日	土	9:30-11:30	げんきっ子センター	パパのためのベビーマッサージとふれあい遊び	3

19	8 月 24 日	日	11:00-17:00	中部大学名古屋キャンパス	国際ボンディング協会中部支部バルーン講習会（バルーンアレンジメント、運営補助）	6
20	8 月 26 日	火	13:00-15:30	中部大学現代教育学部 多目的実習室	啓明祭への取り組み　中学生へのバルーン講習	6
21	8 月 29 日	金	13:00-15:30	中部大学現代教育学部 多目的実習室	啓明祭への取り組み　中学生へのバルーン講習	6
22	8 月 30 日	土	9:00-12:00	げんきっ子センター	子育て支援プログラム活動	6
23	9 月 4 日	木	10:00-12:00	浅野ゴム株式会社	バルーンフラワー講習	3
24	9 月 14 日	日	9:00-12:00	げんきっ子センター	パパのためのベビーマッサージとふれあい遊び	4
25	9 月 19 日	金	12:00-16:00	春日丘中学校	啓明祭の会場設営補助	7
26	9 月 20 日	土	10:00-14:00	春日丘中学校	啓明祭の見守り	3
27	9 月 27 日	土	17:30-19:30	天使みつばち保育園	秋まつり（バルーン配布）	4
28	10 月 11 日	土	9:30-11:00	げんきっ子センター	見守り	3
29	10 月 17 日	金	17:00-20:00	尾張旭市立西部保育園	運動会会場設営（バルーン装飾）	5
30	11 月 8 日	土	10:00-15:00	交通児童遊園	運営補助	5
31	11 月 14 日	金	17:30-20:00	げんきっ子センター	げんきっ子まつり（環境構成）	9
32	11 月 15 日	土	9:00-16:00	げんきっ子センター	春日井げんきっ子まつり・子ども会議（運営補助）	3
33	11 月 15 日	土	8:50-12:00	岩成台西小学校	「楽しんで防災・冬まつり」バルーン配布	2
34	11 月 16 日	日	8:30-12:30	第二そだち保育園	「そだちバザー」バルーンパフォーマンス、配布	4
35	11 月 16 日	日	9:00-16:00	げんきっ子センター	げんきっ子まつり（運営補助）	9
36	11 月 16 日	日	10:00-15:00	げんきっ子センター	ベビーマッサージ	5
37	11 月 22 日	土	10:00-16:00	春日井市総合体育館	「春日井市ビジネスフェア」バルーン配布	2
38	11 月 29 日	土	9:30-11:00	不二子どもの家	子ども会へのバルーン製作	3
39	12 月 10 日	水	17:05-19:00	中部大学現代教育学部	バルーン講習（バルーンサンタ・ツリー、バルーンフラワー）	8
40	12 月 12 日	金	14:00-17:00	中部大学現代教育学部	バルーン講習（バルーンサンタ・ツリー、バルーンフラワー）	6
41	12 月 13 日	土	11:00-17:00	中部大学リサーチセンター	シニアバルーン講座：「バルーンでサンタ・ツリーをつくろう」	7
42	12 月 14 日	日	11:00-17:00	石尾台集会所	地域バルーン講座：「バルーンでサンタ・ツリーをつくろう」	6
43	12 月 14 日	日	10:00-15:00	柳原商店街（名古屋市）	「柳原商店街冬まつり」バルーン配布	5
44	12 月 20 日	土	10:00-15:00	市役所前　春日井メリーケロスマス	「春日井メリーケロスマス」運営補助	3
45	2 月 1 日	日	10:00-17:00	三重県四日市市橋北子育て支援センター	父親向けの親子イベントへのブース参加、バルーンによる環境構成	13
46	2 月 3 日	火	8:00-18:00	日本ガイシホール	「バルーン競技会 2015」見学、運営補助	12
47	2 月 14 日	土	9:00-12:00	げんきっ子センター	プログラム活動　ふれあいあそび　製作、シアター	15
48	3 月 7 日	土	9:00-12:00	げんきっ子センター	プログラム活動　ふれあいあそび　製作、シアター	15
49	3 月 8 日	日	12:00-17:00	中部大学名古屋キャンパス	中部大学シンポジウム（生命健康科学学部）託児	4
50	3 月 14 日	土	10:00-15:00	名古屋市青少年交流プラザ（ユースクエア）	「ユースクエアまるごとフェスタ」	10
51	3 月 15 日	日	10:00-15:00	名古屋市青少年交流プラザ（ユースクエア）	「ユースクエアまるごとフェスタ」	10
						477

平成26年度 地域志向教育研究経費 成果報告書(22)

活動項目	⑧その他		
フリガナ 氏　　名	ウエノ　カオル 上野　薫	所属・職名	環境生物科学科・講師
活動課題	産官学民協働による庄内川流域におけるカヤネズミ生息環境保全の試み		

活動組織
（分担者は本学の専任教員（助手を含む常勤の専任教員），協力者はそれ以外。）

フリガナ 氏　名	代表者及び分担者	所属・職名	現在の専門	学　位	役割分担
ウエノ　カオル 上野　薫	代表者	環境生物科学科・講師	生態学	博士（学術）	生物調査，協働体制の確立
ホンダ　キヨシ 本多　潔	分担者	国際 GIS センター・教授	空間情報処理学	博士（工学）	航空撮影および画像処理
ワタナベ　ノブヤ 渡部　展也	分担者	国際 GIS センター・准教授	地理情報システム学	博士（工学）	GPS 情報の取得・解析

活動経過と成果

1）産官学民協働のカヤネズミ保全地における保全活動

6 月と 11 月の 2 回にわたり春日井市（環境保全課・都市整備課）および建設コンサルタント会社・中部大学・春日井市民の協働として春日井市カヤネズミ保全地区（春日井市熊野桜佐地区）における保全活動を実施した．詳細を以下に示す．なお，市民への呼びかけは，春日井市環境まちづくりパートナーシップ会議を中心として春日井市役所に実施してもらった．

■第 1 回保全活動

実施日　2014 年 6 月 30 日 9：30～11：30
参加者 35 名（うち学生 10 名，教員 1 名，春日井市役所 4 名，企業 2 名，市民 18 名）
目的：カヤネズミの生息地として 2012 年にオギを移植し，2013 年 12 月に隣地の開発地からカヤネズミを移動させた．春日井市のカヤネズミ保全モデル地区となっている該当エリアにおいて，当面はオギが良好に生育できる状態になるまでの植生管理（除草）を行う．したがって除草の対象は，オギの成長を大きく抑制する種（セイタカアワダチソウ，ヨモギ，クズ）とし，オギの植生内部に混生している対象種をカマや剪定鋏により手作業で茎ごと刈り取る．ツル性のクズについてはできる限り根ごとの除伐を目指した．

作業上の配慮：梅雨を終えて植物が大きく成長したこの時期を狙った．参加者には年配も作業に慣れない若者もいるため，熱中症防止のために作業時間は休憩をとりながらの午前中の 2 時間とした．除伐した植物は，現地に残すと富栄養化し目的とする植生の繁茂に影響を及ぼすので，春日井市が現場から持ち去り廃棄処分とした．

成果：2 時間で全面積の 6 割程度の除草を行うことができた．また，教育啓発の目的から，作業前に本活動の目的やカヤネズミの保全の必要性，対象植物について資料配布のうえ説明した．作業中には，併せてカヤネズミの球巣も探してもらった．前日の予備調査以外のものは発見できなかったが，市民も学生も市役所職員も作業しながらカヤネズミの生息地について多少なりとも興味をもって観察していたようである．

■第 2 回保全活動
実施日：2014 年 11 月 21 日 9：30～12：00　（参加者 30 名，うち学生 18 名，教員 1 名，春日井市役所 5 名，同企業 1 名，市民 5 名）
目的：第 1 回と基本的には同様であるが，緊急度の高かったセイタカアワダチソウの除草は，10 月に研究室での実施が終了していた．そのため対象種をクズに絞りクズが密生しているエリアからオギ生育エリアに侵入している，あるいはこれから放置しておくと次年度に侵入しそうな個体群の根からの除伐を目指した．
作業上の配慮：愛知県が放置している護岸整備用のコンクリートブロックが存在する足場の悪い場所にクズが密生しているので，作業時に足を踏み外したりすることのないように事前および作業中に十分に留意させた．クズの直根は直径 15 cm にもなりしかも深部に入り込んでいたので根の全てを取り除くことは難しかったが，中心となっている個体群については抜けるところはなるべく処理するようにした．作業前の教育的説明は前回と同様に実施した．
成果：手の届く範囲のクズの茎および根，中心個体の除伐が 8 割ほど完了した．カヤネズミの巣は古いものが 1 個確認された．二度目の市民参加者および学生参加者は積極的であり，保全に対する理解も深まっていたようであった．

２）カヤネズミ生態の基礎研究（卒業研究）
本地区におけるカヤネズミの球巣調査（6 月・10 月）および球巣環境の把握のための永久コドラートの作成，植生調査，冬季の捕獲調査，無人飛行機による航空撮影を実施した．その結果，当該地区では 8 科 17 属 23 種の植物が確認された．巣は 6 月に 42 個，10 月は 6 個が確認され，10 月の巣数を昨年度と比べると 4 個少ない結果であった．架巣植物は 100%がオギであり，巣の 64%は 100～140 cmの位置に架巣され，オギ個体が 100 cm未満あるいは 220 cmを超えると架巣されにくい傾向が認められた．7 連夜で実施した捕獲調査では，アカネズミ 18 頭のみが捕獲され，カヤネズミは確認できなかった．捕獲は次年度時期を変えて再度試みる予定である．

３）総括
参加市民および企業・市役所関係者からは，ぜひ今後も続けてほしいと要望が来ている．同様の保全活動を次年度以降も継続し，科学的なモニタリングも必要であることは行政・市民とも理解が進んだようである．本種は市指定希少野生動植物種であり，指定種の積極的な協働保全活動は前例がない．参加学生には，研究と実践を通じて保全に必要な専門知識や技術，行政や市民・企業との繋がりの重要性を学んでもらえたと思う．今後も市民・次世代の自然環境保全の意識向上・協働実践のフラグシップとして協力したい．

活動成果の公表

速報として，春日井市の環境保全委員会の場で 2015 年 1 月に報告した．さらに次年度の本地区での保全活動の説明時に報告し，別途市民からの要望もあるので市民講座等にて公表・議論し，今後の協力者を集める機会としたい．数年後には生態学会等での報告も行う予定である．

３．評　価

内部評価委員会、外部評価委員会の報告

３．評価

内部評価委員会、外部評価委員会の報告

事業の実施内容や進捗状況を評価するために 2 つの評価委員会を開催した。1 つは学内的に活動状況を自己点検する委員会として学長を委員長とする学部長会・研究科長会のメンバー、すなわちＣＯＣ担当副学長を除く副学長、各学部の学部長からなる内部評価委員会である。もう 1 つは学外の学識経験者からなる外部評価委員会である。委員の構成は以下に記載した通りである。（外部評価委員会委員構成表　参照）

内部評価委員会は 2 月 28 日学部長会終了後に開催され、ＣＯＣ推進委員会から後藤副学長・地域連携教育センター長、杉村地域連携教育センター副センター長が出席、またオブザーバーとして春日井市企画政策部企画政策課の上田主幹に出席いただいた。ＣＯＣ事業の説明を行ったあと、内部評価委員より意見をいただいた。主な内容は、「シニア大学（ＣＡＡＣ）は半期を終えて受講生からの評価はどうか。ＣＡＡＣ卒業生には中部大学の地域連携のサポーターとなり、大学の持っていない知的資源、人的資源としてつなげてほしい。ＣＯＣ事業の活動で地域との関係により、学生を地域の人材に育て、地域へ返す好循環を築いてほしい。」などの意見をいただいた。

外部評価委員会は 3 月 2 日に開催された。詳細は、次頁の「外部評価委員会まとめ」に記載した。

外部評価委員会委員構成表

所　属	役　職	氏　名
名古屋大学 大学院工学研究科 結晶材料工学専攻	教授・総長補佐 産学官連携推進本部副本部長 国際連携部長 高等研究院副院長	財満　鎮明
独立行政法人 国立長寿医療研究センター	名誉総長	大島　伸一
愛知県　産業労働部	次長	間所　陽一郎
春日井商工会議所	会頭	松尾　隆徳

＊　委員長は財満鎮明名古屋大学教授。

外部評価委員会まとめ

日　時　：　平成２７年３月２日（月）１３：３０～１５：００
場　所　：　中部大学　リサーチセンター２階大会議室
出席者　：

外部評価委員
（委員長）財満　鎮明　名古屋大学　総長補佐
大学院工学研究科　結晶材料工学専攻　教授
大島　伸一　独立行政法人　国立長寿医療研究センター　名誉総長
間所陽一郎　愛知県　産業労働部　次長
［代理］　清水　幹良　愛知県　産業労働部　産業労働政策課　課長
松尾　隆徳　春日井商工会議所　会頭（東洋電機株式会社　代表取締役会長）
［代理］　山田　真平　春日井商工会議所　事務局長

中部大学出席者（敬称略）
山下、後藤、杉村、櫻井、伊藤、戸田、對馬
春日井市　副市長　中村氏、企画政策部　企画政策課　主幹　上田　敦　氏
陪席　：ＣＯＣ推進委員　磯部、山北、小川、保黒、上野
ＷＧメンバー　　栗濱、宮下、甲田、野田、釆睪
ＮＰＯ連携協議会　藤城氏、治郎丸氏
事務局：地域連携教育センター　庄山、梅村、丹羽

１．学長から、外部評価委員会の冒頭、共同実施機関の春日井市より出席いただいた中村副市長の紹介と以下の挨拶があった。

ＣＯＣ事業については初めての試みであるので、外部評価委員におかれましては、広い視点から深い議論をしていただきたい。また、プランとアクションの遊離を危惧しており、具体的にどう実践していくか、プランの対象者が多様で、変わっていくことを理解することが重要である。

「身土不二（しんどふじ）」という言葉があるように、限られた安定した環境で、安全で健康な生活を送るための基盤は地域となる。学術研究など大学の力を総結集して、地域の課題に答えを出していって欲しい。

後藤副学長・地域連携教育センター長を中心に、教職員５００名の約１／４は直接的に参加し、多くの学生も参加している新しい大学の活動を、根拠に基づき評価ご指導をお願いしたい。

２．財満委員長から、本事業について説明が求められた。

３．後藤副学長・センター長および杉村副センター長から、ＣＯＣ事業の計画と成果について、配付資料に基づき、説明を行った。

４．中村副市長から、以下の補足説明があった。

「地（知）の拠点整備事業」は、中部大学を中心に春日井市が協力して約１年半が経過した。様々な取組みをして、成果は先の報告のとおりであり、準備段階から大学と連携している春日井市としては非常に喜ばしいと感じている。

中部大学アクティブアゲインカレッジが開校され、市としても元気なシニア世代のセカンドライフに大きく貢献していただけるものと期待している。

また、キャンパスタウン化では、高蔵寺ニュータウンも４６年が経ち、少子高齢化が進み、インフラも老朽化し始めており、昨年から一層力を入れているところである。

この４月から、企画政策課の一担当業務であったものをしっかり取り組んでいくため、ニュータウン創生課を新たに立ち上げる。中部大学と一緒になって、総合的なまちづくりを進めていき、市民や地域住民、市全体の活性化につながることを期待している。有益な事業であるので、市として連携をより一層深め、強くしていきたい。

５．引き続き、次のとおり質疑応答があった。

Ｑ１　新科目「地域共生実践」は、何年生から受講し、実践的な部分は何年生から実施するのか。

Ａ１　地域共生実践は平成２７年度秋学期に開講し、１年生の秋学期から受講可能であり、年度進行により２年生、３年生も受けることができる。

先に正課教育を受講する必要はなく、正課と正課外をパラレルで進めてもよい。

Ｑ２　学生が社会との関わりをどう捉えるか、社会人としての意識の切り替えに時間がかかるのでは。

Ａ２　学生は、地域やシニア世代と接することによって、成長している。櫻井教授から報酬型インターンシップにおける学生の成長について、報告する。

学生は参加するまでは消極的だが、社会に出ることで、学ぶことを知り、参加したことを良かったと感じている。この報酬型インターンシップの仕組みは、社長クラスから指導を受けることになっており、学生からは、「刺激を受けた。」「お金では得られない経験をした。」との報告が非常に多いので、今後も推進していきたい。

Ｑ３　報酬型インターンシップでは、参加人数５４名に対し、修了証を発行した者が１名となっているが、これは基準が高いことによるものか、学生の継続性に問題があるのか。

Ａ３　報酬型インターンシップでは、ポイント制を導入し、春学期・秋学期は１ポイント、夏休み・春休みは 0.7 ポイントとし、合計 2.0 ポイントに達した者に修了証を発行することとしている。運用が始まって１年半なので、現時点でクリアした者は少ないが、来年以降は増えていく予定。

なお、授業との調整が難しく、リピーター率が若干低いという問題はあるが、参加者を増やすよう努力していきたい。

Ｑ４　日本が今どういう状況にあるかという背景と結びつけながら説明を聞いた。大学としてここまで踏み込んだプログラムを作ったことは素晴らしい。

しかし、学長が「身土不二」の話しをされたが、わが国は安定した環境の中で、安定した生活が危ない状況になってきている。こうした背景の中で学生が具体的な目標として、何を目指しているか、見えにくい。

春日井市でも、超高齢社会を迎える中で、「核家族・老老社会・独居」の問題はスタンダードなものとなり、逃れることができない深刻なものとなっている。医師、医療施設、介護施設などの資源配分やお金は絶対的に不足しているが、こうした中で、どのように社会保障を凌ぐか。

老老から独居になり、一人になったときに倒れた後どうするか、という問題に対し、このプログラムが具体的にどう答えていくのか。春日井市をこのような状況にさせないために、具体的にどういう人材を育てるのか。

Ａ４　ご指摘の件は、我々も問題意識としては認識し、取組みを進めている。まずは、春日井市や高蔵寺ニュータウンという限られた地域に将来貢献できる人材を育てていきたい。

この問題は大きく難しいものなので、このプロジェクトを第一歩としたい。学生には問題意識を持たせて、将来それを踏まえて地域発展に寄与できるよう活動を進めていく。

本事業の５年間だけではできると思っていないので、まずは基礎として第一歩を作り、大学として継続し発展できるよう進めていきたい。

Ｑ５　アクションを起こして、どう成果を上げるのか、方法論として現時点ではよくわからない。アクションリサーチという全く新しい研究の分野で、地域資源をうまく活用し、現場に介入しながら評価することになる。

従来のサイエンスと異なり、全く新しい知の方法論をどう体系化するのか、についてもまとめていってほしい。

問題を全てまとめてゆくことは不可能だと思っているので、春日井市における２０年から後、３０年後の高齢問題のなかで、何が一番問題なのか最重要課題から列挙して、どの問題から解決するのが有効か、問題設定をして、５年後にはこのような結果に結びついた、というものを示してほしい。

Ａ５　今後、ご指摘の件を明確化して進めていきたい。

Ｑ６　中部大学アクティブアゲインカレッジ（ＣＡＡＣ）では、シニアの方に実践教育をしていると思われる。春日井商工会議所では、平成２７年度にＯＢ人材活用について、地元企業に活躍の場を提供したい、と考えているところである。アウトプットの段階で、商工会議所と連携することは可能か。

Ａ６　ＣＡＡＣでは、シニアの方が自分自身で健康を維持し、地域に還元できるよう、健康をキーワードに、学び直しをしている。雇用も一つのキーワードであり、募集活動では中部大学と関連した企業を定年退職した方も対象にしており、６５歳から日本を支える新たな人生のスタートをする機会をつくりたい。将来的には商工会議所と協力して、仕事をしていただけるのではないか、と考えている。

ＣＡＡＣは、シニアの方が対象であるが、学生もＣＡＡＣの授業やサークル活動で一緒になって交流しており、正課外の体験の場として、学生も成長している。

ＣＯＣ事業は大学の事業なので、人材育成が重要であるが、ＣＡＡＣを開校することによって、当初想定していたよりも学生が活動している。シニアの方も学生との交流を望んでいるので、参加学生を増やしていきたい。

Ｑ７　来年度から地域創成メディエーターの対象が拡大されることになるが、教育としての側面と、また、大学としての地域への貢献をどのように果たすかの２つの側面があると思う。４００名の学生をどういうカテゴリーで、どのように教育していくか、もう少し詳細な制度設計が必要ではないか。

Ａ７　学生には、教育プログラムとして、「地域共生実践」や既存の地域関連科目を提示し、関心がある学生に受講するよう指導していく。キャリア科目も含めると何千人と授業は受けており、正課外の活動をする必要があるものの、地域創成メディエーターは、今後、数百名規模になることを想定している。

今年度の地域創成メディエーターは４名であったが、新科目の「地域共生実践」が始まり、関心のある学生は多いので、全体をとおして春日井市や高蔵寺ニュータウンを活性化していきたい。

Ｑ８　春日井市も商工会議所も大学も、地域にある問題の解決を進めることに異論はない、と伺った。現在は定年後に２０年から３０年の時間があり、しかも人口は激減しており、このままでは企業も持ちこたえられないことがはっきりわかっている。高齢者の知恵、ノウハウ、人脈は衰えることはないので、意欲のある人を活用して生涯現役という社会づくりをしてほしい。

たとえば、「春日井市は生涯現役」と宣言し、元気な高齢者から元気を奪わない街づくりを進める、というプログラムなど、中部大学の本プログラムと連動したはっきりした目標があるとよい。

Ａ８　明確に目標を出せるものがあれば、出していきたい。

Ｑ９　愛知県産業労働部は労働分野も所管しており、この面から話をさせていただくと、現在、本県においては産業人材が不足している状況にある。

厚生労働省や文部科学省の統計データでは、大学卒業生のうち進学も就職もしない者が１２％、就職しても３年以内に１／３が辞めてしまう状況であり、この状況をどうするか、という問題がある。本取組において、学生が在学中に社会に触れることによって、職業観をしっかり持って就職できるよう、進めていただきたい。

Ａ９　大学としてキャリア教育をしており、本プログラムもその一環である。学生にも就職することの重要性がきちんと伝わり、不就職も少しずつ減ってきている。我々の努力が結びついているところであるが、十分とは言えないので引続き、学生が就職するよう努力していく。

新科目「地域共生実践」の来年度開講の準備がほぼ完了し、現在はアクティブ・ラーニングやチーム・ベースド・ラーニングを取り入れ、学部をまたぎ、課題に対して何回も何回も考えるプログラムを立てている最中であり、老老から独居の課題も対象としている。地域創成メディエーターに向かっていくために、「学ぶ」と「動く」を求められるが、どれだけ地域を向くか、一番大事なことは“やらされている感”を出さないことなので、焦点を絞って、しっかりと準備をしていきたい。

Ｑ１０　大学の事情がわかるので、大変なことだと思う。始まって２年なのでいろいろな実験をしながら、プログラム終了時の３年後には中部大学独自の教育プログラムに仕上げていく必要があると思う。是非、根気強く進めていただきたい。

Ａ１０　文部科学省からの補助は５年間であるが、その後も継続し発展させていくことは、大学の方針として決定している。５年経って止めては意味がなく、また継続することは文部科学省との約束でもある。

Ｑ１１　大学がどのように地域貢献できるかは、どのような形で春日井市との協力がなされ、このプロジェクトにフィードバックされるかが大切である。
　春日井市では、ニュータウン創生課を立ち上げる、とのことであるが、中部大学との関係をもう少しご説明いただきたい。

Ａ１１　ニュータウン創生課においては、平成２７年度に策定する未来プランの実行につながっていくよう、キャンパスタウン化や空き家問題などに取り組んでいきたい。
　医療や福祉、小学校統合に伴う施設活用については、具体的に動き始めた。交通環境では、自宅までのアクセスをどのようにするかを検討していきたい。
　諸問題に対し、取組みの濃淡はあるが、この連携を行政全体の中で、どのように取り組んでいくかが大切である。中部大学との協力は減ることはなく、増えていく方向であるので、分野ごとに深めていきたい。

６．財満委員長から、各委員に講評を求めた。

　医療、介護などの社会諸問題の会合に出席しているが、産官学のなかで、学がこのような厳しい状況にどのような回答を出すのか、が問われている。これまでの閉じこもった大学や大学病院は、実際の地域の中で生活の場としての医療や福祉に無関心であり、他学部も医学部ほどではないが似たようなものであった。アカデミアの枠を外れたところで国民や市民が、どういう生活をしているか無関心であったが、今はそのようなことを言っていられない状況である。会議においてはパラダイムの転換していることはよく理解されていても、現場は変わっていない。
　学問の今までの枠組みで、新しい時代の学のあり方を示せても、どこの現場にも当てはめることができなければ役に立たない。
　春日井市も商工会議所も問題を共有し、具体的目標と行動計画がプランニングされ、学がどのような役割を果たさなければならないかについて、相当に具体的に見えるプログラムである。春日井市と商工会議所と大学とが三者一体となり、春日井市、愛知県、日本、そして世界を変えるプログラムとして、結果に結び付けていただきたい。

　今回が初めての委員会参加であったため、事前にＣＯＣ事業についてインターネットで調べてみたところ、ＷＥＢ上に公表している大学は少なく、中には採択以降の更新がされていない大学もあり、それと比較すると中部大学は遥かに先を行っており、非常によい取り組みであると感じた。引き続き目的意識をしっかりと持って進めていただきたい。
　愛知県でも、知事を先頭に日本一元気な愛知が日本を引っ張る、ということで進めているが、必要なところに人が足りないのが現状。若者、女性、高齢者まで

全ての人が活躍できるような地域にしたい。卒業しても働かない若者を少なくし、退職した高齢者が社会で活躍できることにつながる貴大学の取組みは、本県の思いに合致していると考えるので、若者と高齢者をうまくドッキングさせ、しっかりと進めていってほしい。

中部大学とはＴＬＯ推進室がある頃から連携をしており、本商工会議所と大学との連携は強いと自負している。数年後には成果が出ると期待している。産官学として大学と市とタッグを組んで取組んでおり、実際は報酬型インターンシップなど、内部として携わっているので、良い事業になっていくことを期待し、今後とも協力していきたい。

どのような学生を育てるか、大学が地域にどう貢献するか、具体的な形で実践されていて、大変よくやっていただいている。
ただし、今後は明確な成果が求められている。行政と産業界と協力してできる形をつくることが難しいことは承知しているが、春日井市や商工会議所と協力した新しい地域連携のあり方として、分かり易いターゲットを決めて、次年度から本格的に進めていってほしい。

以上

４．新聞記事

高蔵寺NT再生語る

中部大生とお年寄り交流

春日井市松本町の中部大で、学生と高蔵寺ニュータウン（NT）のお年寄り六十二人が高齢化の進むNTの活性化に向けて意見を交わした。

六、七人の班に分かれ、「学生と住民が一緒に文化活動やスポーツをする」「茶話会を開く」などのアイデアを出し合い、意見を集約。最後に班ごとに活性化策を披露した。

中部大が、地域の再生や活性化を目指す大学の取り組みを支援する文部科学省の「地（知）の拠点整備事業」の対象に選ばれたのを受けた試み。昨年度に続き、本年度も十二月まで月一回の交流会などを開いていく。NTでの世代間交流などを担当する生命健康科学部の戸田香准教授は「高齢者と学生が互いの理解を深める機会にしてほしい」と話していた。（佐久間博康）

交流の在り方について意見を交わす学生と高蔵寺ニュータウンのお年寄り＝春日井市松本町の中部大で

2014年5月31日（土）　中日新聞　朝刊・近郊版・16面

＊この記事・写真等は、中日新聞社の許諾を得て転載しています。

地域活性化で7事業

中部大、昨年度の成果報告

中部大（春日井市松本町）が地域活性化に向けて取り組んだ二〇一三年度の活動を紹介する報告会が、学内で開かれ、大学関係者ら四十人が参加した。

中部大は、地域の再生や活性化を目指す大学の活動を支援する文部科学省の「地（知）の拠点整備事業」の対象に選ばれ、一三～一七年度の五年間にさまざまな試みを展開。この日は、七事業の成果が披露された。

学生と高齢者の世代間交流について報告する戸田准教授㊧＝春日井市松本町の中部大で

企業が学生に給料を支払う「報酬型インターンシップ（就業体験）」では、担当した工学部の桜井誠教授が時間的な制約などから、学生が就労企業を選ぶときに苦労したと総括。「学生へのきめ細かい企業情報が必要」と課題を語った。

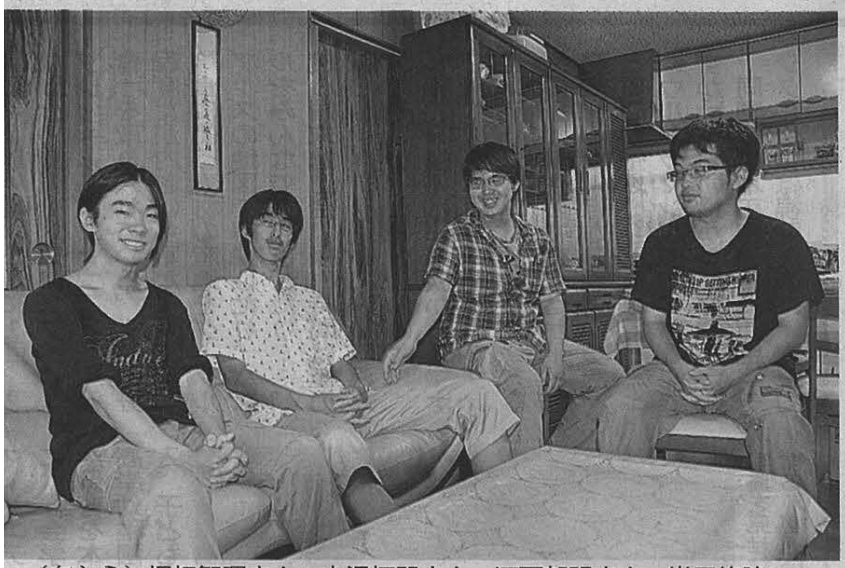
学生と高蔵寺ニュータウン（NT）の高齢者の交流事業では、生命健康科学部の戸田香准教授が、学生らによる高蔵寺NTでのホームステイや世代間交流の様子を発表。学生の三割弱が交流事業に関心を持っているとの調査結果も紹介した。（佐久間博康）

2014年6月28日（土）　中日新聞　朝刊・近郊版・17面

＊この記事・写真等は、中日新聞社の許諾を得て転載しています。

中部大生 空き家シェア

春日井の高蔵寺ニュータウン



（左から）堀畑智暉さん、小沢拓門さん、河西郁明さん、岩田悠睦さん。「お互いに干渉はしない」という＝春日井市石尾台６丁目

家賃一人1.8万円 高齢化の街に活気

春日井市の高蔵寺ニュータウン（NT）で、空き家となっていた一軒家に今春、市内の中部大学の学生4人が暮らし始めた。少子高齢化が進み、空き家も増えているNT。若者人口を一気に増やすのは容易ではないが、街の景色を変える第一歩となるか。

同市石尾台6丁目にある「シェアハウス」だ。三重県伊勢市出身の堀畑智暉さん（工学部）、仙台市出身の小沢拓門さん（応用生物学部）、浜松市出身の河西郁明さん（同）、静岡県磐田市出身の岩田悠睦さん（人文学部）の2年生4人が共同生活している。

家賃は1人1万8千円。光熱費や食費は別だが、家具や家電付き、NPO法人の仲介で敷金や更新手数料が不要など、親の負担を抑えるには魅力的だった。

4人は1年限定で1年生のみ入れる寮にいたため、顔見知りだった。食事の準備や買い物は「帰りが早い僕がすることが多い」と岩田さん。掃除や洗濯、ごみ出しなどの分担は、生活する中で決めてきた。道路の清掃などを通じ、ご近所付き合いも始まった。「若い人が来てくれると助かるわ」と言われたという。

シェアハウスは、中部大による高蔵寺NTの「キャンパスタウン化」構想の一環だ。春日井市や都市再生機構（UR）中部支社とも連携している。NTに約8千戸あるURの集合賃貸住宅のうち約1400戸が空き家。昨年から割引価格で学生の入居を募集したが、今のところ希望者はない。

中部大学生支援課によると、大学近くの物件は家賃3万円からあり、価格差が小さいことや距離の遠さなどが原因とみられる。

シェアハウスの4人はメリットも感じている。「何かあった時に助けてもらえる」「騒いではいけないけれど、隣の部屋に気を遣わなくていい」「マンション住まいより地域の人とコミュニケーションできる」

学生がNTに住むことなどについて、大学が今年初め、住民の意識調査をしたところ、学生に来てほしい、学生と一緒に何かしたいという回答が圧倒的に多かった。

学生1万人余のうち下宿生は約2700人。学生部長補佐の桜井誠・工学部教授は「もしNTに学生が千人住んだら、街は大きく変わる」と語る。自宅から片道2時間かけて通学する学生を含め、どうすればNTに魅力を感じてもらえるのか。模索が続く。（松下和彦）

2014年8月6日（水）　朝日新聞　朝刊・尾張版・27面
＊この記事・写真等は、朝日新聞社の許諾を得て転載しています。

中部大 シニア再挑戦支援

9月から「カレッジ」 地域人材養成

中部大（春日井市松本町）が九月、五十歳以上の人の学び直しや、第二の人生の再チャレンジを支援するシニア大学「アクティブアゲインカレッジ」を開校する。二年制で、新たな仕事に挑戦する人や将来の地域のリーダーとなる人材の養成を目指している。

（佐久間博康）

シニア大学「アクティブアゲインカレッジ」について説明する対馬准教授＝春日井市松本町の中部大で

初年度と次年度は、健康・福祉コース（定員十五人）を開設。いずれも九月に新しい年度が始まり、二年後の七月まで学ぶ。修了時には、学校教育法の規定に基づき、履修証明書を交付する。

健康・福祉コースでは、一年目に健康増進・栄養、ＩＴ、語学や、春日井市の高蔵寺ニュータウン（ＮＴ）などのまちづくりを学習。二年目は、健康・福祉に関する授業や介護職員初任者研修の資格取得に向けた講座、ゼミを受けられる。

授業は九十分一コマで、月曜から金曜までの各日に二、三コマずつ。そのうち週に数コマは、スポーツや文化などのサークル活動に充てる。

中部大は、高齢化が進むＮＴの活性化や、学生と高齢者との世代間交流を進めている。アクティブアゲインカレッジは、中部大が地域の再生や活性化を目指す大学の取り組みを支援する文部科学省の「地（知）の拠点整備事業」に選ばれたのを受けた試み。

二〇一六年度からは、「国際・環境」と「歴史・文化・地理」の二コースを新設する予定。ＮＴの空き家、遊休施設などを今後、教室や大学図書館の分館として整備・活用していく案も検討されている。

担当する生命健康科学部の対馬明准教授(五〇)は「シニア世代の人が、再び地域社会に出て活躍するためのきっかけづくりにつなげたい」と話す。

入試は履歴書と小論文、面接による選抜で、検定料は一万円。出願期間は二十日まで。入学料五万円、授業料は年間十二万円。問い合わせは中部大地域連携教育センター＝電０５６８（５１）１７６３＝へ。

2014年6月6日（金）　中日新聞　朝刊・近郊版・16面

＊この記事・写真等は、中日新聞社の許諾を得て転載しています。

1期生13人 向学心胸に

中部大でシニア大学入学式

中部大（春日井市松本町）で十六日、五十歳以上の学び直しや第二の人生の再チャレンジを支援するシニア大学「アクティブアゲインカレッジ」の入学式があった。県内在住の五十二～七十三歳の一期生十三人が式に臨んだ。（佐久間博康）

一期生は健康・福祉コースに二年間通う。一年目は健康増進・栄養、IT、春日井市の高蔵寺ニュータウンのまちづくりを学習。二年目は、健康・福祉や介護職員初任者研修の資格取得に向け、受講する。

シニア大は、地域活性化を目指す大学の取り組みを支援する文部科学省の「地（知）の拠点整備事業」に選ばれたのを受けた試み。

式では、カレッジ長の後藤俊夫副学長が「意欲的で熱意を持つ皆さんの期待に応えるため、すぐれた学校づくりをしたい」と式辞を述べた。新入生を代表して、伊藤清治さん（五七）が「受講生の本分を全うします」と誓った。授業は二十二日から始まる。

新入生を代表して誓いの言葉を述べる伊藤さん㊥＝春日井市松本町の中部大で

2014年9月17日（水）　中日新聞　朝刊・近郊版・19面

＊この記事・写真等は、中日新聞社の許諾を得て転載しています。

高蔵寺ＮＴの話題発信

中部大生ら　情報紙、ＨＰ作る

中部大（春日井市）工学部電子情報工学科と春日井市のＮＰＯ法人「まちのエキスパネット」が共同で、同市の高蔵寺ニュータウン（ＮＴ）の情報を発信するホームページ（ＨＰ）と情報紙を作った。

ＨＰは「まちこみゅ@春日井東部」、情報紙は「まちこみゅニュースin高蔵寺」。高蔵寺ＮＴで活動する団体の情報をまとまった形で見られるのが特徴だ。

ＨＰは九月に開設。団体や中部大が実施する催しの情報を随時掲載している。情報紙はＨＰのＰＲも兼ねて、今月一日から千部を発行。中部大や地元の小中学校、公共施設などで無料で配っている。今後は三～四カ月に一度作る。

保黒政大准教授（四四）は「総合的な情報サイトを目指した」と説明。「学生のコミュニケーション能力向上や自分の住む街を良くしたいと考える意識付けにもなれば」と願う。

四年の河村彩人さん（二）は「集めた情報の整理や見やすいデザインを考えるのが難しい。でも、みんなの役に立つサイトにしたい」と意欲的だ。

エキスパネット代表の治郎丸慶子さん（五〇）は「ネットワークを広げ、より利便性の高いものにしたい」と語る。

高蔵寺ニュータウンの情報を発信するＨＰや情報紙を立ち上げた中部大やＮＰＯの関係者＝春日井市松本町の中部大で

2014年10月8日（水）　中日新聞　朝刊・近郊版・16面
＊この記事・写真等は、中日新聞社の許諾を得て転載しています。

東大秋山教授ら 長寿社会を語る

中部大

中部大（春日井市）の地域連携市民フォーラムが十一日、春日井市中央台の東部市民センターで開かれた。

東京大高齢社会総合研究機構の秋山弘子特任教授は約百人を前に、「長寿社会に生きる」と題して講演。「若い人が高齢者を支える社会構造を、高齢者も長く働き支え手になるよう見直す必要がある」と指摘。就労意欲の高い高齢者に地域社会で活躍してもらう必要性を説いた。

「長寿社会」について講演する秋山特任教授＝春日井市東部市民センターで

東京のベッドタウンとして発展した千葉県柏市で取り組む社会実験にも触れた。就労システムに基づき、高齢者が農業や保育などの仕事をしているといい、「住み慣れた場所で安心して年をとることができつつある」と手応えを語った。

中部大工学部都市建設工学科の磯部友彦教授は「パワースポットとしての高蔵寺ニュータウン」をテーマに語った。

フォーラムは、地域活性化を目指す大学の取り組みを支援する文部科学省の「地（知）の拠点整備事業」に採択されたのを受けて実施された。

2014年10月12日（日）　中日新聞　朝刊・近郊版・20面

＊この記事・写真等は、中日新聞社の許諾を得て転載しています。

高齢者宅ステイ 成果実感

中部大生 高蔵寺NT 広がりには課題

報告会でホームステイを振り返る学生と高齢者＝春日井市の中部大で

中部大（春日井市）の学生が、高蔵寺ニュータウン（ＮＴ）の高齢者宅で短期間生活する「ラーニングホームステイ」が、昨年に続いて藤山台地区であった。学生と高齢者が交流して一定の成果を上げたが、受け入れは昨年と同じ３世帯にとどまり、広がりには課題を残した。（佐久間博康）

二十五日に中部大で開かれた報告会。藤山台で妻(六七)と二人で暮らす松本源二さん(七二)方で四日間を過ごした生命健康科学部三年の小林愛実さん(二一)と村松藍衣さん(二一)は「シニアの活発さに驚いた」と振り返った。

二人は食事やテニス、バーベキュー、介護支援ＮＰＯの見学などをし、高齢者が地元の人たちとのつながりを大切にしていると感じた。松本さんは「違う世代の人でも違和感はなく、楽しかった。もっと交流が広がってほしい」と語った。

中部大のラーニングホームステイは、高蔵寺ＮＴの活性化を図る取り組みの一環として昨年から始まった。高齢者の孤独を解消する支援策として、フランスで行われている「世代間同居」を参考にしている。

高齢化率が高い藤山台、石尾台地区を対象に受け入れを募り、三世帯が応じた。学生の参加は前年より二人多い六人で、九月中旬に二泊三日か三泊四日した。

一人暮らしの男性の家に泊まった学生もいる。同学部三年の黒田明日香さん(二一)と大竹知佳さん(二〇)で、藤山台の玉井正夫さん(八五)方で二泊三日をともにした。

カレーライスを作って食べたり、草むしりをしたりと、ほとんど家にいた。玉井さんは二十年以上前に妻に先立たれ、二人の娘が県外で暮らしている。孤独なことや、車を運転して買い物に出掛けているため、生活していくには負担が重いのを垣間見た。

担当教員で生命健康科学部の戸田香准教授(四七)は「学生はお年寄りのさまざまな側面を知る機会になり、お年寄りは若い世代と過ごして元気になれたのでは」とホームステイの成果を語る。だが、受け入れ世帯が昨年より増えなかったことには、ＰＲ不足や心理的なハードルの高さがあるとみる。

戸田准教授は来年に向け「全学部の学生に取り組みを伝えるとともに、高蔵寺ＮＴの他の地区の人にも協力を呼びかけて拡大したい。食事会など交流の場を増やすことも重要だ」と話し、高齢者世帯と学生の積極的参加を期待している。

2014年10月28日（火）　中日新聞　朝刊・近郊版・16面

＊この記事・写真等は、中日新聞社の許諾を得て転載しています。

文部科学省「地（知）の拠点整備事業」（平成 25 年度採択）
『春日井市における世代間交流による地域活性化・学生共育事業』
平成 26 年度　成果報告書

発 行 日　　2015（平成 27）年 3 月

編集発行　　中部大学　地域連携教育センター
〒487-8501　愛知県春日井市松本町 1200 番地
電話：0568-51-1763　FAX：0568-51-4659
http://www3.chubu.ac.jp/coc/

印 刷　　木野瀬印刷株式会社
〒486-0958　愛知県春日井市西本町三丁目 235 番地